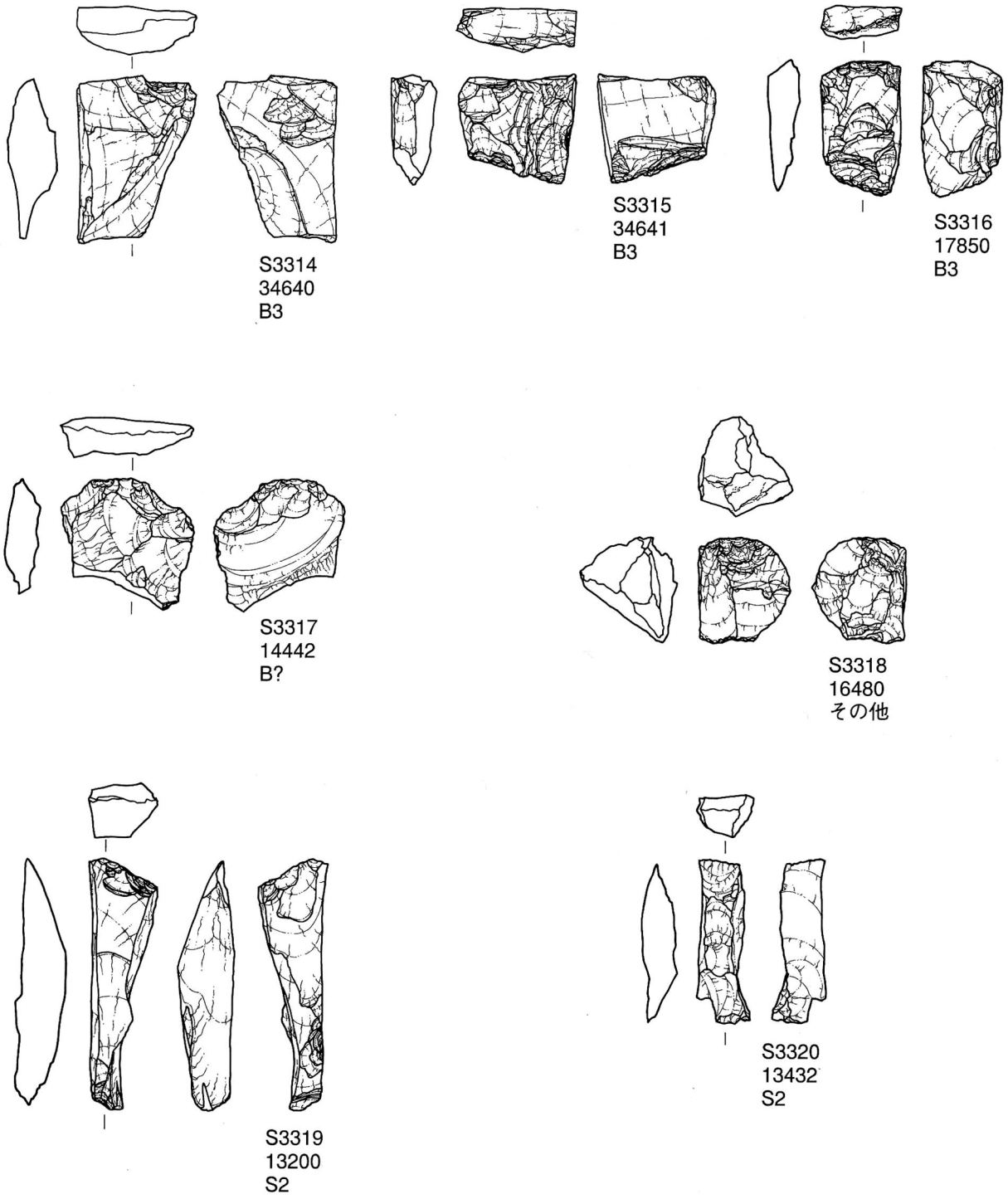
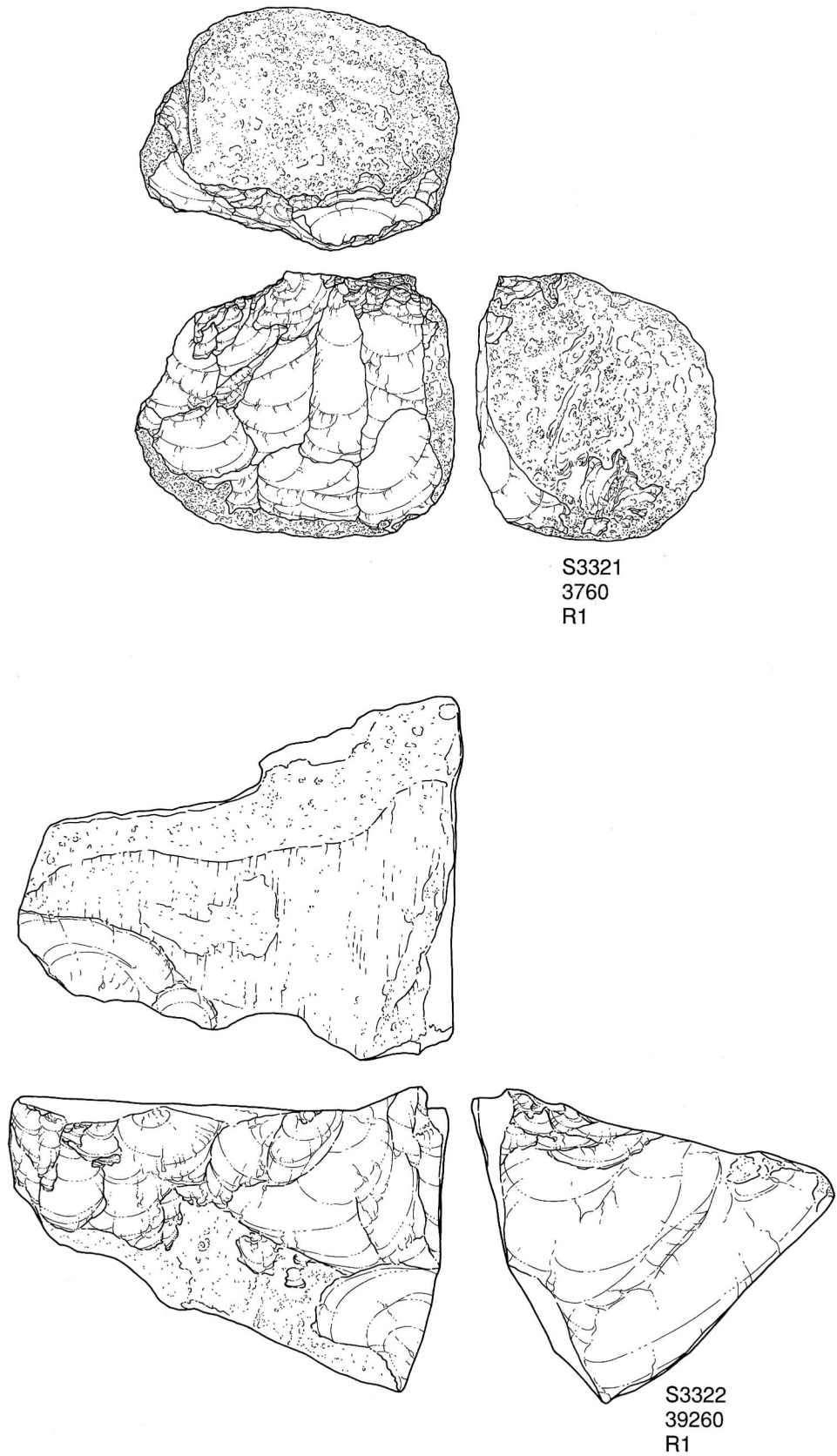


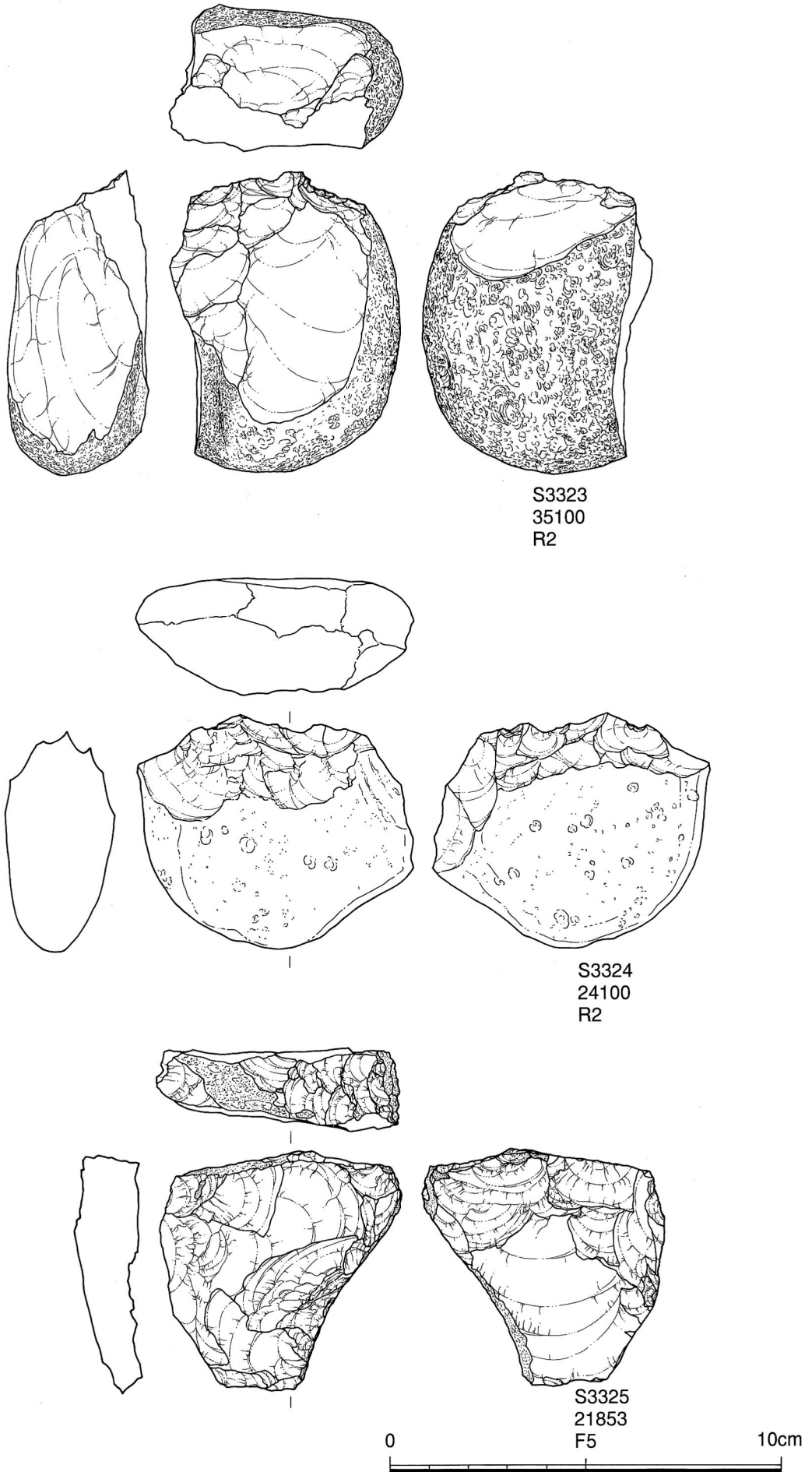
第4節 石器



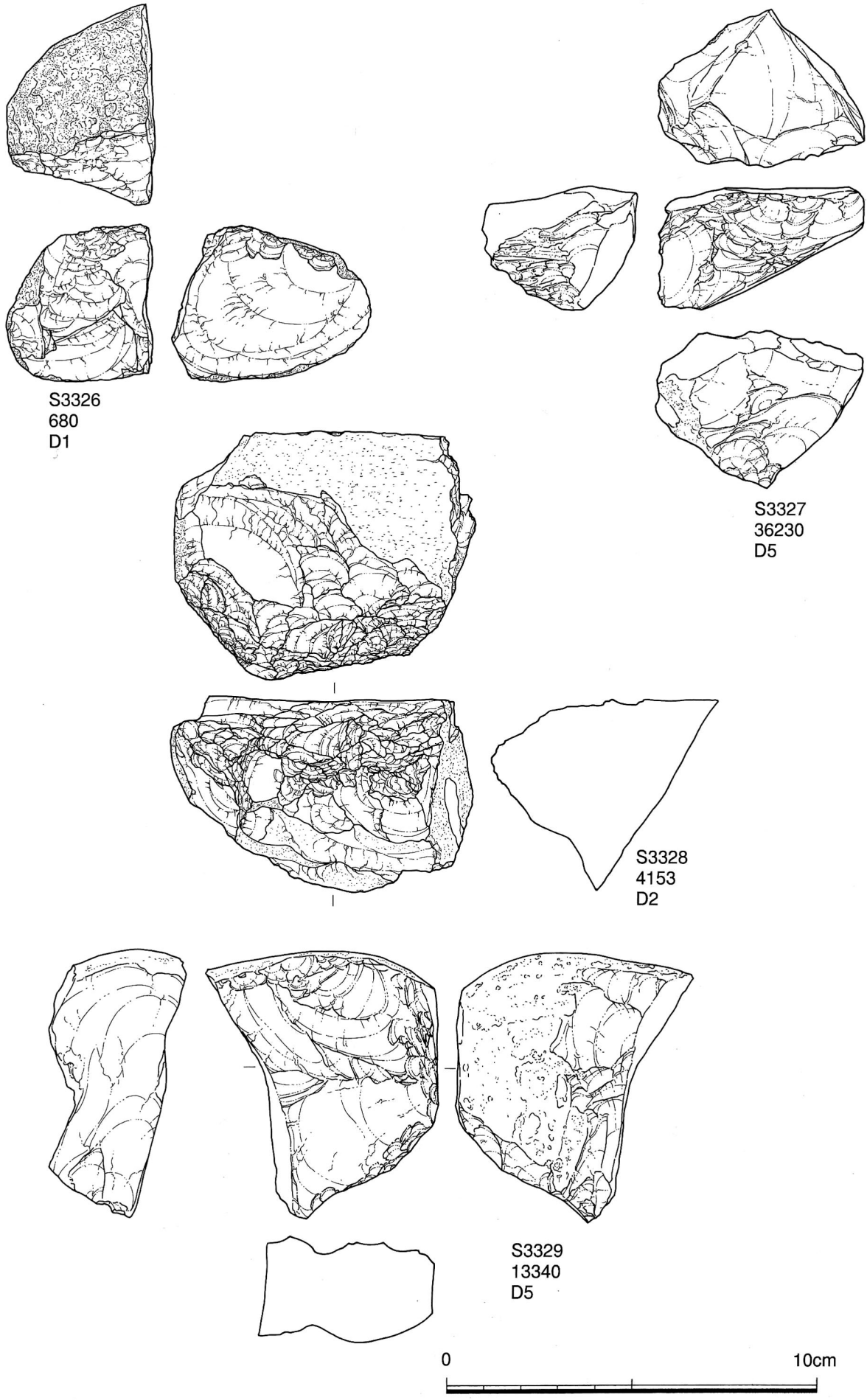
第203図 南区縄文下層（5期）楔形石器-6



第204図 南区縄文下層（5期）石核-1



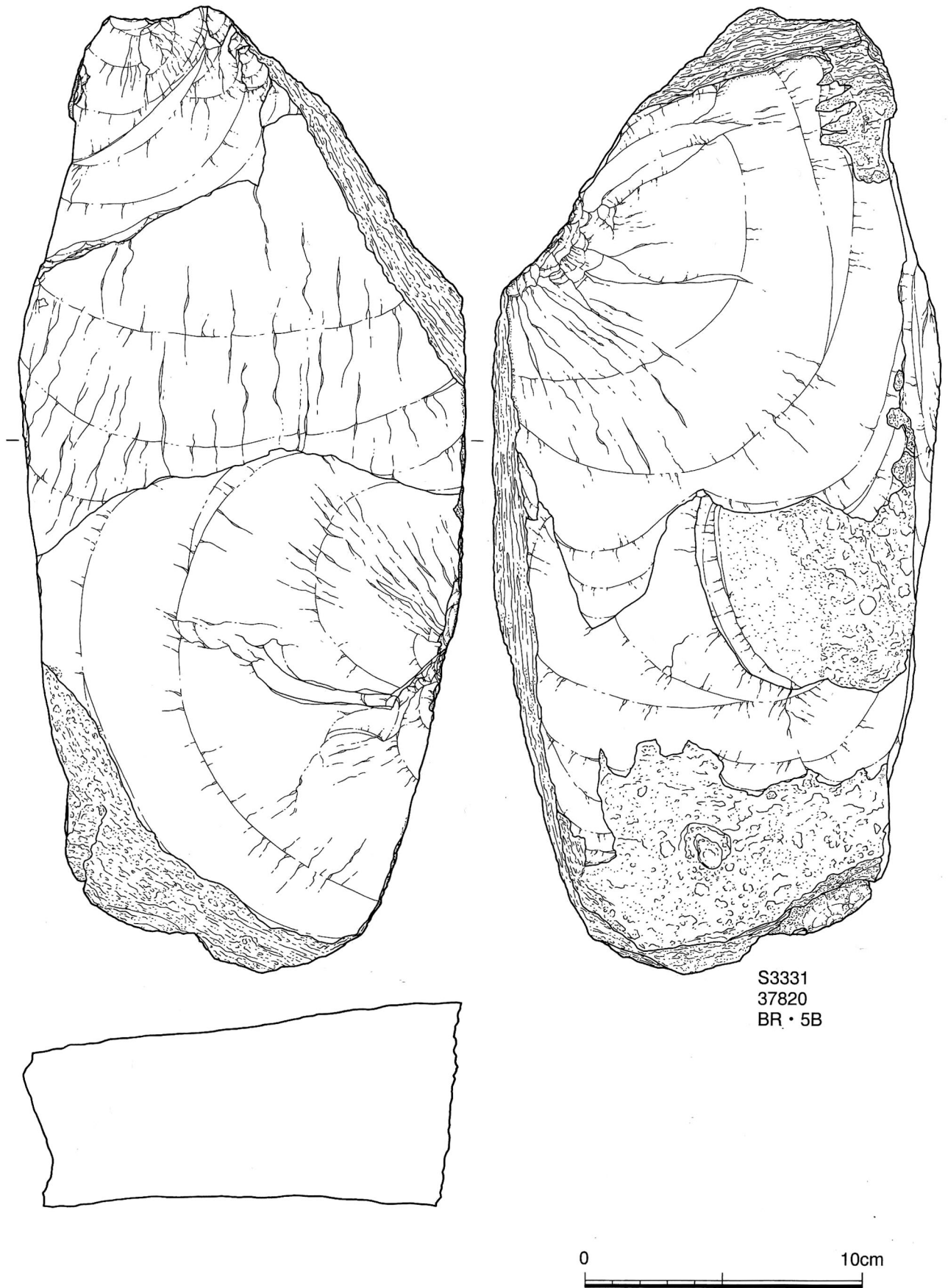
第205図 南区縄文下層(5期)石核-2



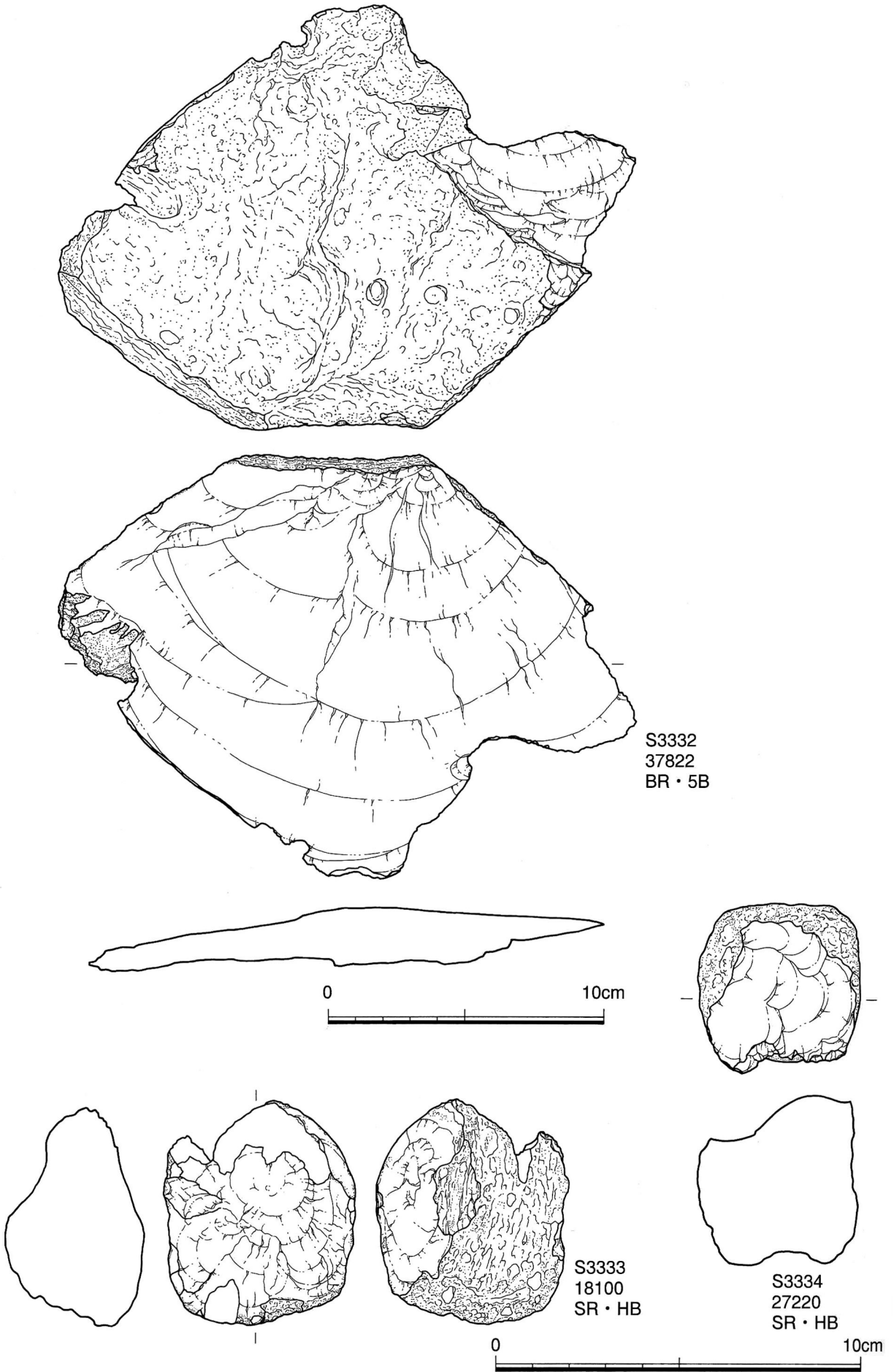
第206図 南区縄文下層(5期)石核-3



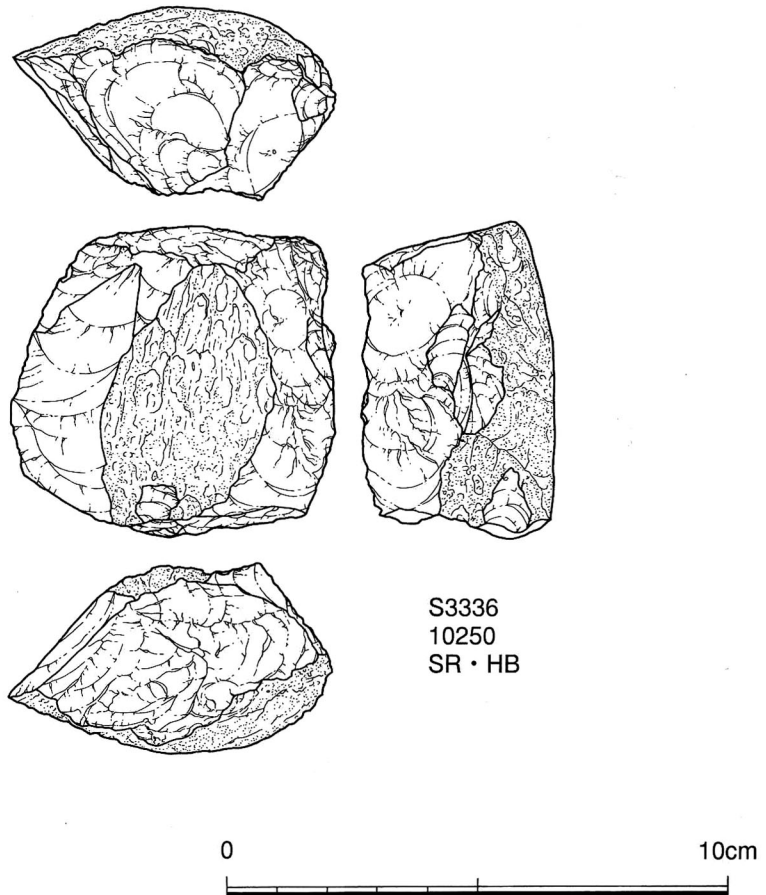
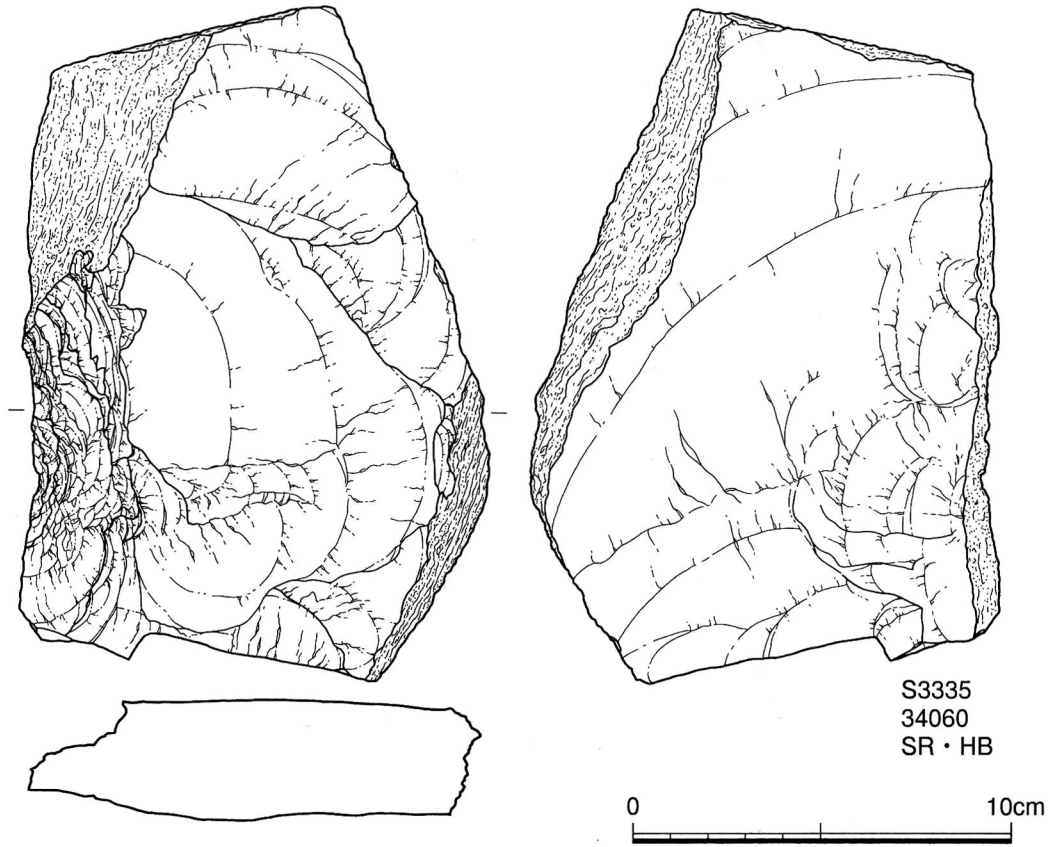
第207図 南区縄文下層（5期）分割原石-1



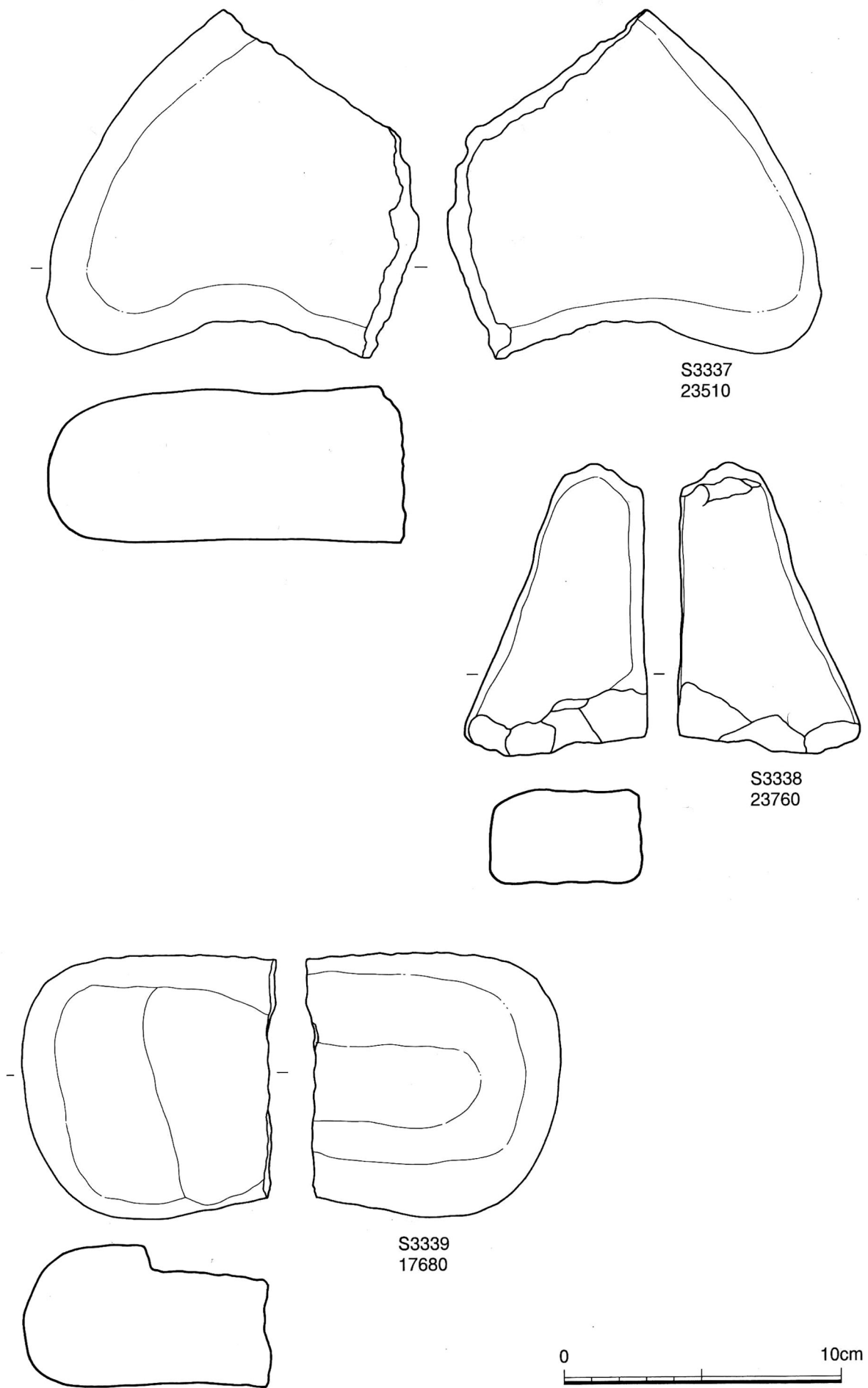
第208図 南区縄文下層（5期）分割原石-2



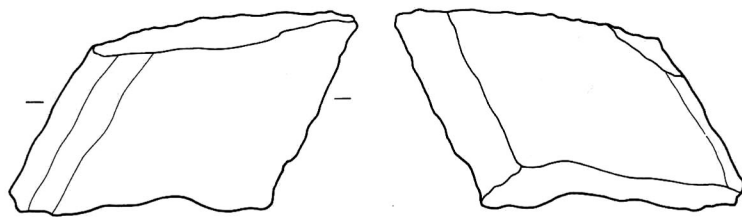
第209図 南区縄文下層(5期)分割原石-3



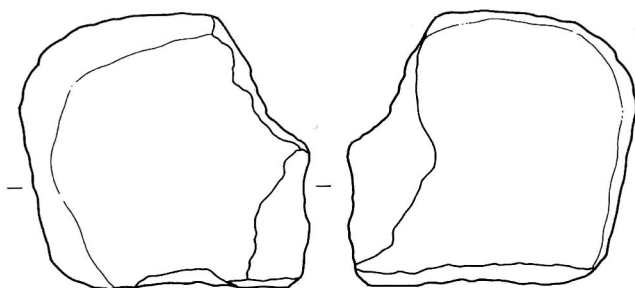
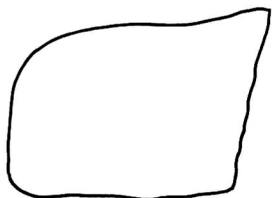
第210図 南区縄文下層（5期）分割原石-4



第211図 南区縄文下層(5期)石皿



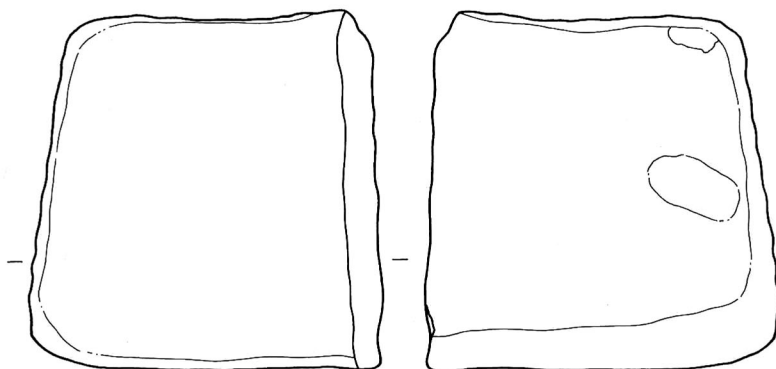
S3340
33990



S3341
32060



S3342
37860

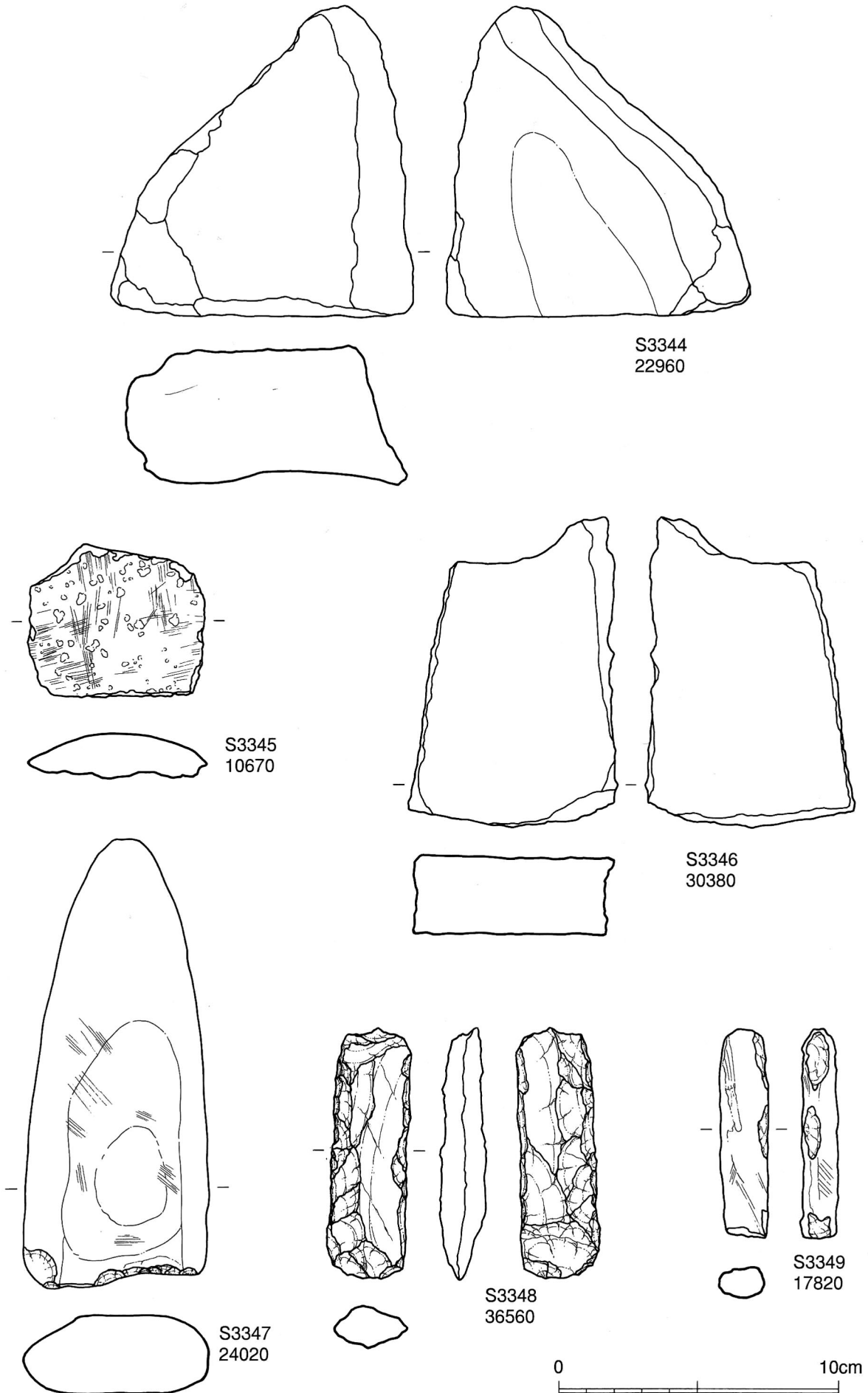


S3343
31000

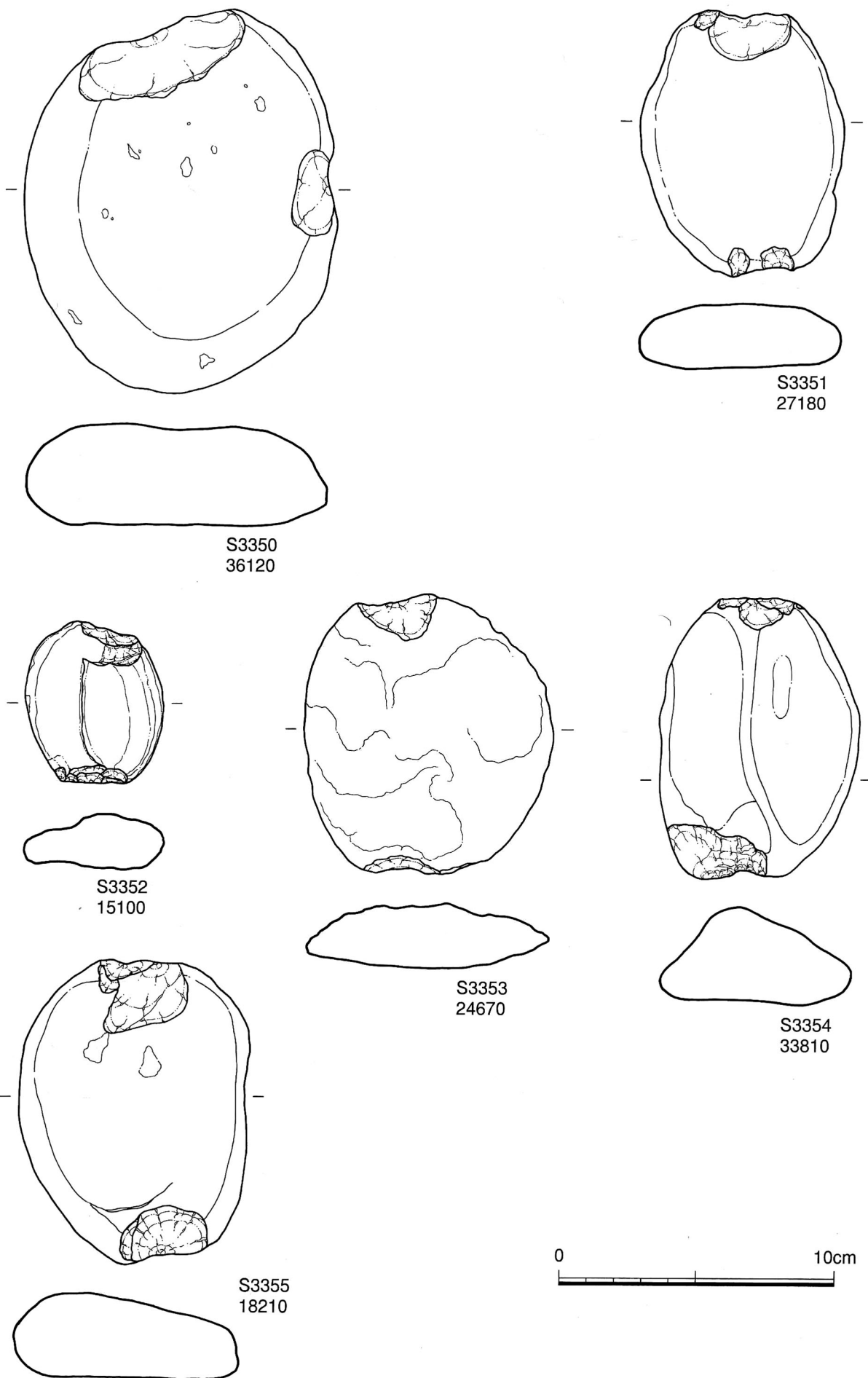


第212図 南区縄文下層（5期）石皿・石剣

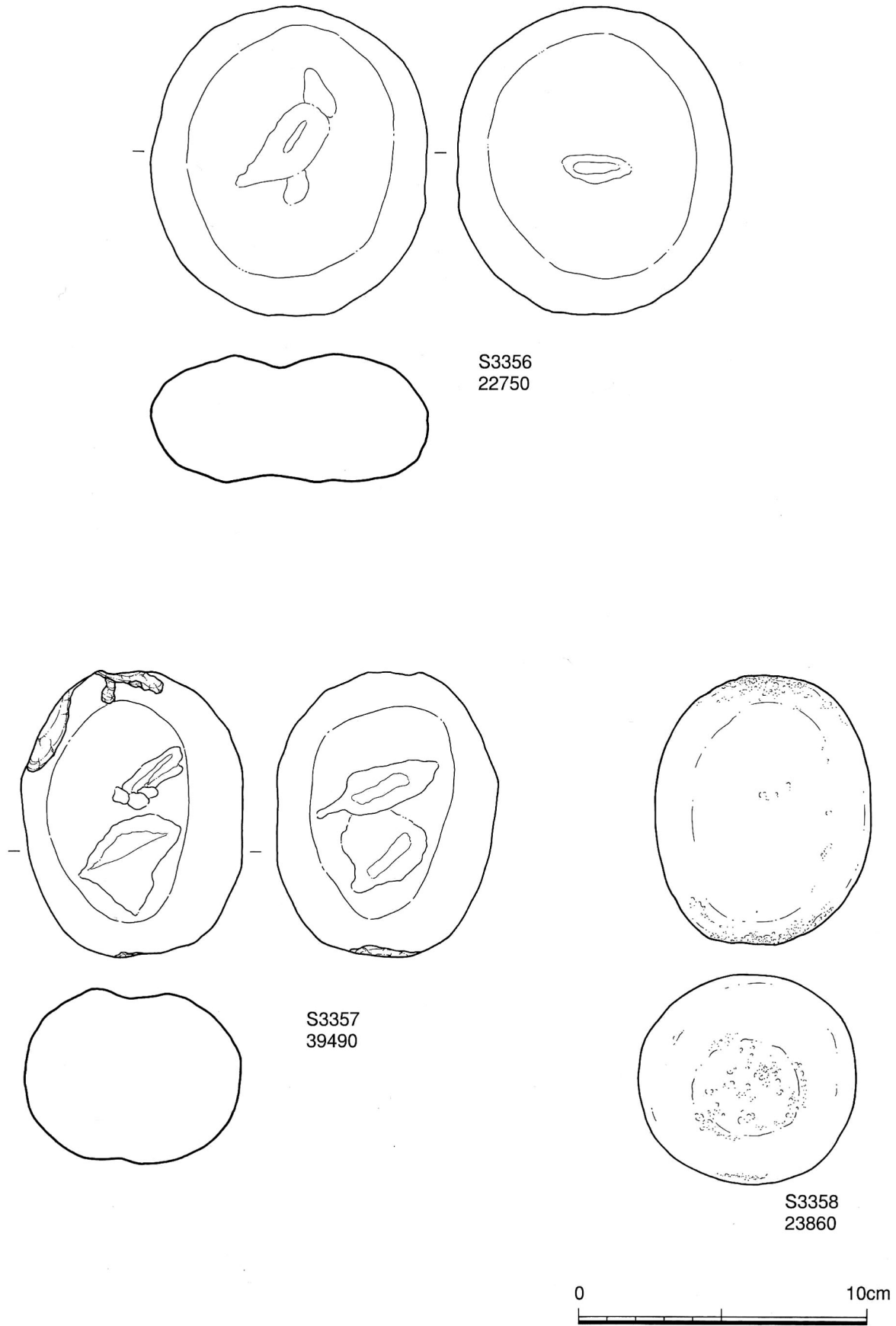
第4節 石器



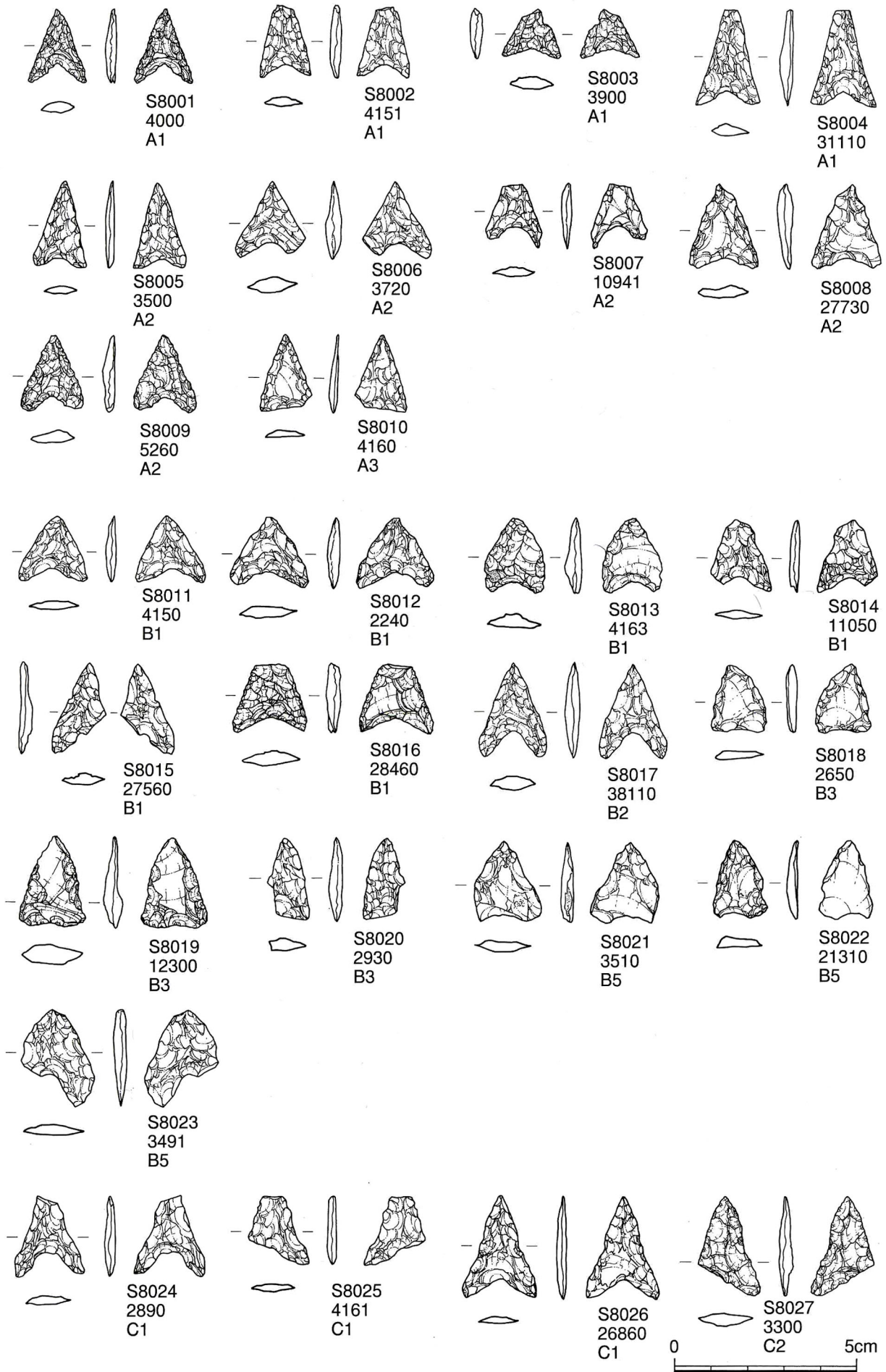
第213図 南区縄文下層(5期)石皿・石斧



第214図 南区縄文下層（5期）石錘

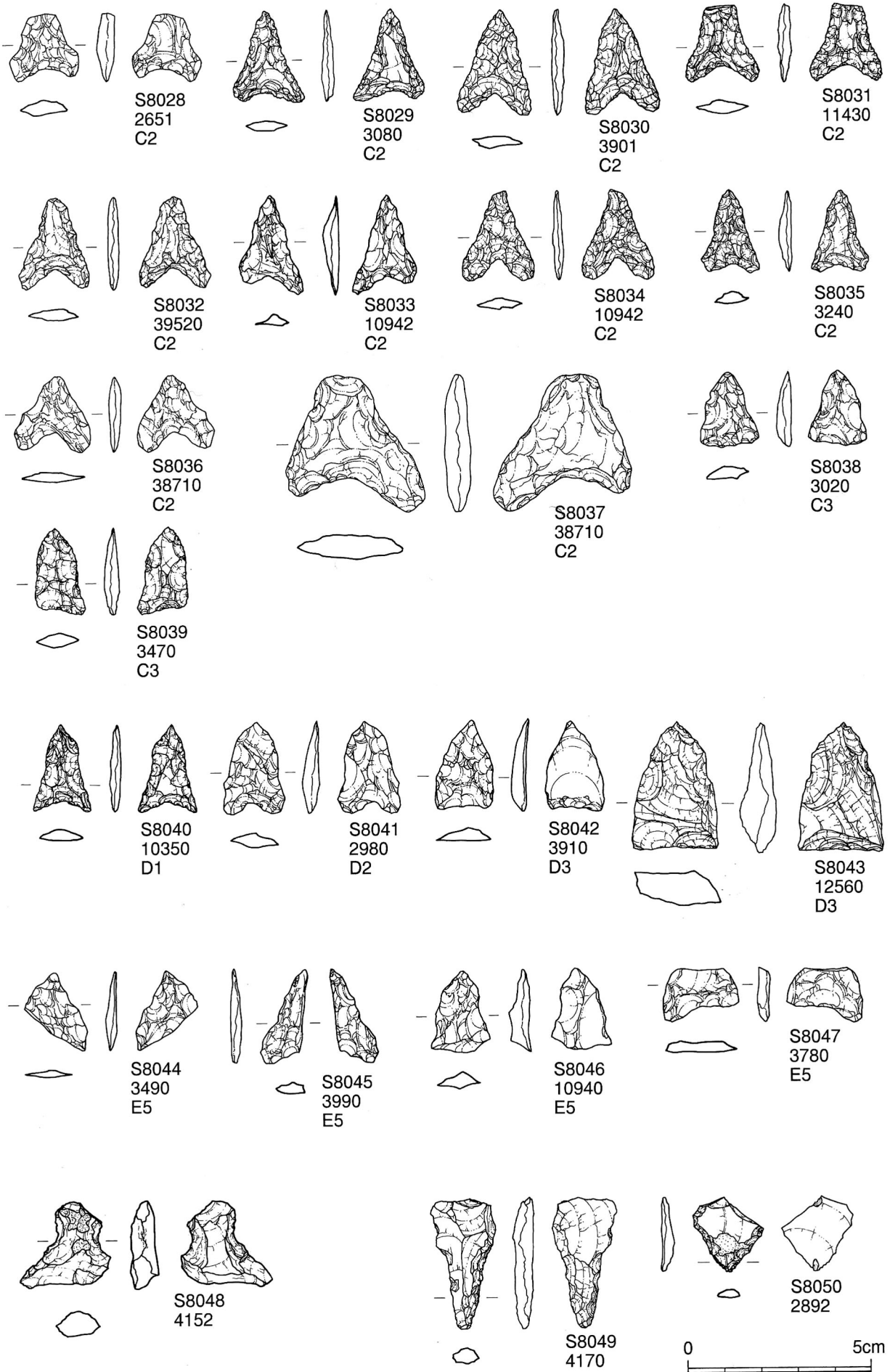


第215図 南区縄文下層（5期）凹石

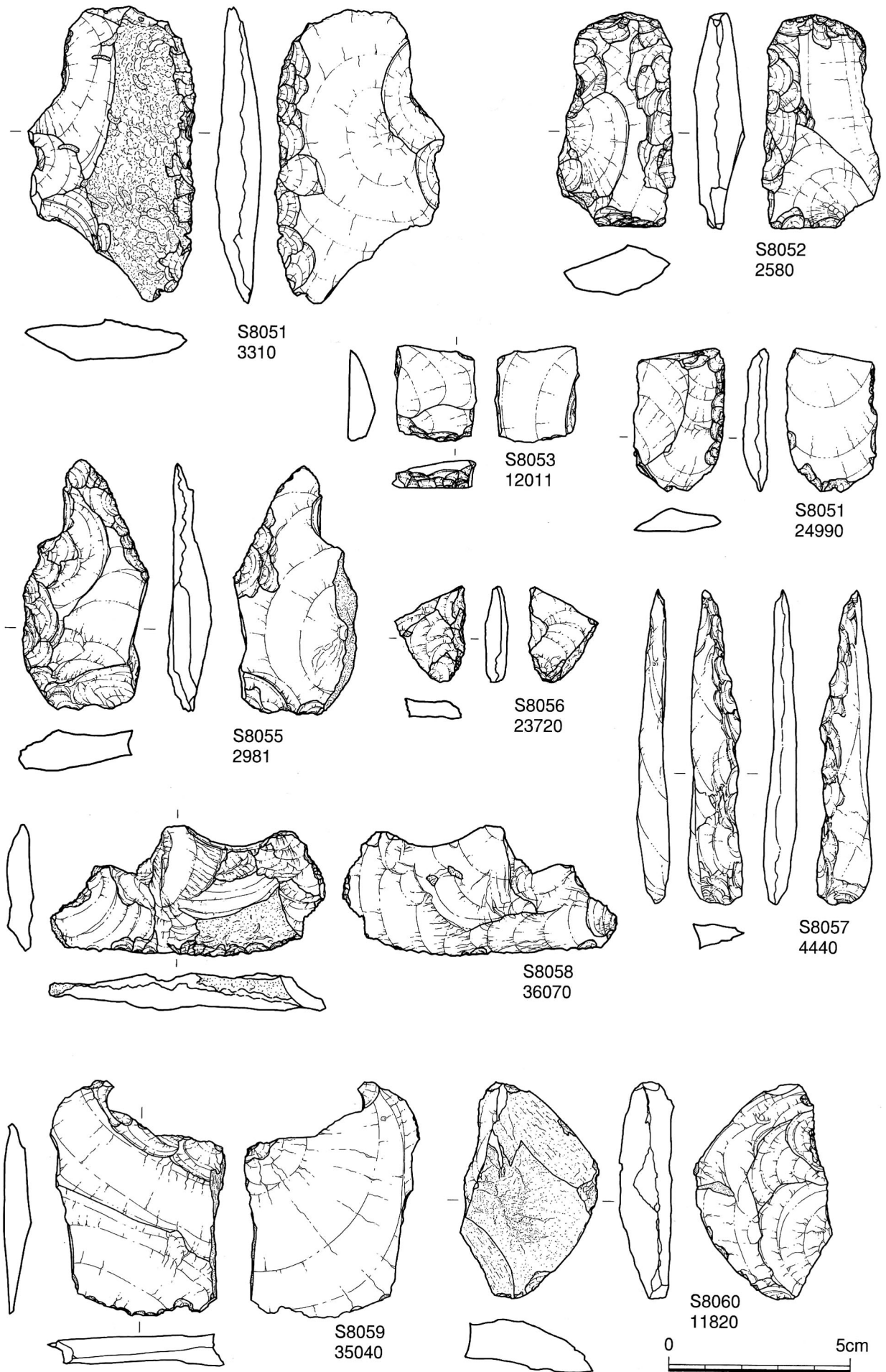


第216図 トレンチ調査出土石鏃

第4節 石器

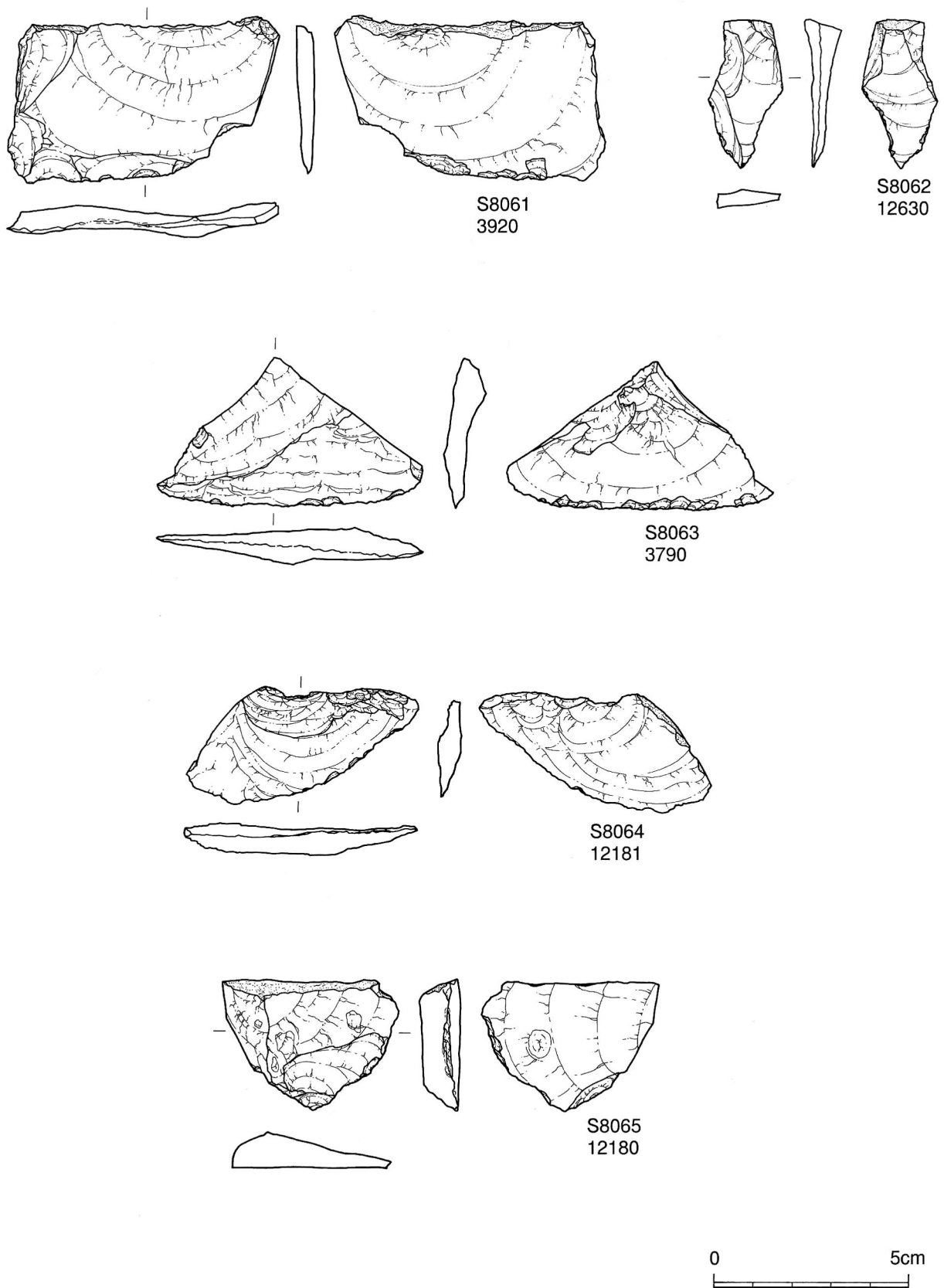


第217図 トレンチ調査出土石鏃・石匙・石錐

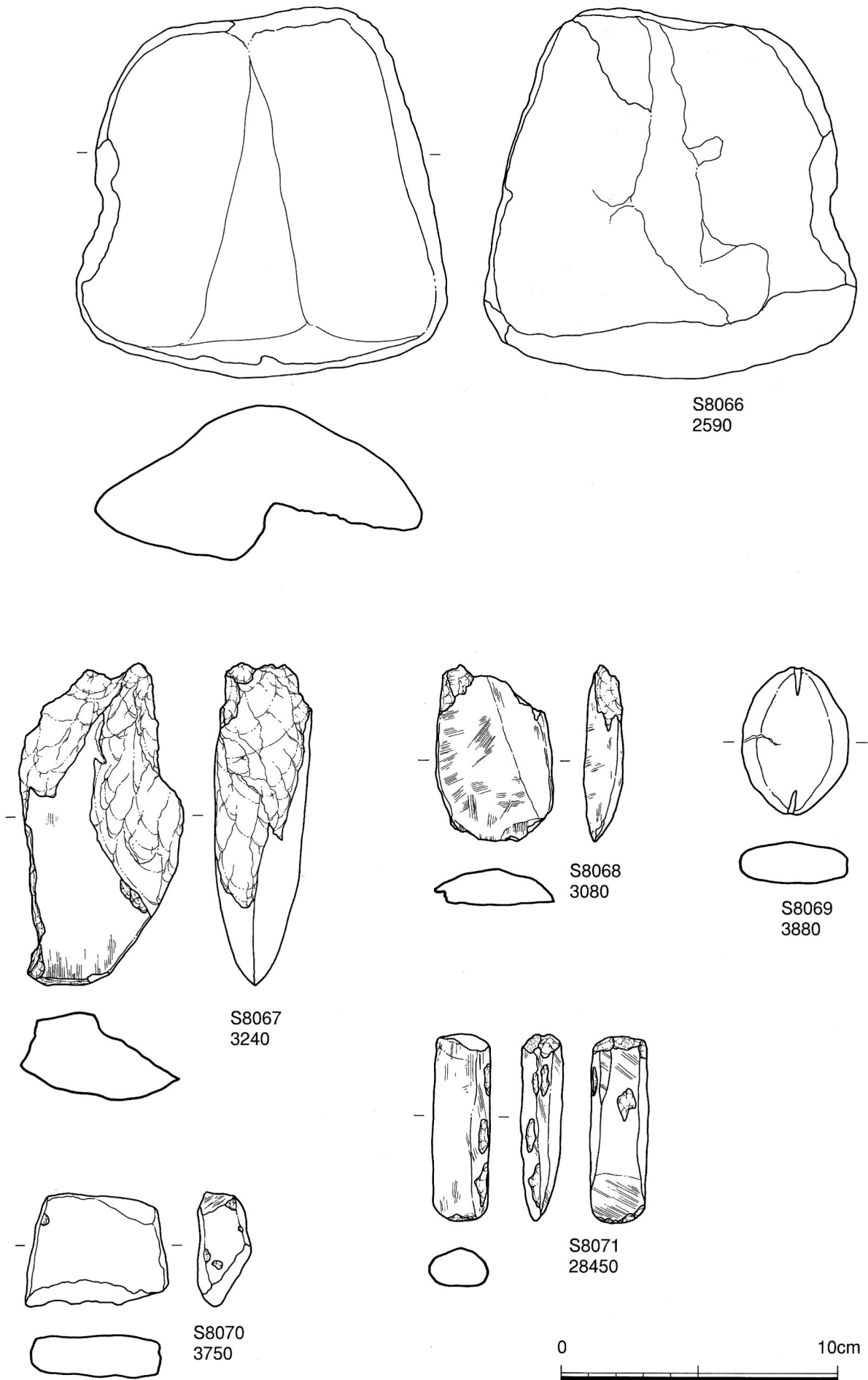


第218図 トレンチ調査出土削器・使用痕のある剥片

第4節 石器

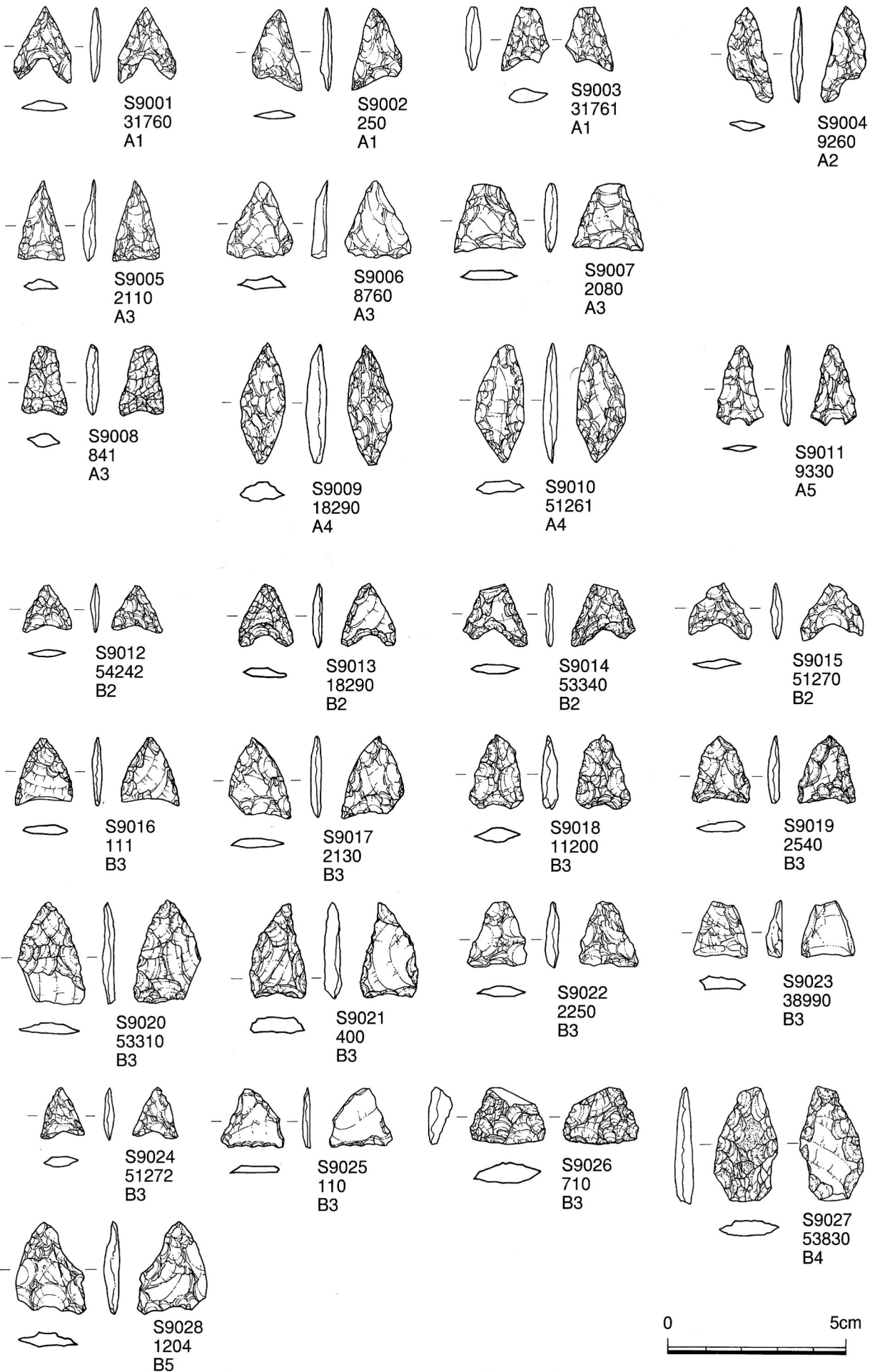


第219図 トレンチ調査出土使用痕のある剥片

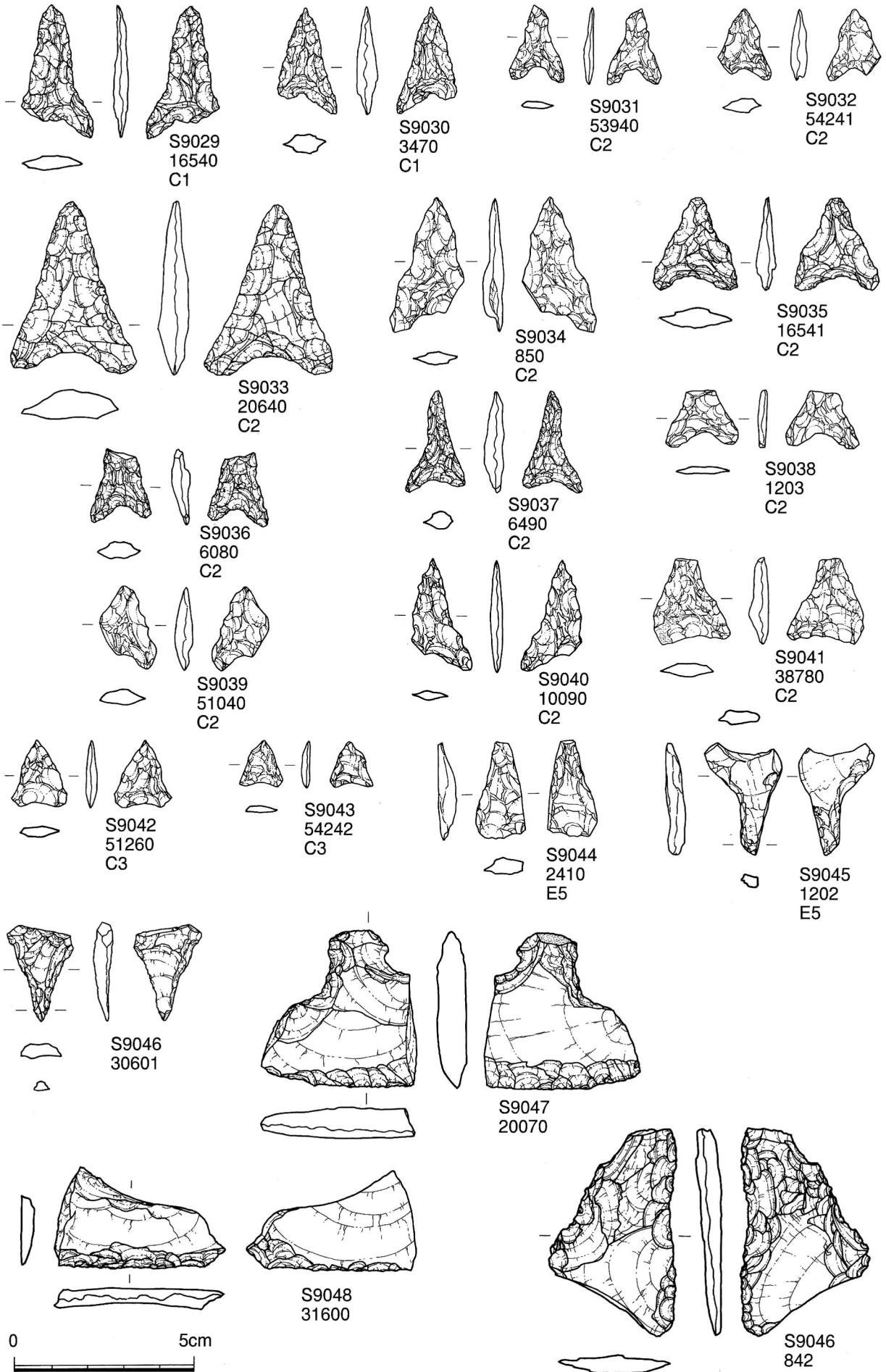


第220図 トレンチ調査出土石皿・石斧・石錘

第4節 石器

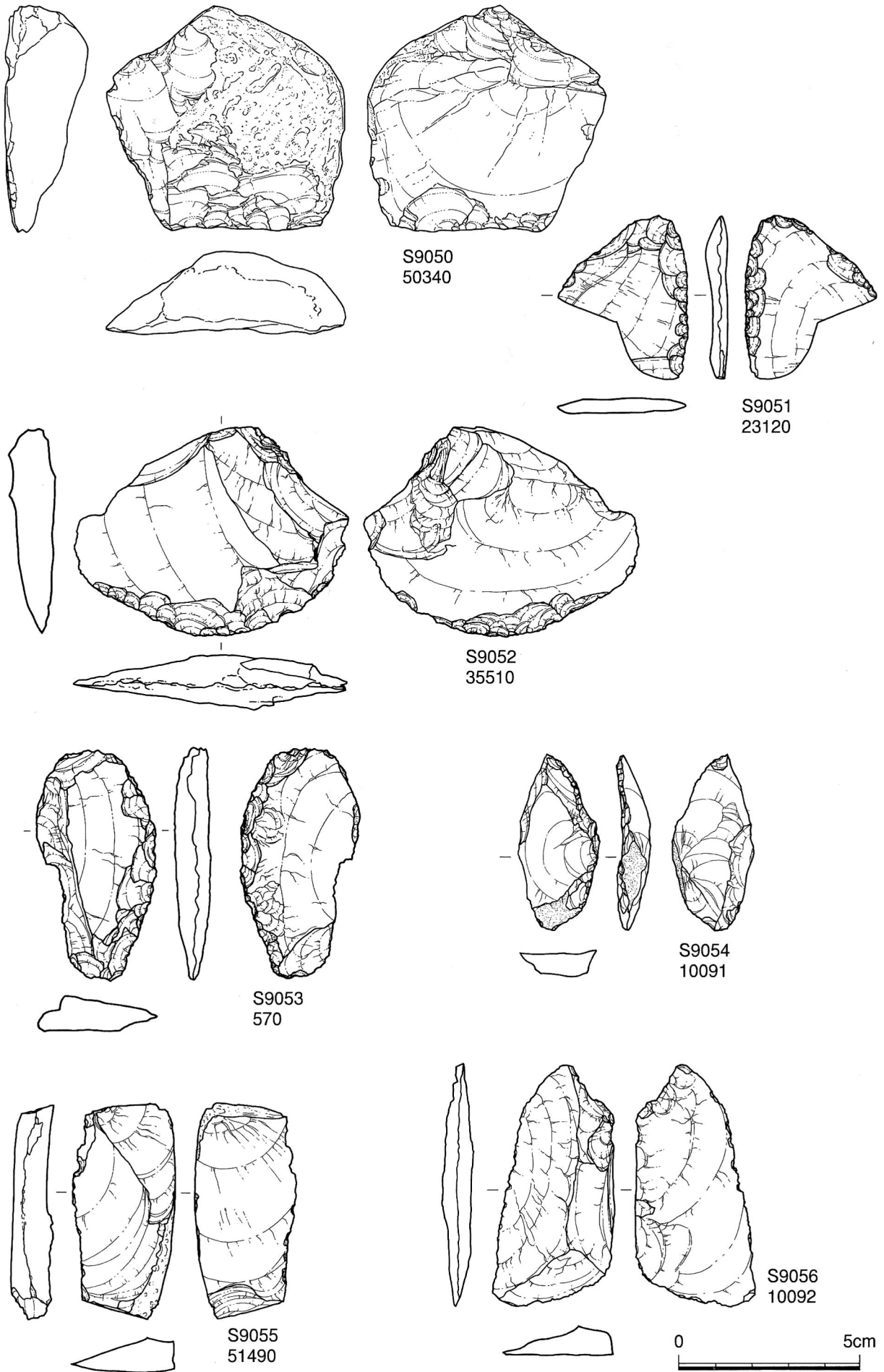


第221図 原位置から遊離した石鏃

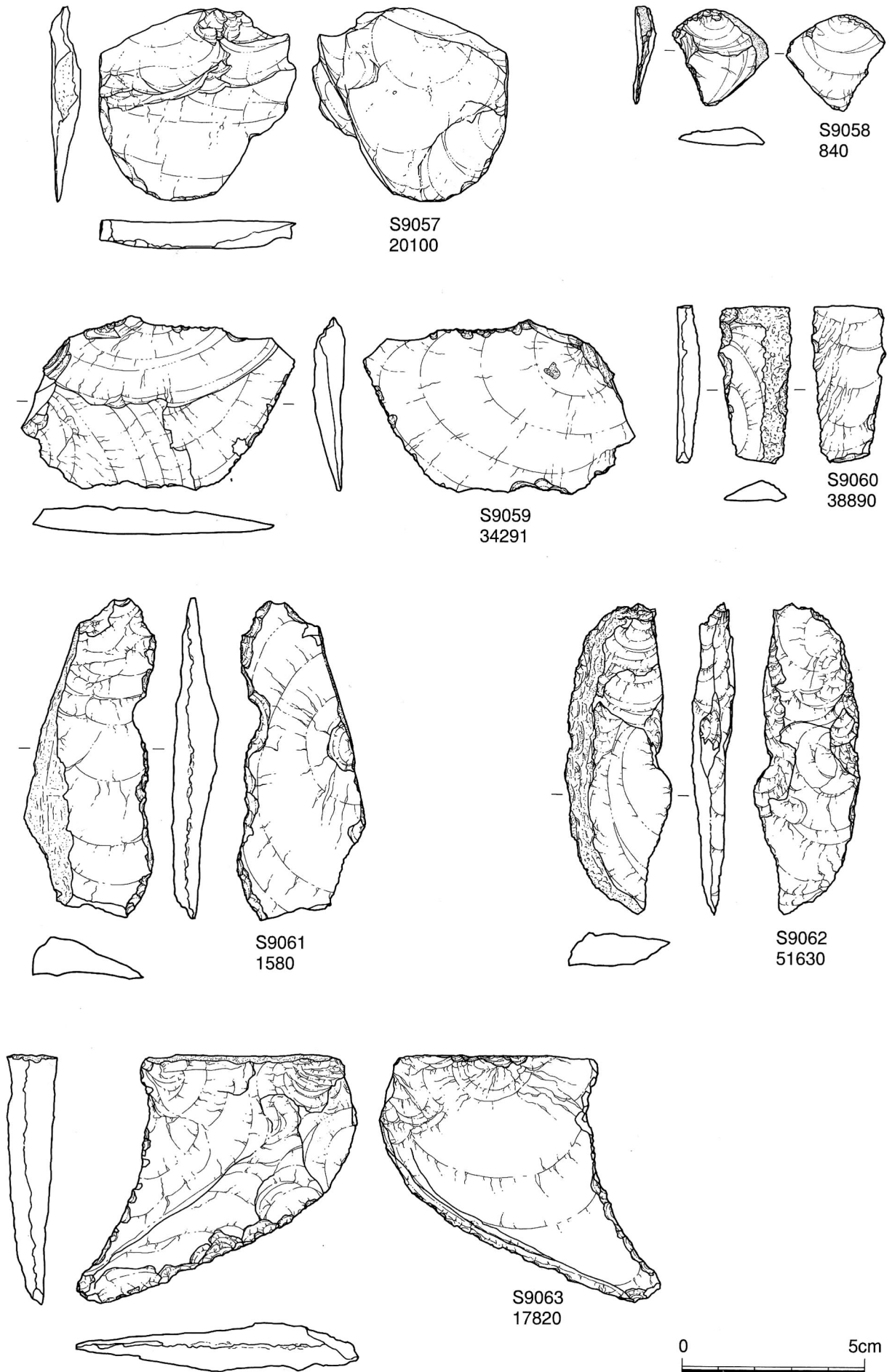


第222図 原位置から遊離した石鏃・石錐・石匙・削器

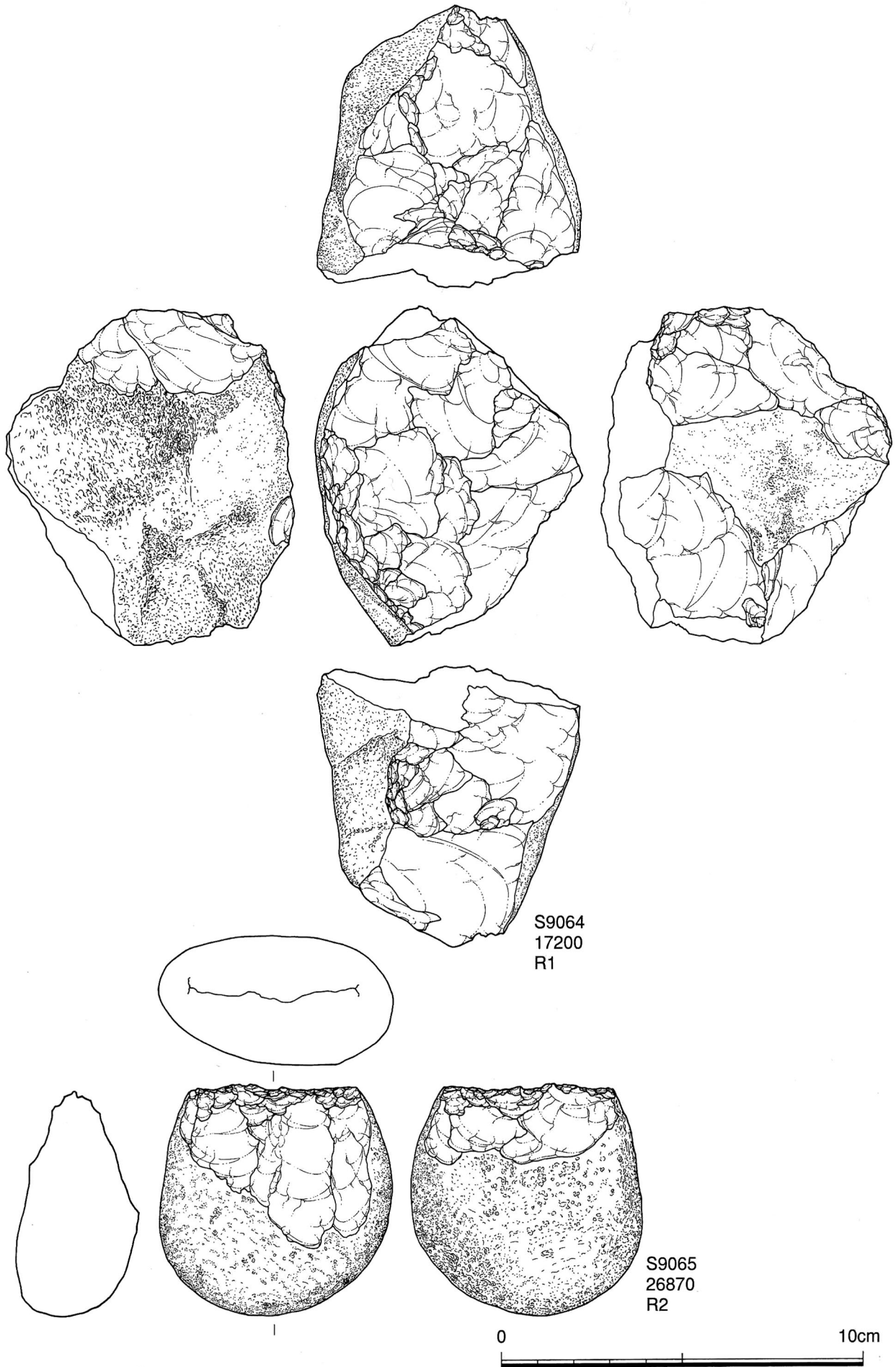
第4節 石器



第223図 原位置から遊離した削器・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片



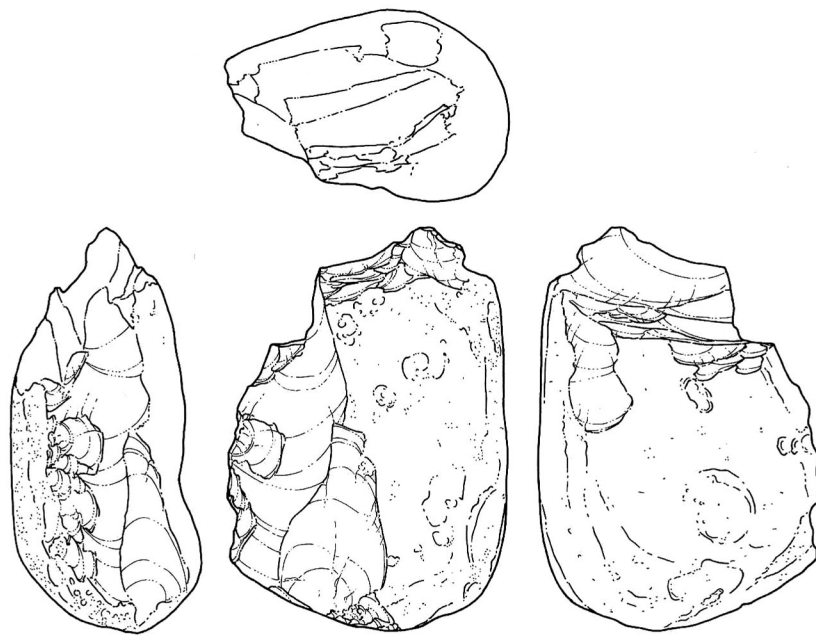
第224図 原位置から遊離した使用痕のある剥片



第225図 原位置から遊離した石核-1



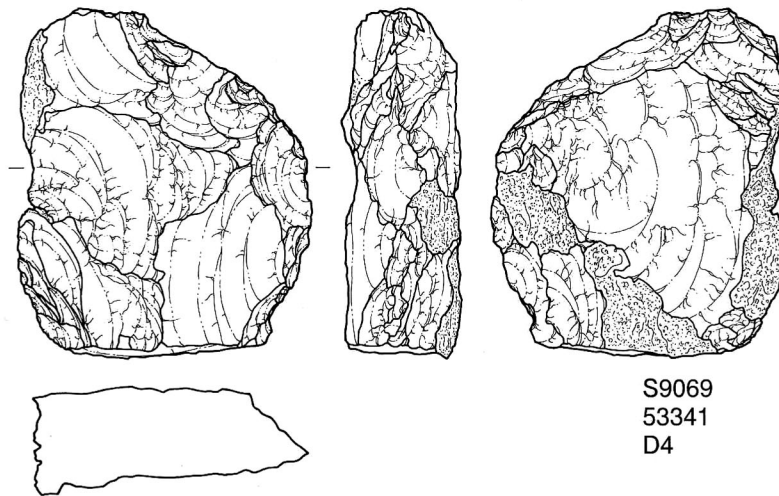
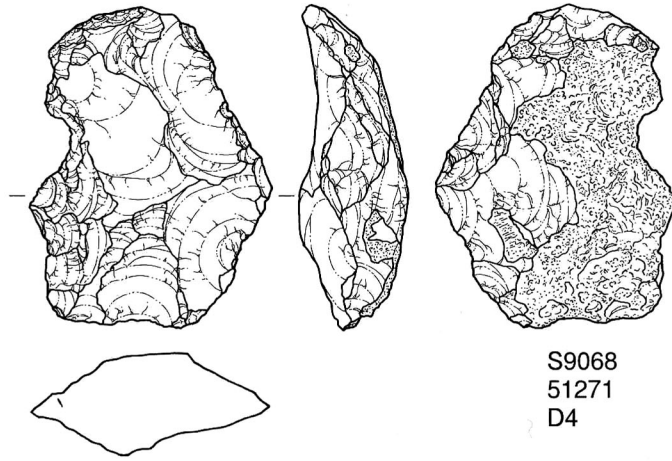
S9066
54060
R2



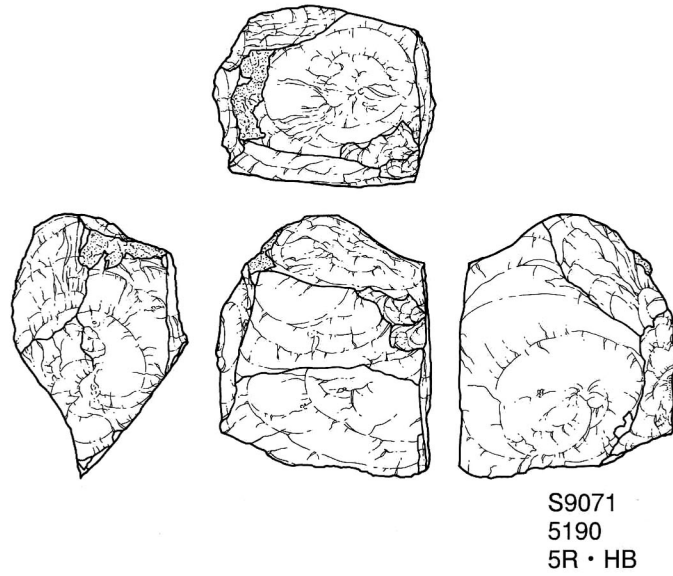
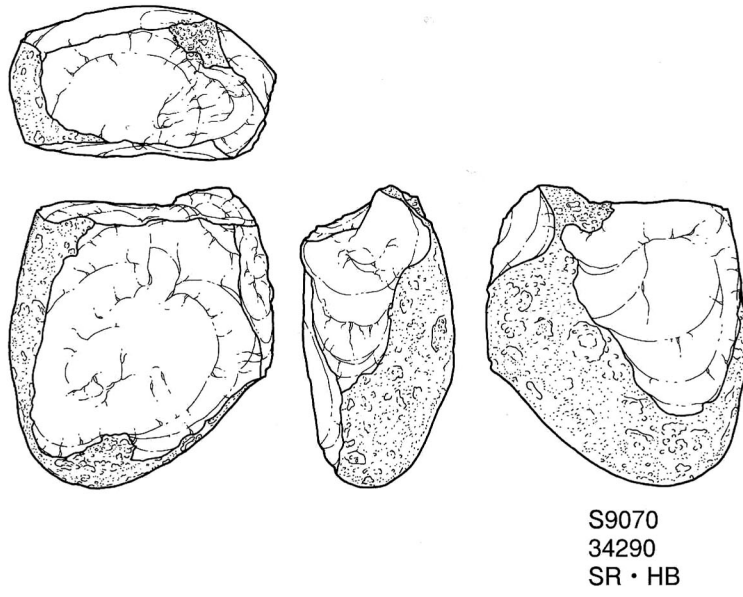
S9067
52630
R2



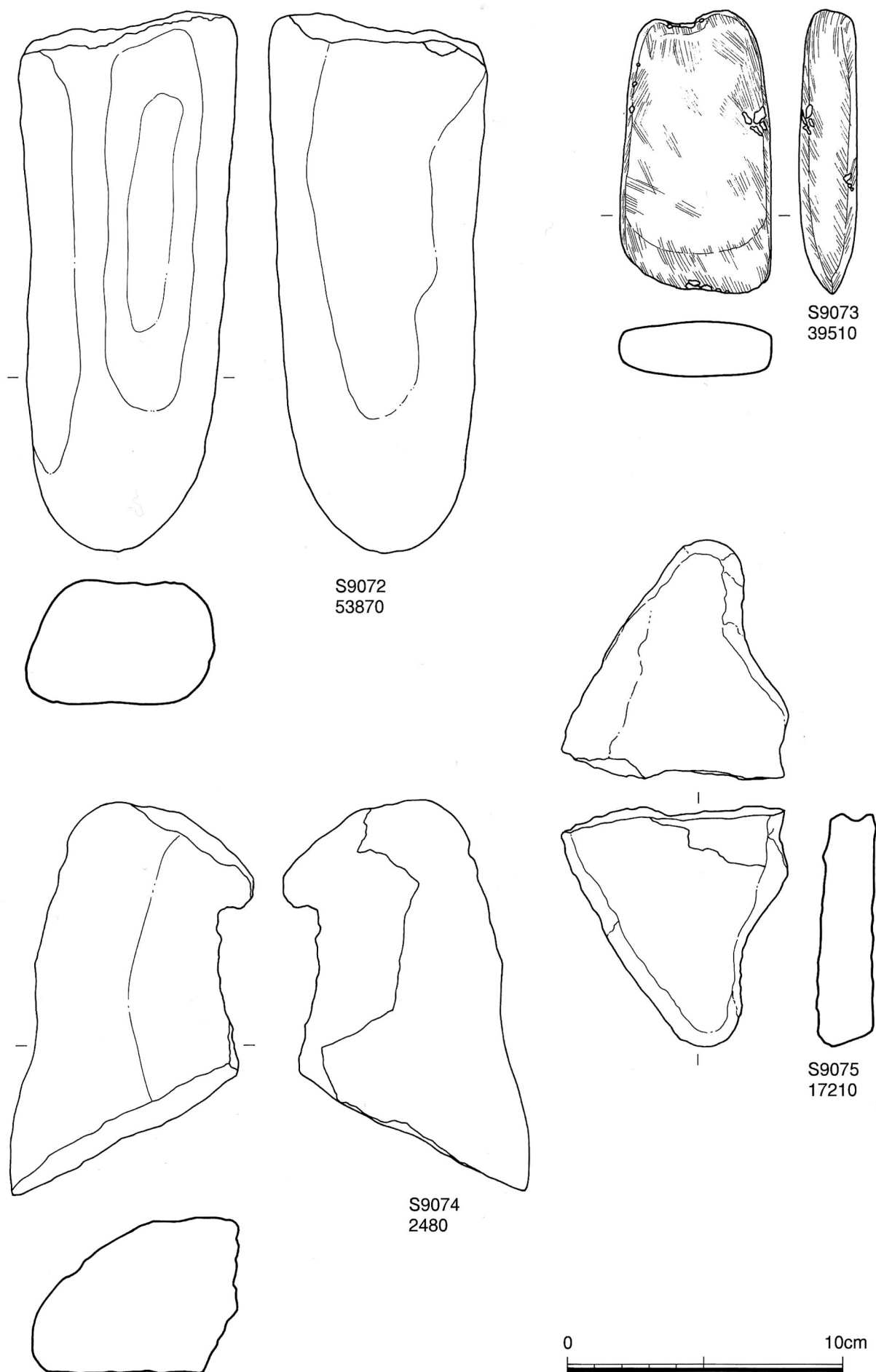
第226図 原位置から遊離した石核-2



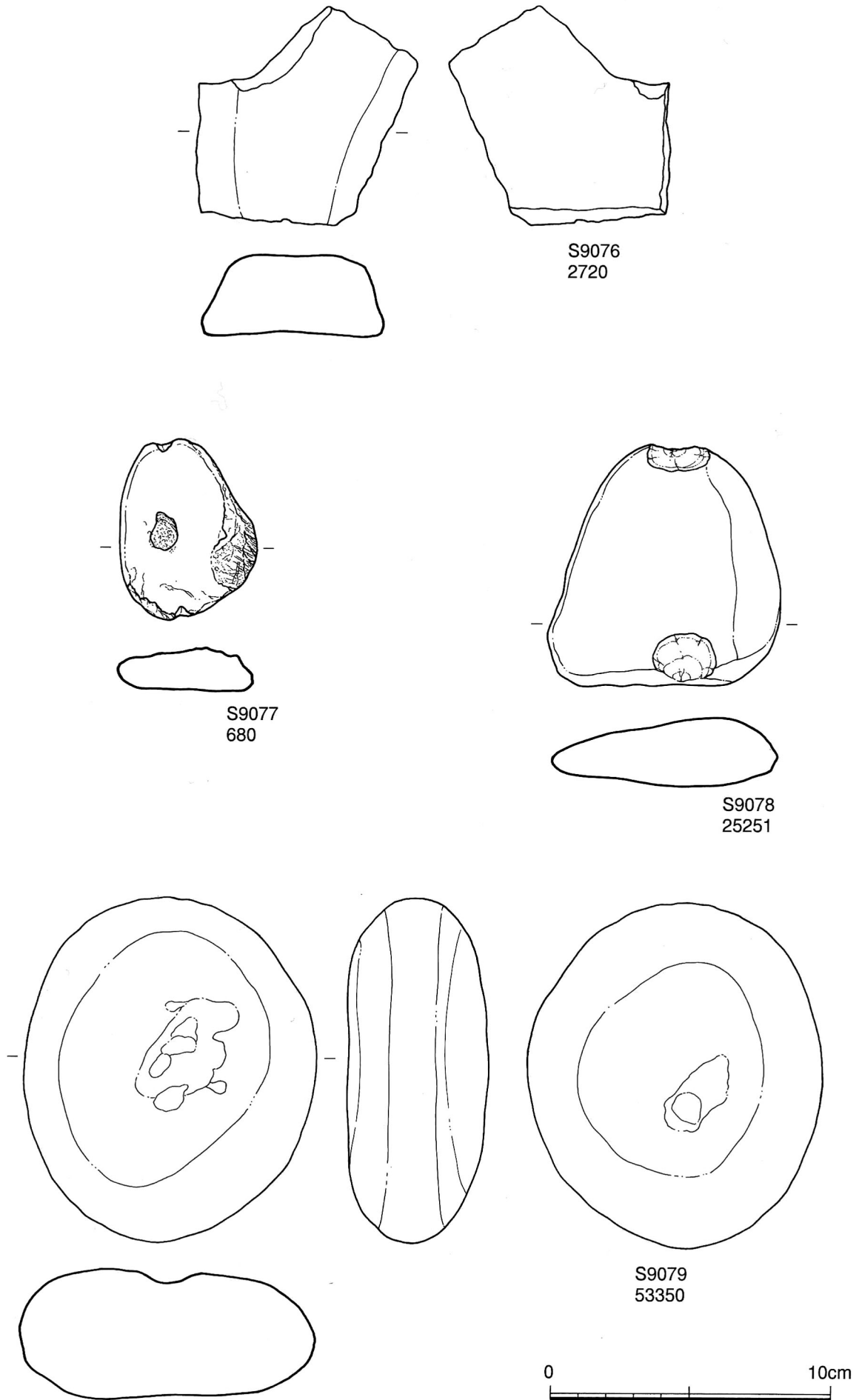
第227図 原位置から遊離した石核-3



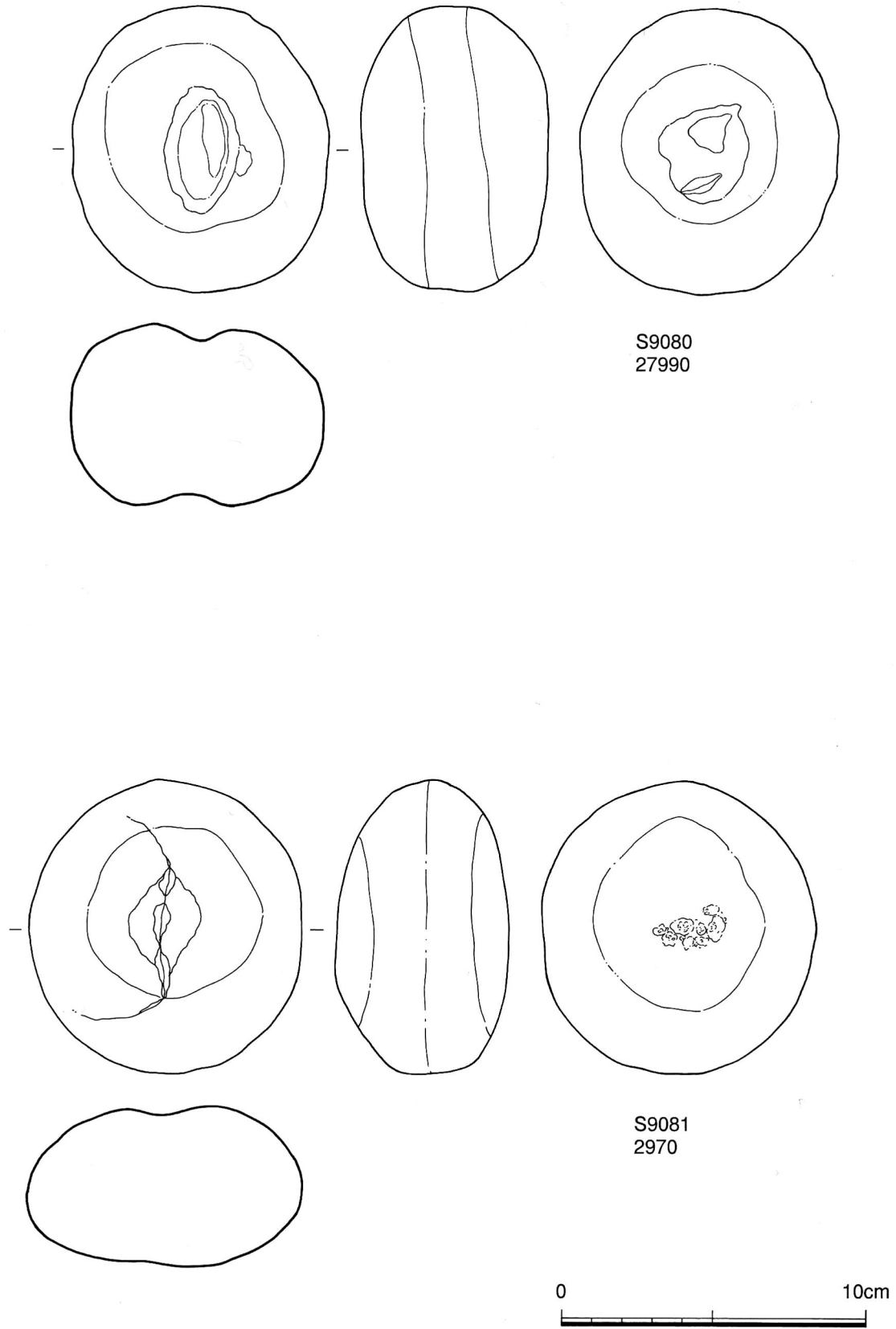
第228図 原位置から遊離した分割原石



第229図 原位置から遊離した石皿・石斧



第230図 原位置から遊離した石皿・石錘・凹石



第231図 原位置から遊離した凹石

第5節 木製品

(深江)

南区における縄文下層出土の木製品は、木道遺構として転用された丸木舟と考えられるものがあり、またそれに伴う部材の他、その周辺の湿地中から出土した容器類等が挙げられる。

W1は、木道に転用された丸木舟の本体である。木道として使用されたのは、所謂「船底」の部分、つまり外面の部分である。最大長 146cm、最大幅42cm、厚さ3cmを計る。使用された部材はクスノキと考えられる。部材は、船底の内側で若干の彎曲があり、加工による凹みと考えられる。その一部には、火を受けた痕跡が残るため、丸木舟のくり抜き工程で表面を焦がして、その部分を削るといった製作工程を窺わせるものである。また、一部には直径約3cmの穿孔が2箇所認められるが、出土状況ではその直下に木道の基礎としてわたしたと考えられる横木W3が存在する事から、木道を固定する時に横木を紐状のもので結わえ付ける為の通し孔ではないかと考えられる。

W2は、木道の基礎として使用された棒状の製品である。全長82.6cm、最大幅 7.4cmで、断面形は最大幅がそのまま直径となる円形を呈する。木道本体を固定するために、紐などで結わえたものと考えられるが、樹皮が欠損している部分が、その箇所当たる可能性が大きい。

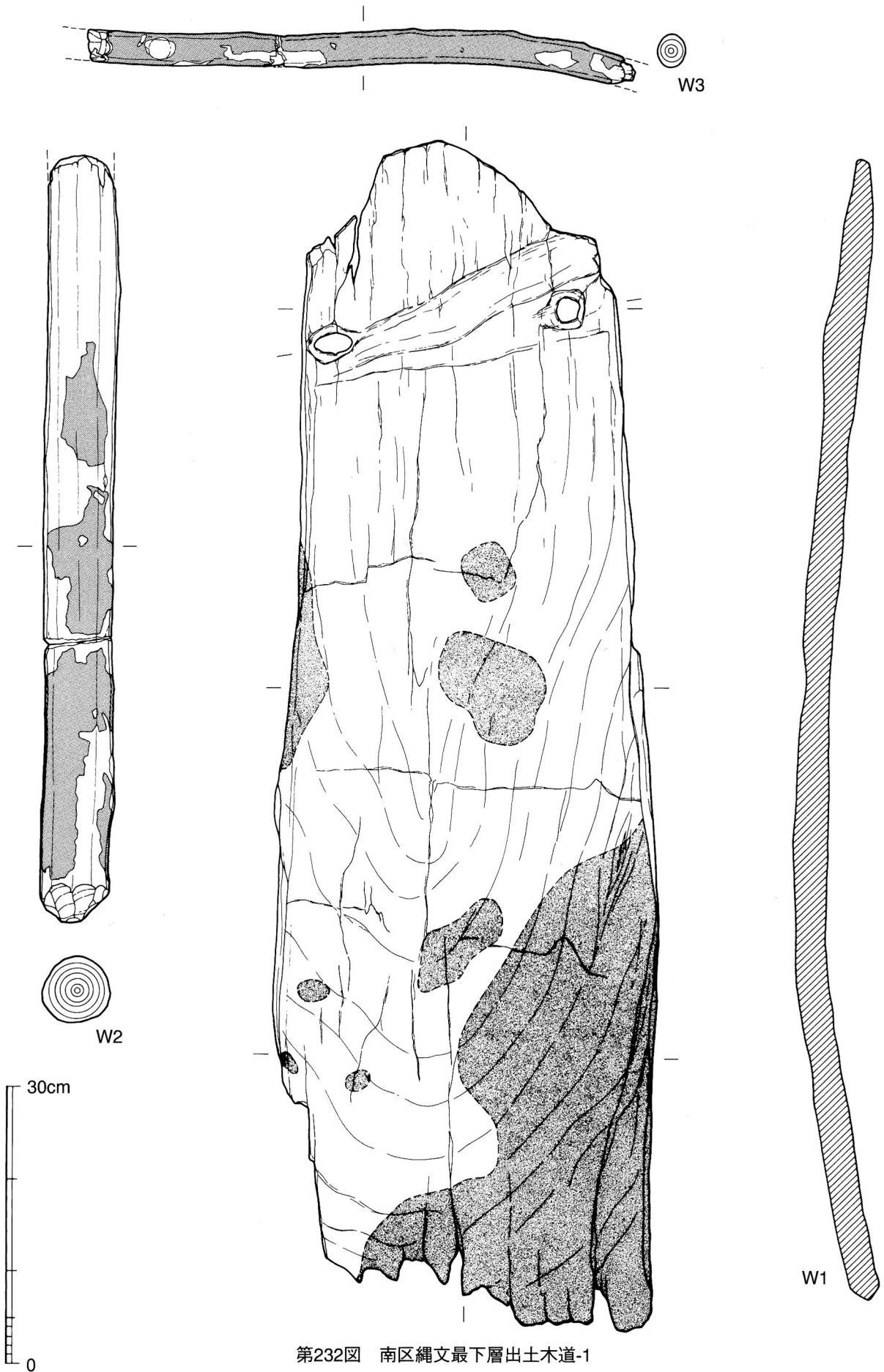
W3は、木道の基礎として使用された横木である。形態はやや歪みを持つ棒状を呈し、表面に樹皮を残す事から、ほぼ自然木に近いものを使用したものと考えられる。全長59.3cm、最大幅3.5cmを計るが、両端部とも折れており、目的に応じた若干の加工が窺える。

W4は、木道付近から出土したもので、全長27.6cm、最大幅1.8cmを計る。非常に小振りで細く、木道本体には接していないため、基礎として使用した横木等とは考え難く、用途は不明であるが、何らかの関連性があるものと考えられる。

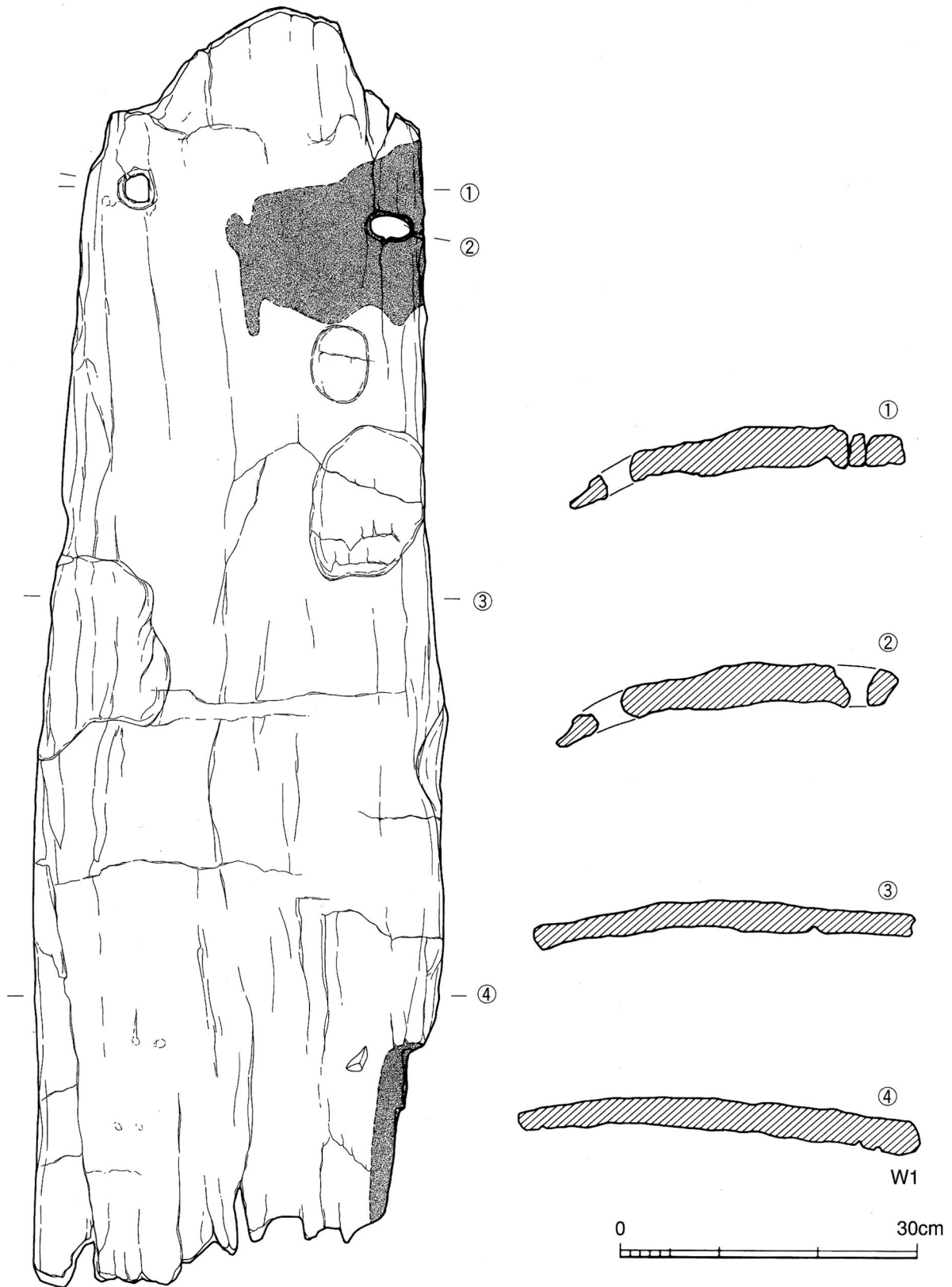
W5は、木道の上位層で出土した鉢状容器である。クスノキをくり抜いたもので、内彎気味に立ち上がる底部から口縁部付近までは辛うじて認められるが、殆どの部分が欠損している。現状長は約26.4cmで、復原長は約32.0cmを計る。現状幅は約7.25cm、復原幅は15.3cmで、残存部から平面形は楕円形を呈すると考えられる。器壁の厚みは、約1.0cmを計る。外内面は、整形時に工具で削り取った加工痕が顕著に残る。

W6は、木道を検出した谷部低湿地上のやや離れた所で出土したクリの板材で、長さ86.3cm、幅17.7cm、厚み6.4cmを計る。形態は偏平な長方形を呈し、両端部共に加工痕を残すが、一端は平坦に仕上げ、もう一端は先端部付近に丸味をもたせる様な面取りを施している。その性格については、矢板状の材や何かの転用材が考えられるなど不明ながら、確実に板材と分かるものは、この時期の例としては非常に稀少であるといえる。

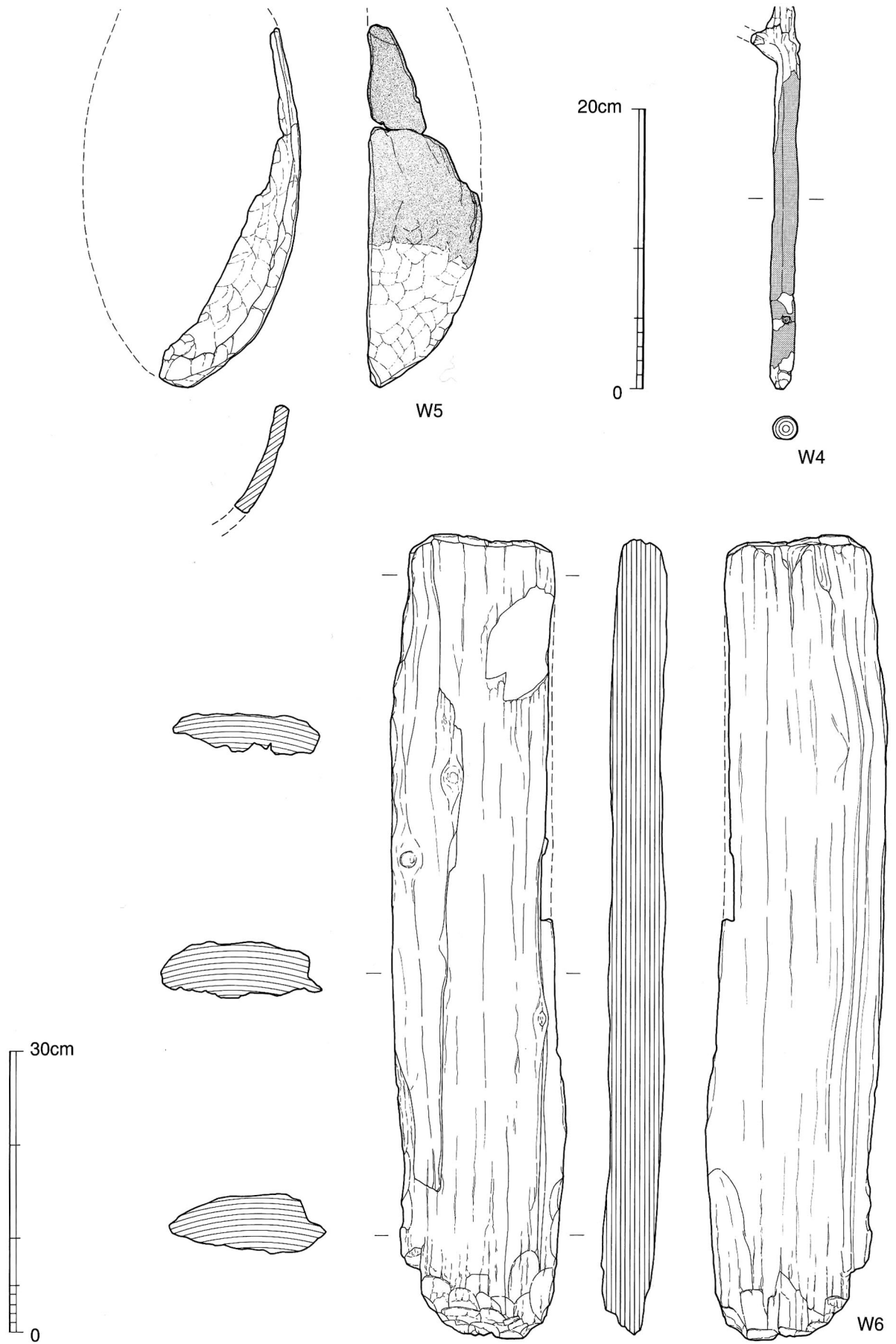
W7は、木道西側の低湿地帯で出土したヒノキの編み物である。編み物は、横方向の経糸（W7-1）、縦方向の緯糸（W7-2）の組み合わせからなる。経糸は緯糸と比較して概ね幅広であり、最も良好な残存状況を示すものには、経糸11本と緯糸16本の使用が認められ、緯糸には材料を継ぎ足した痕跡も窺えるが、器種等性格については不明である。また、詳細については別項にて記述を行う。



第232図 南区縄文最下層出土木道-1



第233図 南区縄文最下層出土木道-2



第234図 南区縄文最下層出土木製品

第6節 その他の遺物

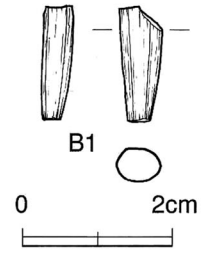
(深井)

その他の遺物としては骨製品がある。

B1は南区K20区サブトレンチの暗青灰シルト質砂層（縄文下層）から出土した骨製品である。残存長1.55cm、幅0.55cm、厚み0.43cmで先端に向かって細くなる。側面も細くなり尖り気味になる。両端方向は欠損しているため全容は不明であるが、細くなり気味の状態から、ヤスなどの刺突具の先端あるいは基部の破片と考えられる。

製品は白色に灰化しており、表面は全面にわたってタテ方向に磨かれ、等間隔で稜が6ヶ所見られる。

この骨製品は佃遺跡から出土した多数の遺物の中でも唯一の骨製品である。



第235図
骨角器

第6章 縄文下層北・中央区の遺構・遺物

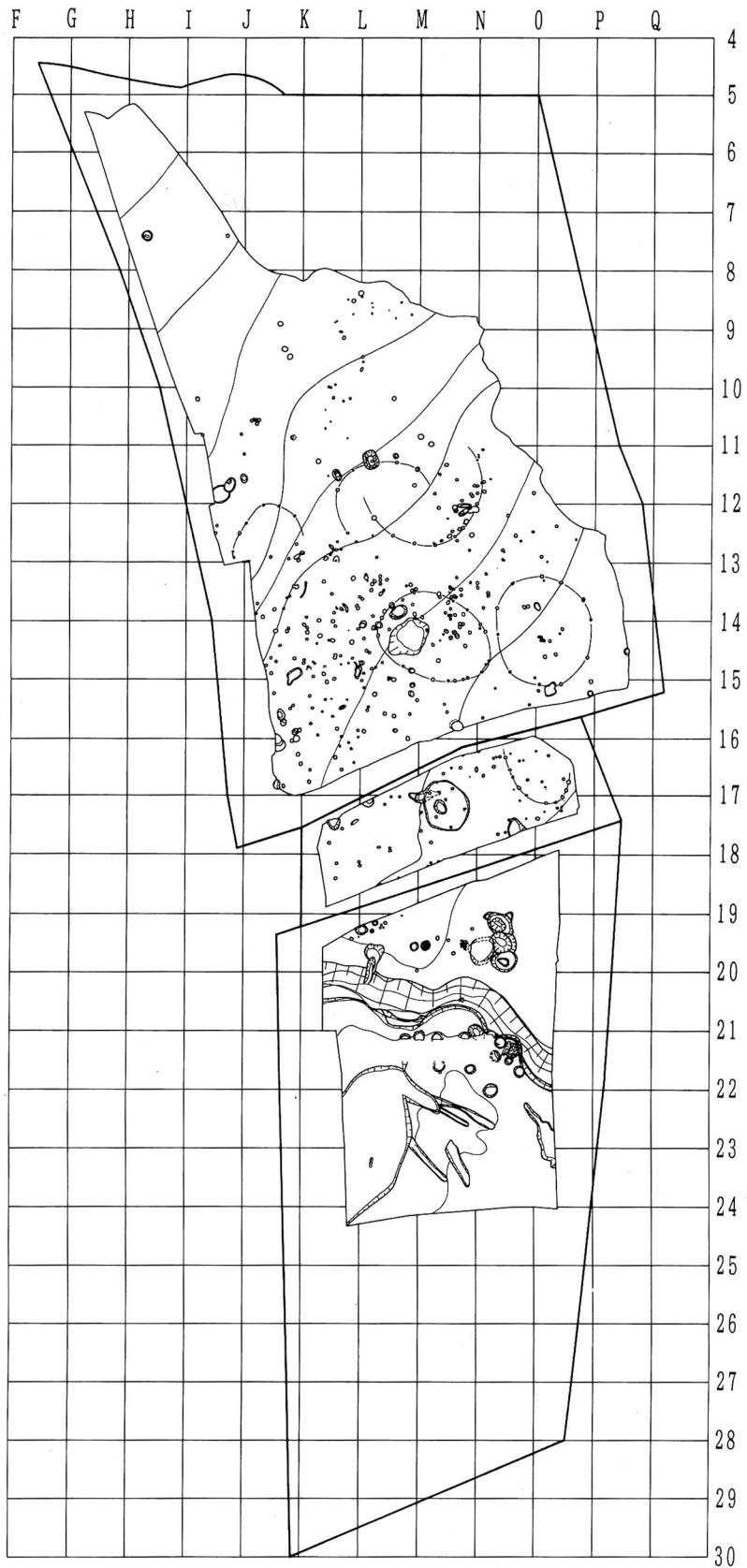
第1節 遺構 (山本)

この時期の遺構は北区・中央区全域で認められるが、11ライン以南で特に遺構が密集して分布している。溝は1条もなく、土坑、貯蔵穴、柱穴が検出された(第6-1図)。

北区南半部(11ラインから15ライン付近まで)では、竪穴状の掘りこみは認められなかったが、柱穴の配列などから推定して、5軒程度の住居跡を復元できると判断した(第237図)。

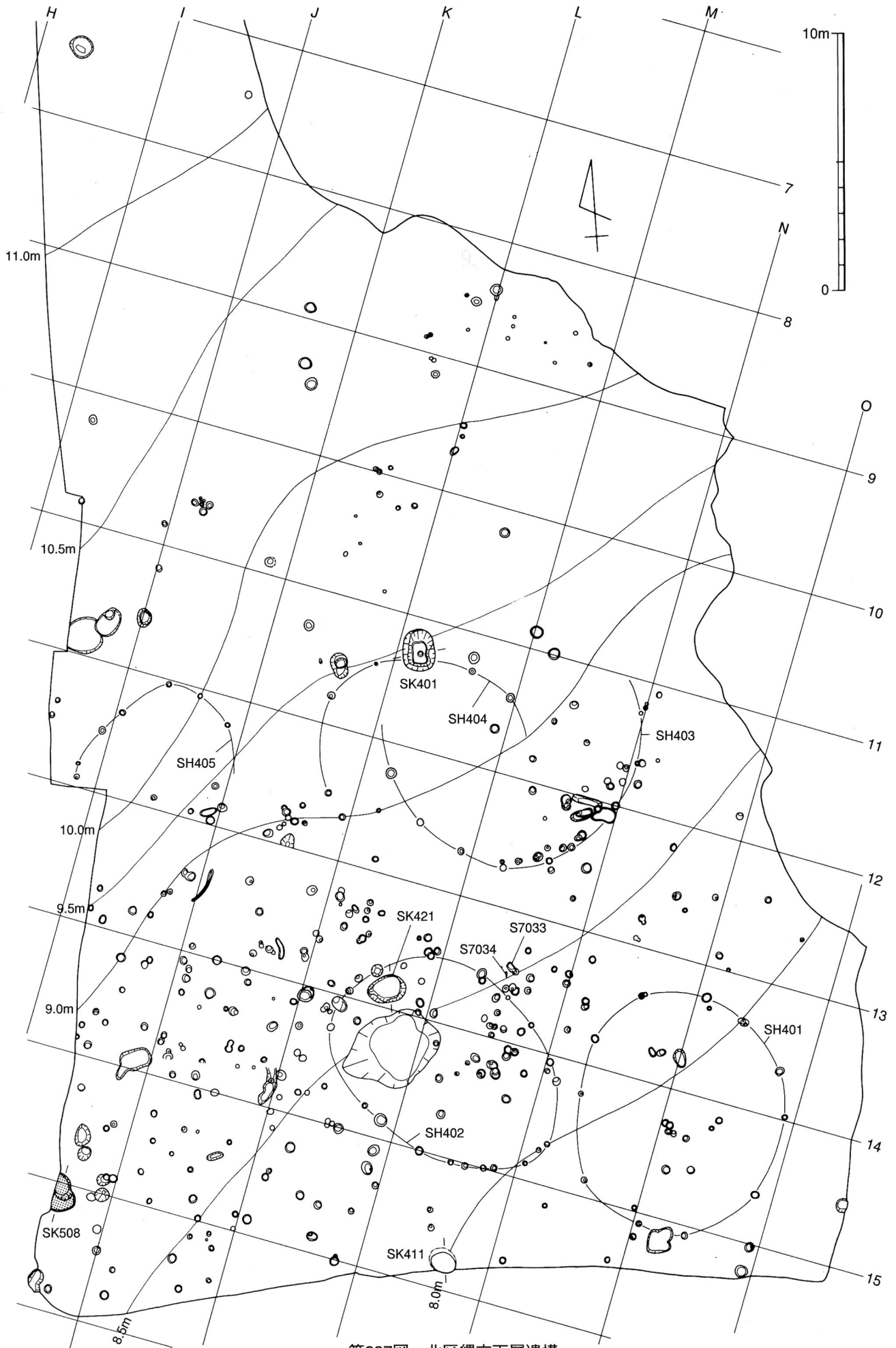
中央区のこの時期の遺構については、第4章でも触れたが、同一遺構面で縄文最下層と縄文下層の遺構を検出した。したがって、遺構埋土内出土の土器型式によって、所属時期が縄文最下層と判断された遺構のみ、第4章で取り扱うこととし、その他の遺構は縄文下層の遺構として、以下に記載した(第238図)。そのため、下記の遺構のすべてが確実に当期に帰属するという訳ではない。

住居として推定復元したのは、北区のS H401~S H405、中央区のS H406の6軒である。いずれも竪穴状の掘りこみはなく柱穴の配列によって、住居跡と推定した。



第236図 縄文下層遺構配置図

第1節 遺構



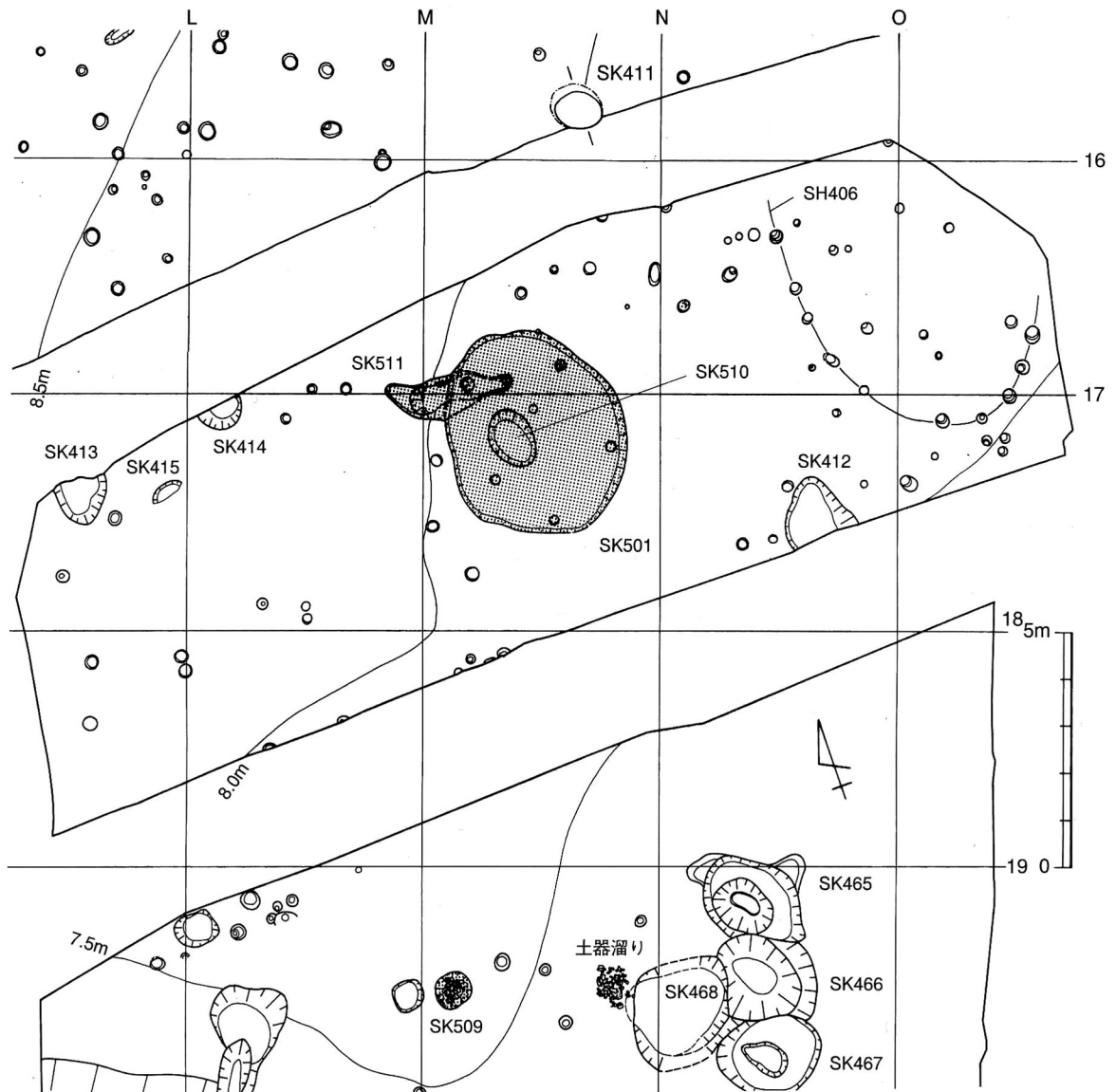
第237図 北区縄文下層遺構

SH401は、北区N13・14・O13・14区にまたがる緩やかな傾斜面上に柱穴群を検出したものである。長径（南北）900cm、短径（東西）800cmの円に近い楕円形を呈するが竪穴状の凹みはない。柱穴は11箇所楕円形に配列されるが、いずれも小規模なものである。住居中央付近に焼土や炭の散布がみられたものの多くはなく、この住居に伴う土坑や出土遺物は検出されなかった。

第26表 北・中央区下層住居跡一覧表

	長径 (cm)	短径 (cm)	平面形態
SH401	900	800	楕円形
SH402	950	700	楕円形
SH403	1000	700以上	円形
SH404	800	400以上	円形
SH405	600以上	400以上	楕円形
SH406	600以上	450以上	楕円形

SH402は、北区N13・14・O13・14区にまたがる緩やかな傾斜面上に柱穴群を検出したものである。長径（東西）950cm、短径（南北）700cmの楕円形を呈するが竪穴状の凹みはない。柱穴は22箇所楕円



第238図 中央区縄文下層遺構

第1節 遺構

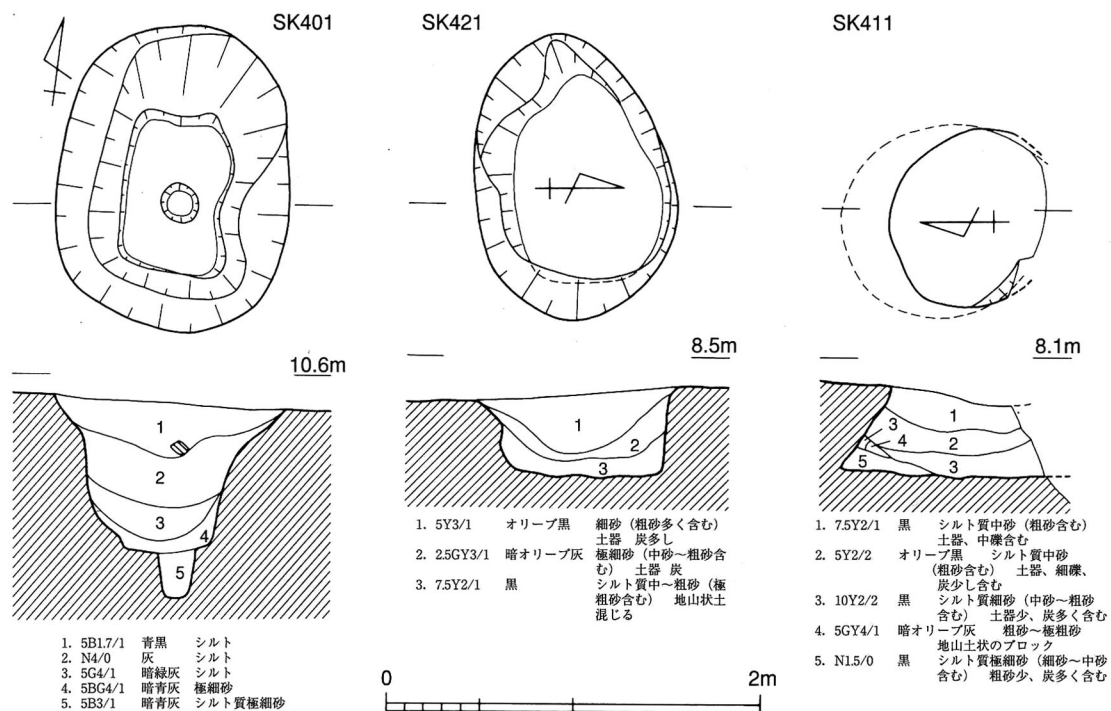
形に配列されるが、いずれも小規模なものである。住居中央の西寄りに4m×3mの不定形な土坑状の落ち込みが検出されたが、住居に伴うものかどうか不明である。この土坑状の落ち込みから佃遺跡唯一の貝であるヤマトシジミが1点出土した。

S H403は、北区L12・M11・12区にまたがる緩やかな傾斜面上に9箇所の柱穴群を検出したものである。径10mの円形住居と考えられるが、北方向の半円部分に相当する柱穴は検出されなかった。住居中央付近では焼土や炭の散布がみられたものの多くはなく、この住居に伴う土坑や出土遺物は検出されなかった。

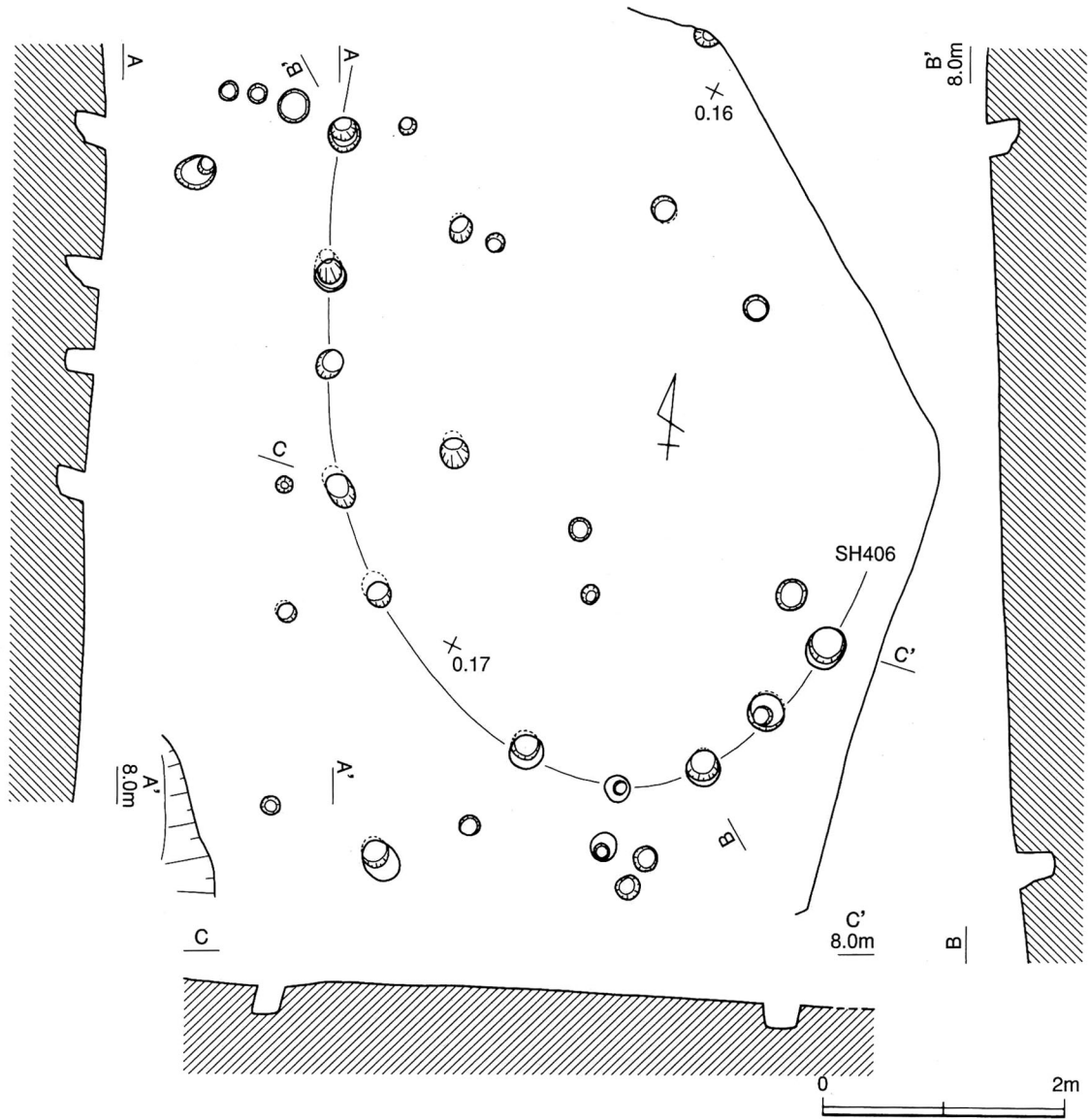
S H404は、北区K11・12・L11区にまたがる緩やかな傾斜面上に5箇所の柱穴群を検出したものである。径800cmの円形住居と考えられるが、南方向の半円部分に同質の柱穴は検出されなかった。またこの住居に伴う土坑や出土遺物は検出されなかった。

S H405は、北区J12区を中心とする緩やかな傾斜面上に7箇所の柱穴群を検出したものである。長径（南北）600cm以上、短径（東西）400cm以上の楕円形住居と考えられるが、南方向の半円部分に相当する柱穴は検出されなかった。住居中央付近では焼土や炭の散布がみられたものの多くはなく、この住居に伴う土坑や出土遺物は検出されなかった。

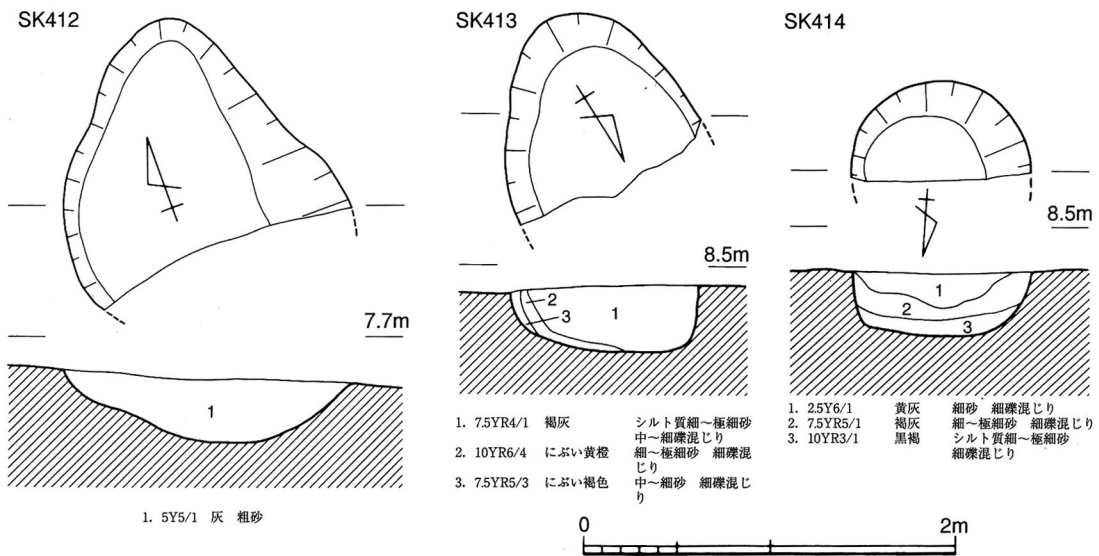
S H406は、中央区東側で柱穴群を検出したものである。長径（南北）600cm以上、短径（東西）450cm以上の楕円形である。柱穴の配列から、復元推定できる住居の規模は長径900cm、短径500cm程度の楕円形住居であろう。柱穴は10箇所検出し、直径20～25cm程度、深さ20～25cmで、柱穴の間隔は60～100cmである。いずれの柱穴も南側に傾いた状態で検出された。これは、住居建築当時に人為的に傾けて柱穴が掘削されたのか、住居の倒壊などによる二次的な原因によるものかは不明であるが、すべての柱穴が同一方向（南側に）に傾いている状況から判断して、後者の可能性が高いと言える。また、この住居の周辺の柱穴にも、南側に傾いた柱穴も存在し、この住居との関係が考えられる。なお、柱穴



第239図 北区縄文下層土坑（SK401・SK421・SK411）



第240図 中央区縄文下層住居跡 (SH406)



第241図 中央区縄文下層土坑 (SK412～SK414)

第1節 遺構

内埋土からの遺物の出土はなかった。

なお各住居跡（推定）の規模・形態は表6-1-1の通りである。

土坑及び土坑状の遺構は、北区で11基、中央区で4基検出した。主なものは以下の通りである。

北区のSK401は、長径160cm、短径125cmの楕円形で、検出面からの深さは80cmである。土坑基底には直径15cm深さ20cmの柱穴状の痕跡を検出した。土坑中央の柱穴状の凹みは杭と考えられ、形態から考えると落とし穴の可能性が高い。時期を明確にしえないものの住居跡と近接することから、集落内に落とし穴が存在する意義を見出す必要があるのかもしれない。

SK410（L13区）は長径160cm、短径110cmの楕円形で、深さ50cmの土坑である。埋土からは北白川上層式3期から一乗寺K式への移行期相当の土器片が認められる。

SK411（M15区）は、長径190cm、短径160cm以上の楕円形で、深さ40cm程度である。底面近くの堆積土層からSK410と同様に、北白川上層式3期から一乗寺K式への移行期相当の土器片が出土しているが、この上位の埋土からは元住吉山I式土器も出土している。土坑底付近からは種別不明であるがドングリも出土しており、フラスコ状の断面形態を持つことから判断して、貯蔵穴と考えられる。

SK412は、中央区のN17区にあり、長径（南北）130cm以上、短径（東西）140cmの楕円形土坑で、深さは35cmである。土坑内の堆積埋土は灰色粗砂で、他の土坑埋土とは相違がある。土坑内からは北白川上層式3期から一乗寺K式の土器が出土している。用途などは不明である。

SK413は、中央区北東隅のK17区に存在する。長径（南北）100cm以上、短径（東西）110cmの楕円形土坑で、深さは40cmである。土坑内埋土は3層で、褐灰色シルト質細砂～極細砂が主に堆積する。埋土中から元住吉山I式土器の小片が認められる。土器以外の出土遺物がないことから、機能に関して不明な点が多いが、他の貯蔵穴と形態的な特徴が類似しているため、この土坑も貯蔵穴であった可能性が高い。SK414も、中央区の北東部にあり、SK413の東側に位置する。規模は長径（東西）95cm、短径（南北）50cm以上のほぼ円形の土坑で、深さ35cmである。土坑内埋土は3層で、最下層には黒褐色シルト質細砂～極細砂が堆積する。埋土内からは、縄文中期土器の他、元住吉山I式土器が少量出土している。SK413同様、この土坑も形態的特徴から判断して、貯蔵穴であった可能性が高い。

SK415は、中央区の北東部に位置し、長径（東西）70cm以上、短径（南北）30cm以上で、深さは20cmである。埋土内から一乗寺K式土器の破片が出土している。用途等は不明である。

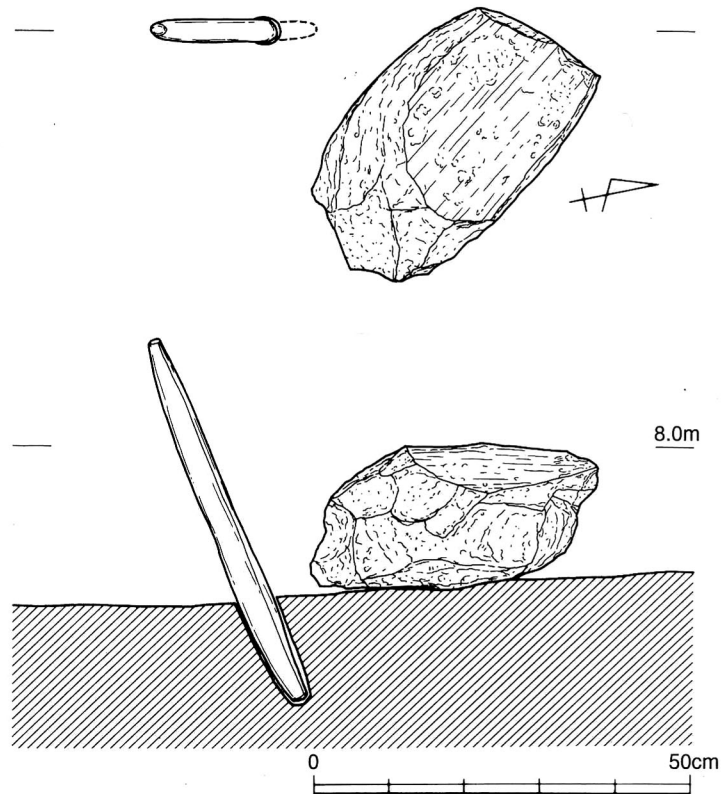
縄文下層期の遺構は、南区の崖下にも認められた。詳細は第5章で触れたが、低湿地の貯蔵穴群として存在している。形態的に貯蔵穴と認められるSK411は、乾燥した崖上の居住域に位置し、崖下の貯

第27表 北・中央区下層土坑一覧表

No.	地区	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	平面形態	深さ／長径(cm)	備考
SK401	北	160	125	80	楕円形	0.5	落とし穴
SK410	北	150	110	40	楕円形	0.27	
SK411	北	110以上	100	45	楕円形	0.41以下	フラスコ状貯蔵穴
SK412	中央	120以上	140	30	楕円形	0.25以下	
SK413	中央	100以上	110	40	楕円形	0.4	貯蔵穴
SK414	中央	100	50以上	30	円形	0.3	貯蔵穴
SK415	中央	70以上	30以上	20	円形	0.29以下	

蔵穴とは、使用方法の違いが存在する可能性がある。

北区のM13区のSH402北側では、地山面に突き刺さった状態の石剣（長さ51.8cm）を検出した（第6-4図）。全長の約1/3が地山面に埋まっており、先端は約20°南に傾いた状態である。石剣周辺を丹念に精査したが明瞭な堀方はなく、相当な力で突き刺したか或いは径に近い小さな堀方を掘ったものかも知れない。なお、この石剣の北西20cmには長さ43cm、幅24cm、高さ22cmの大型の花崗岩製砥石が、砥石面を上に向けて存在している。これらに伴う明確な遺構は検出できなかったが、これらの配置は人為的と考えられ、生活に関わる祭祀跡を示すものかも知れない。



第242図 北区縄文下層石剣(S7034)・砥石(S7033)出土状態(M13区)

第2節 土器・土偶

(岡田・深井)

1. 下層遺構出土の土器 (第243~246図)

数多くの遺構が検出され、それぞれ遺物を得ているが、本節では年代等判別可能な土器が比較的まとまって出土している遺構に限って、図化し掲載した。それらはいずれも土坑出土資料であり、南区における黒色地山遺構面に対応される一群、8~10層対応かと思われる一群とに分けられる。

S K 410 (990~1004) ; 990はR L 縄文地に平行沈線をひいた波状口縁深鉢口縁部。991も同様なが、描線が太く、縦位のものの内には刺突が配される。992は広口口縁の外面にL R 縄文が施され、993は内彎する波状口縁部上端に沈線を1本配し、それと水平に下限した間をL r 縄文施文する。彦崎K 2式に類例がある。994から996はR L 縄文を地文とした深鉢胴部で、結節部あるいは絡げ部分の回転施文を多段にわたって繰り返す。997から999は縄文地に沈線によって施文したもので、撚りの方向は注口付土器の体部と考えられる999のみR Lである。1000は波状口縁となるか。平行沈線間にL R 縄文施文、口縁内面には一本のみ沈線が配される。1001は無文広口深鉢。1004は内彎内傾する鉢形土器で、両者とも丁寧になでられている。1002、1003は底部。それぞれ平底、ヘソ状凹底である。

S K 411 (1005~1010) ; 本土坑内の埋土は3層に分層され、それぞれ遺物が対応する。1005と1006が下位の③層暗青灰色シルト質粗砂(炭化物含)出土の土器で、ナデによる無文の広口深鉢と3本撚R L 磨消縄文の内彎口縁部である。なお、後者は566に極似しており、同一個体かと思われる。ただし、黒色地山遺構面対応か。他方、1007から1010は①層黒色シルト質砂出土。平行沈線間を直前段4本撚R L 磨消縄文とする深鉢胴部、斜刻帯を配す平口縁浅鉢、無文平口縁深鉢口縁部、および最上帯に刺突列を巡らせた注口付土器胴部がみられ、その様相は8層出土の元住吉山I式に対応するものと思われる。したがって、本土坑内の埋土には明らかに上下二つの年代の堆積が確認される。

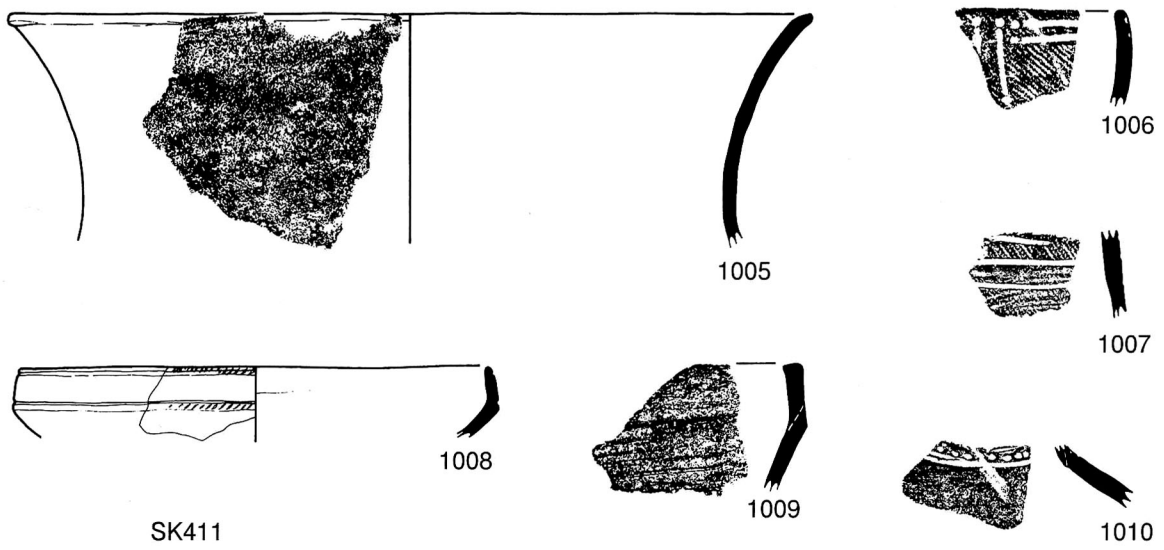
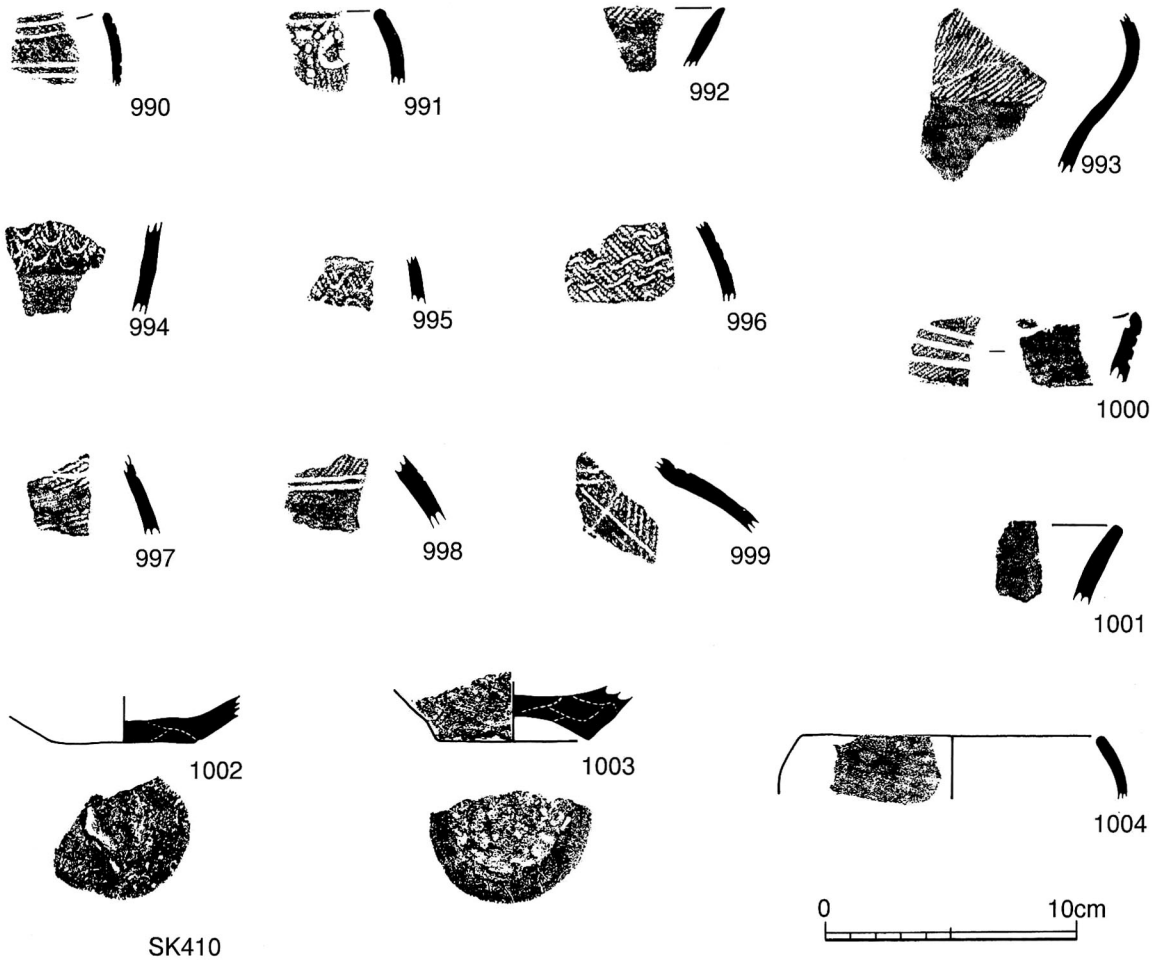
S K 412 (1023~1042) ; 本土坑内出土破片と南区縄文下層23層の深鉢胴部破片とが接合した。1029がその個体で、直前段4本撚R L 磨消縄文、最上帯に絡げ縄を巡らし、直下に「6」字状沈線文を描く一乗寺K式に比定される。したがって、本土坑の埋没年代が南区23層と同期した可能性がある。ただし、この個体のみ他の破片に比し若干年代的に下る様相を呈している。

1023、1025は内彎口縁をもつ波状口縁深鉢。波頂部には円形状曲線文を多重沈線で描き、L R の縄文を充填する。1024は摩滅著しい。中期末のものか。1026からは深鉢胴部で、直前段3本撚R L を用い一部結節部回転施文を多段に配す。1028は胴部最上帯と思われる部分にR L 結節縄文、1027は結節縄文をもつがL R で、沈線内には刺突を施す。1030は縄文が施された胴部下半、2本撚R L による。1031は外面に平行沈線をひくのみ広口浅鉢か。1032以下は無文広口深鉢口頸部となる。いずれも比較的調整丁寧で、1033、1035は内面に、1037は両面に条痕を残す。1039は砲弾形を呈すか。内面巻貝条痕を顕著に残す。1040は内彎する口縁部を有する鉢形土器か。1041、1042は皿形浅鉢となる。やはり条痕調整後ナデが施される。1043、1044は底部であるが、後者は胴部があまり開かない円筒状の形態をとる平底。一方の1043は底面欠損しているものの凹底となるものと思われる。

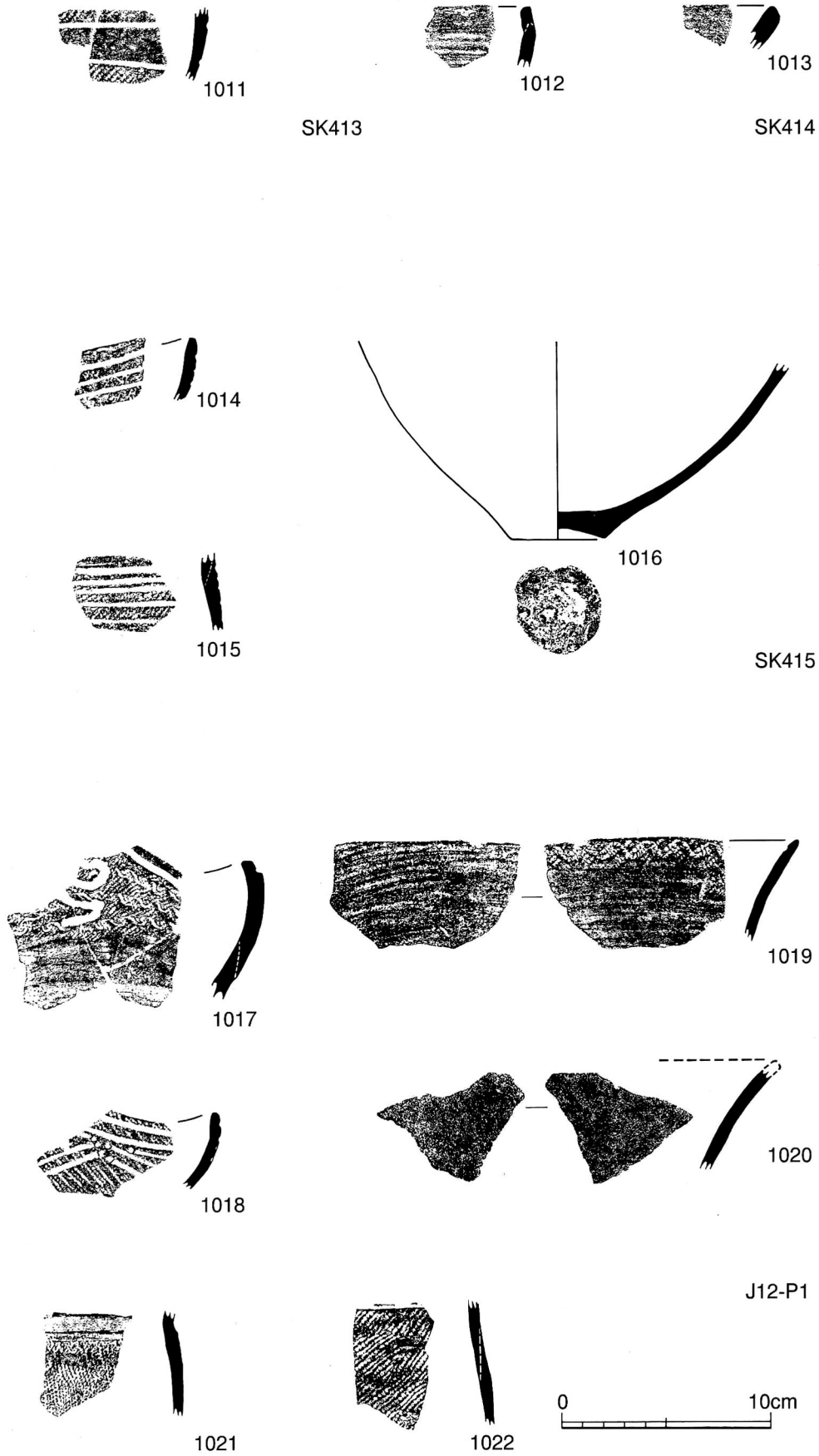
S K 413 (1011) ; L R 縄文施文後に平行沈線をひき、その間を磨り消した体部破片。

S K 414 (1012・1013) ; いずれも無文。1012は平口縁深鉢か。1013は広口口縁で口唇部には面取りがみられる。それらの特徴よりすれば元住吉山I式と判断される。

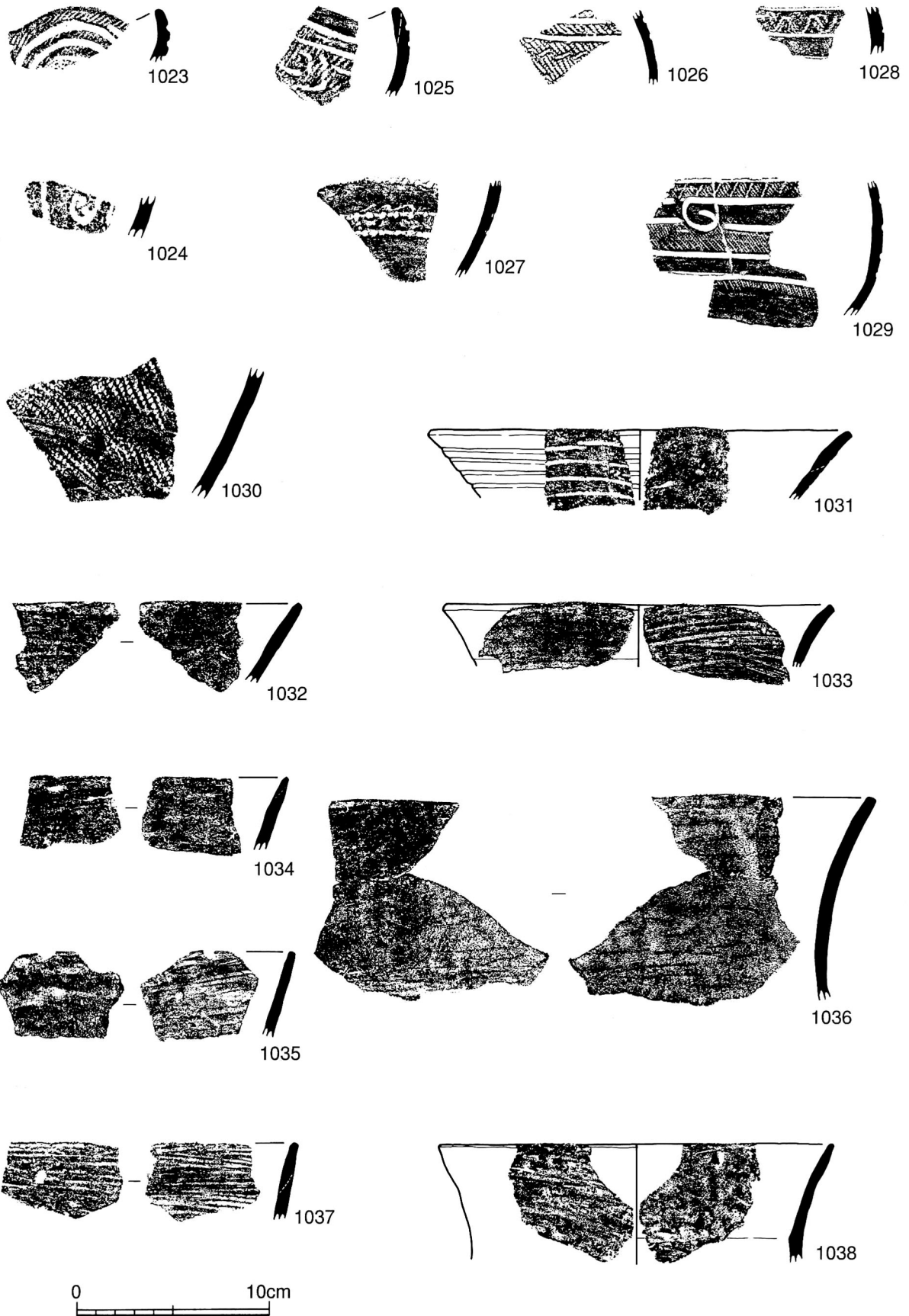
その他の土坑 (1014~1016/1017~1022) ; 南区黒色地山遺構面に対応する時期の土坑2基より出土



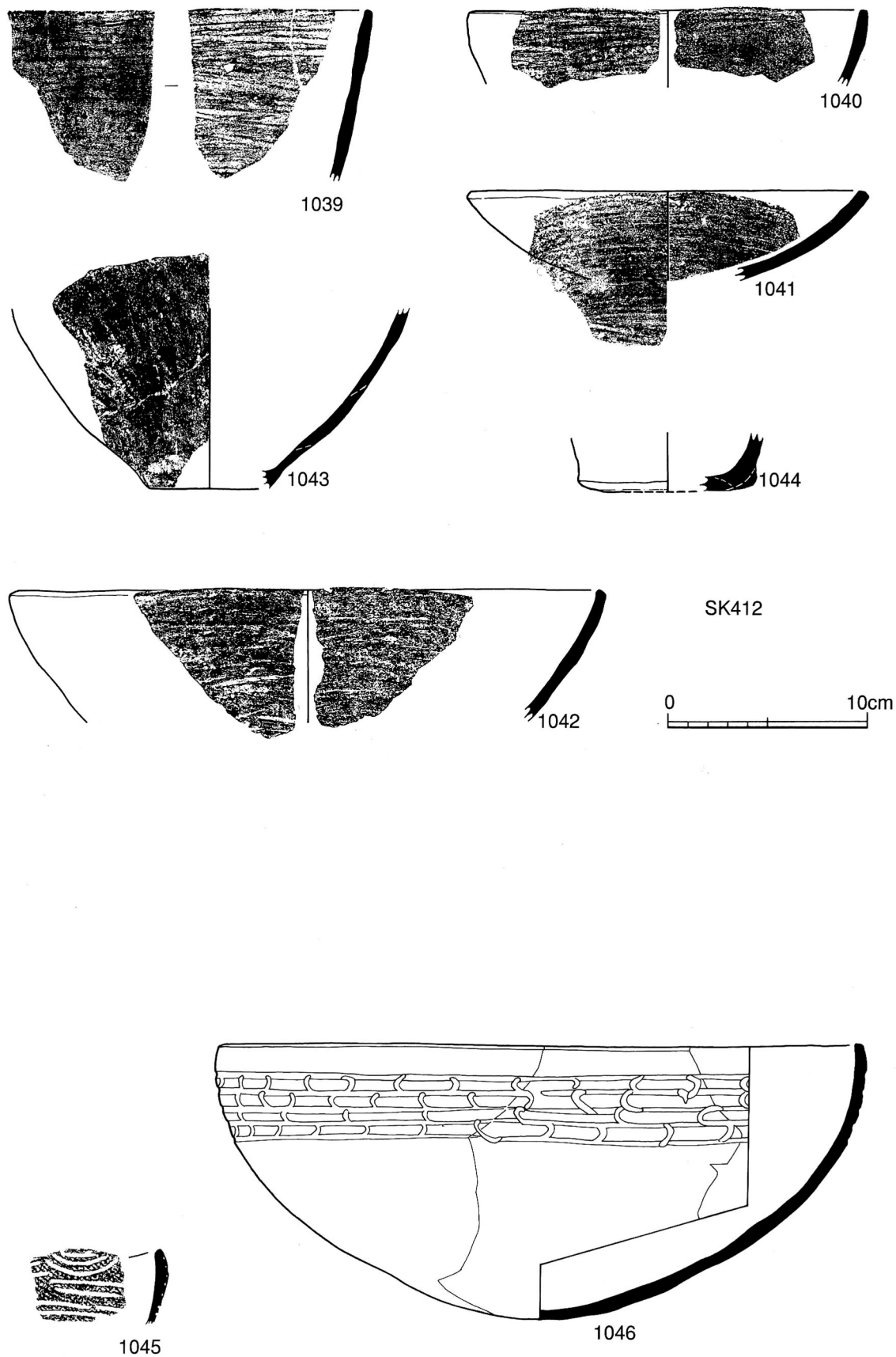
第243図 北・中央区縄文下層遺構出土後期土器-1



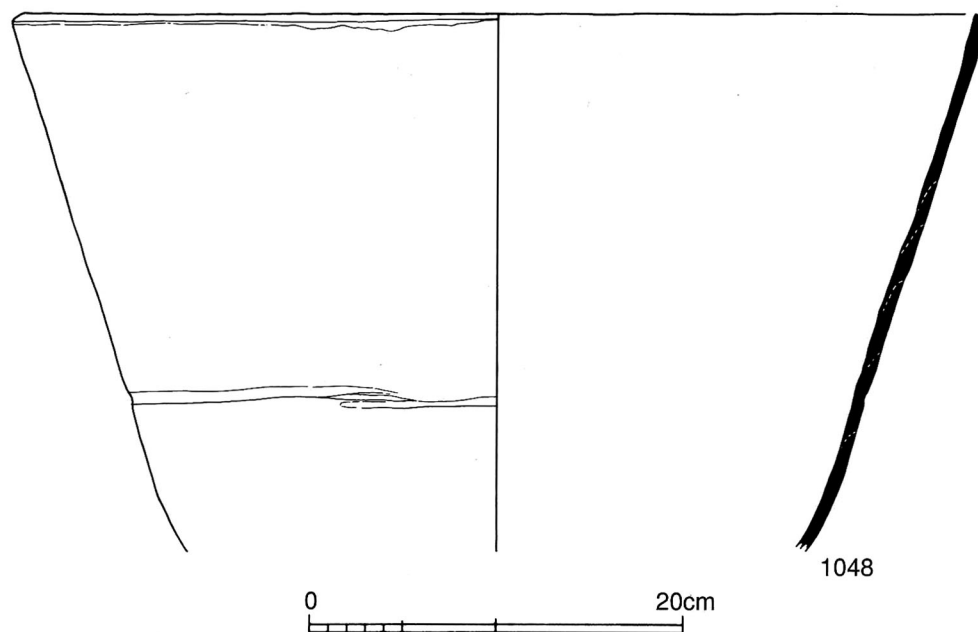
第244図 北・中央区縄文下層遺構出土後期土器-2



第245北・中央区縄文下層遺構出土後期土器-3 (SK412)



第246図 北・中央区縄文下層遺構出土後期土器-4・縄文下層出土土器



第247図 北・中央区縄文下層出土土器

の土器を図化した。1014から1016はS K 415出土で、平行沈線間にL R縄文を充填した波状口縁深鉢形口縁部、および頸胴部破片がある。1016は深鉢底部で、外面は条痕調整後の軽いナデ、底面は中心粗面のヘソ状凹底である。1017から1022はJ 12区P 1出土分で、1017は口縁波頂部に縦位蛇行沈線文を配した内彎口縁深鉢。口縁に沿っては1本の沈線がひかれ、以上は無文、間はL R結節縄文を多段に配し、下限は頸部をなでることにより段を作出しておこなう。1019もL R結節縄文が口縁内面に施された広口深鉢。口頸部は外反し、尖り気味の口唇部にいたる。1020も欠損してはいるが、同様の器種で、口縁内面に結節縄文あるいは絡げ縄を施文していたもの。胎土には結晶片岩を含んでおり、紀ノ川流域と関連ある個体か。1018は内彎口縁に4本撚R L縄文、その後両端刺突沈線で施文する。1021、1022は縄文地深鉢の胴部で、それぞれR L、L R。前者は強めのナデで段を形成し頸胴部を画した後、胴部最上部に絡げ縄を配す。後者は沈線によって頸胴部を画するものである。

2. 包含層出土の土器 (第246・247図)

図化したのは特徴的な3点のみ。1045は波状口縁深鉢波頂部で、R L縄文地に上弦重弧線や平行沈線文を描く。1046は角閃石を含み暗褐色を呈し、生駒西麓産胎土と思われる浅鉢形土器。口縁部外面に帯状に平行沈線文をひき、その間に左右弧状の区切り沈線文を配す。区切りの単位に規則性はみだしくい。沈線幅は他の土器に比しても太く、かつ浅いものである。文様意匠は関東地方・加曾利B 1式に類似している。1047は口径51.2cmに復元される無文の広口深鉢で、頸胴部とも横走向を基調とした巻貝条痕調整、全体の形状は砲弾形に近い。ただし、頸胴部界にあたる位置に1条の凹線が配されている。口頸部内面は軽くナデ調整されてはいるものの、条痕がみられる。この個体は元住吉山I式に比定される。

3. 土偶

D10は1片からなる土偶で中型の土偶である。全長4.7cm、最大幅5.6cm、最大厚1.4cm、をはかる。片腕を欠損しているが、両手間は7.8cm程度と考えられる。頭部と両足を欠損するが、全長は10cm程度と考えられる。

形態から見ると、残存部は胴部と左腕であり、頭部、右腕、両足を欠損する。胴部はほぼ方形で胴部側面は平坦に仕上げられ、板状を呈する。腕はやや短めで先端が丸くおさまる。上方からみると僅かに前に曲げている。頭部との接合はソケット状ではなくほぼ平坦に剥がれ痕跡が残っている。

成形としては欠失している両脚の断面は明らかに粘土帯を2本束ねており、股の亀裂が背中中央に入っていることから、胴部も2束の粘土からなる分割技法によるものと考えられる（第12章第5節写真2レントゲン写真参照）。

文様として正面には乳房の表現はないが僅かに腹が膨らむ。腹部中央には”へそ”を棒状工具で斜め下方から突き、細かいヘラで右に6本、左に5本の沈線を放射状に描き、上方からまわりに短く弧線を描いている。またそれらの下方の脚付け根までの間に水平な沈線を描いている。腹部の特徴的な表現は”へそ”から放射状に伸びる妊娠線かもしれない。

胎土中には直径0.5ミリ程度の石英やチャートを含む。土偶の内外面の色調は5YR6/6橙色を呈する。

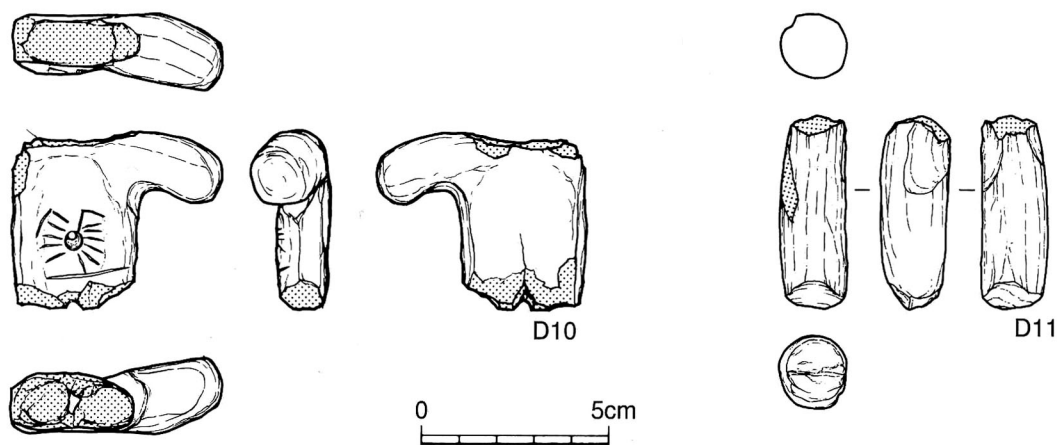
時期を考えると、出土位置が北区K14区で、層位は赤褐色土層であり、縄文中期・後期・晩期滋賀里Ⅲa期の土器が混在しており、土偶の形態や文様からしても後期の所産と考えたい。

D11は土偶脚部或いは腕部と考えられ、全長5.2cm、幅1.7cm、最大厚1.8cm、をはかる。

形態としては残存部の断面は円形で直線的に伸び全体は丁寧になでられている。脚先端部と考えられる部分は両側からつままれ、他方は脚付け根には押さえ痕が残るが欠損しており詳細は不明である。

胎土中には直径0.5ミリ程度の石英や長石が多く、チャートや黒雲母も若干含む。色調は10YR6/3にぶい黄橙色を呈する。

時期を考えると出土位置が中央区M17区で、出土層位は暗青灰色シルト質極細砂層であり、周辺からは縄文中期および後期の土器が多数出土した箇所であるが、後期中頃から後半の可能性を考えている。



第248図 北・中央区縄文下層出土土製品

第3節 石器

(山本)

下層では、打製石器38点、磨製石器12点が出土した。

打製石器のうち、石鏃と楔形石器で約71%をしめ、なかでも石鏃は打製石器全体の43%である。

石鏃ではA類が半数の50.1%で、以下C類(25.1%)、B類(18.8%)と続く。楔形石器ではA類が半数以上を占め、B類が半数以下となり、この比率は他の文化層での様相と異なる。石匙は4点出土している。縦長のE型が3点、横長が1点である。

磨製石器の中で、特に注目されるのは、石剣(S7034)と砥石(S7033)である。石剣は長さ51.7cm、幅4.3cm、厚さ3.8cm、重さ1460gを計る完形品である。両端は研磨されており尖っていない。図上端は自然面を僅かに残し、下端は丁寧に研磨されている。周囲には縦方向あるいは斜め方向の研磨がみられ、およそ10程度の面が数えられる。石材は緑色の結晶片岩で、沼島または四国徳島県産と考えられる。砥石は長さ43cm、幅24.4cm、厚さ21.7cmを測る。佃遺跡出土品の中では最も重く30kgを計る花崗岩製のものである。なお砥石として使用された面は上面に限られ、凹凸はないことから玉などの小型品ではなく、大型品を研いだものと考えられる。これらの出土状態は石剣をやや斜めに突き刺し、それに近接して砥石が置かれていたことから、これらの石器の性格は祭祀的なものと考えている。また両者の関係はこの石剣を研いだものがこの大型花崗岩製の砥石である可能性が高い。

第28表 北・中央区縄文下層石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	4	25.0	B1			C1	2	12.5	D1			E1		
A2	3	18.8	B2	1	6.3	C2	1	6.3	D2			E2	1	6.3
A3			B3	2	12.5	C3	1	6.3	D3			E3		
A4			B4			C4			D4			E4		
A5	1	6.3	B5			C5			D5			E5		
A計	8	50.1	B計	3	18.8	C計	4	25.1	D計			E計	1	6.3

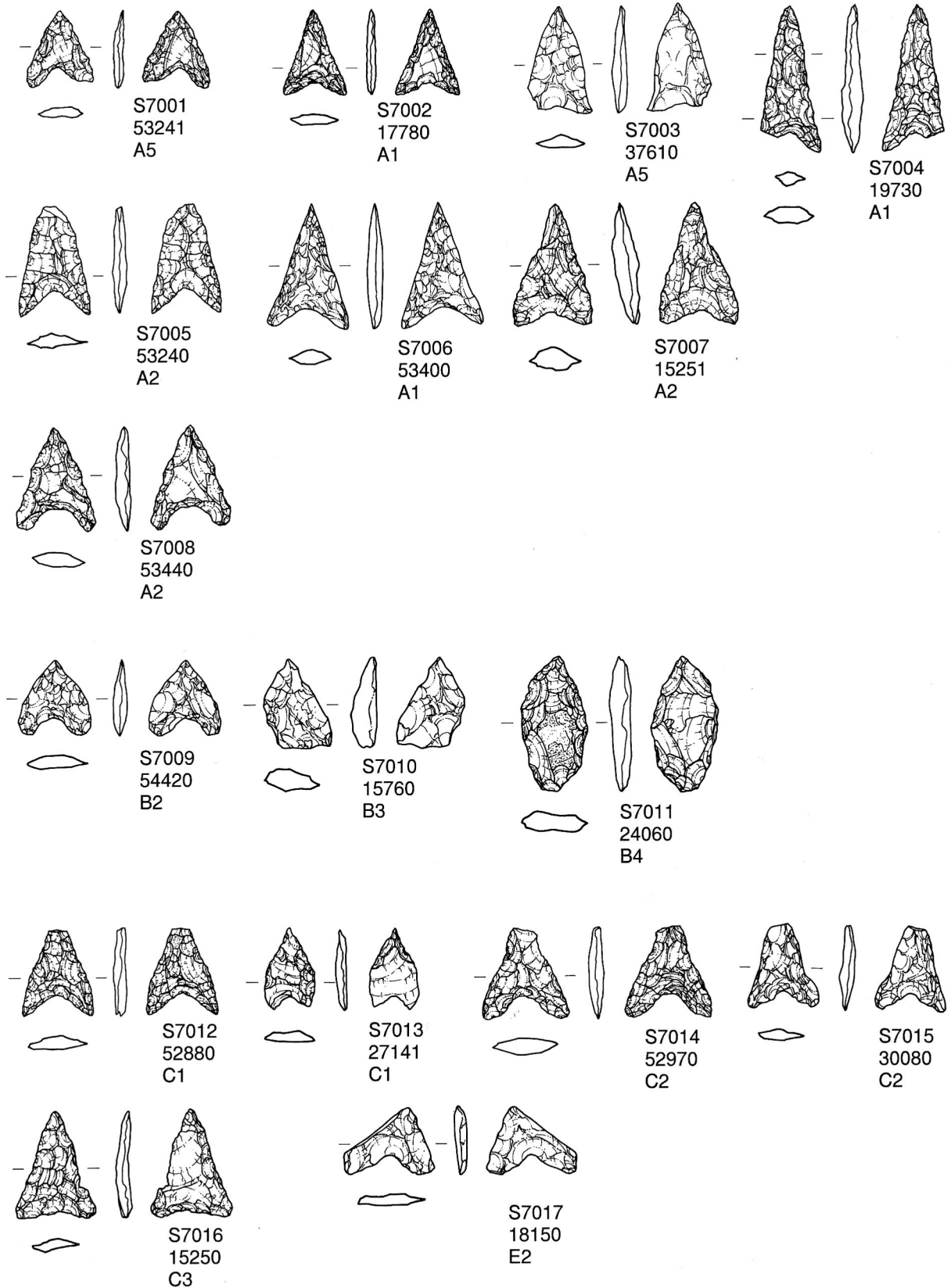
第29表 北・中央区縄文下層楔形石器分類表

	点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1	1	9.1	S1	1	9.1
A2	1	9.1	B2P			S2		
A3	2	18.2	B2L	2	18.2			
A4	3	27.3	B2V	1	9.1			
			B3					
			B4					
			B?					
A計	6	54.6	B計	4	36.4	S計	1	9.1

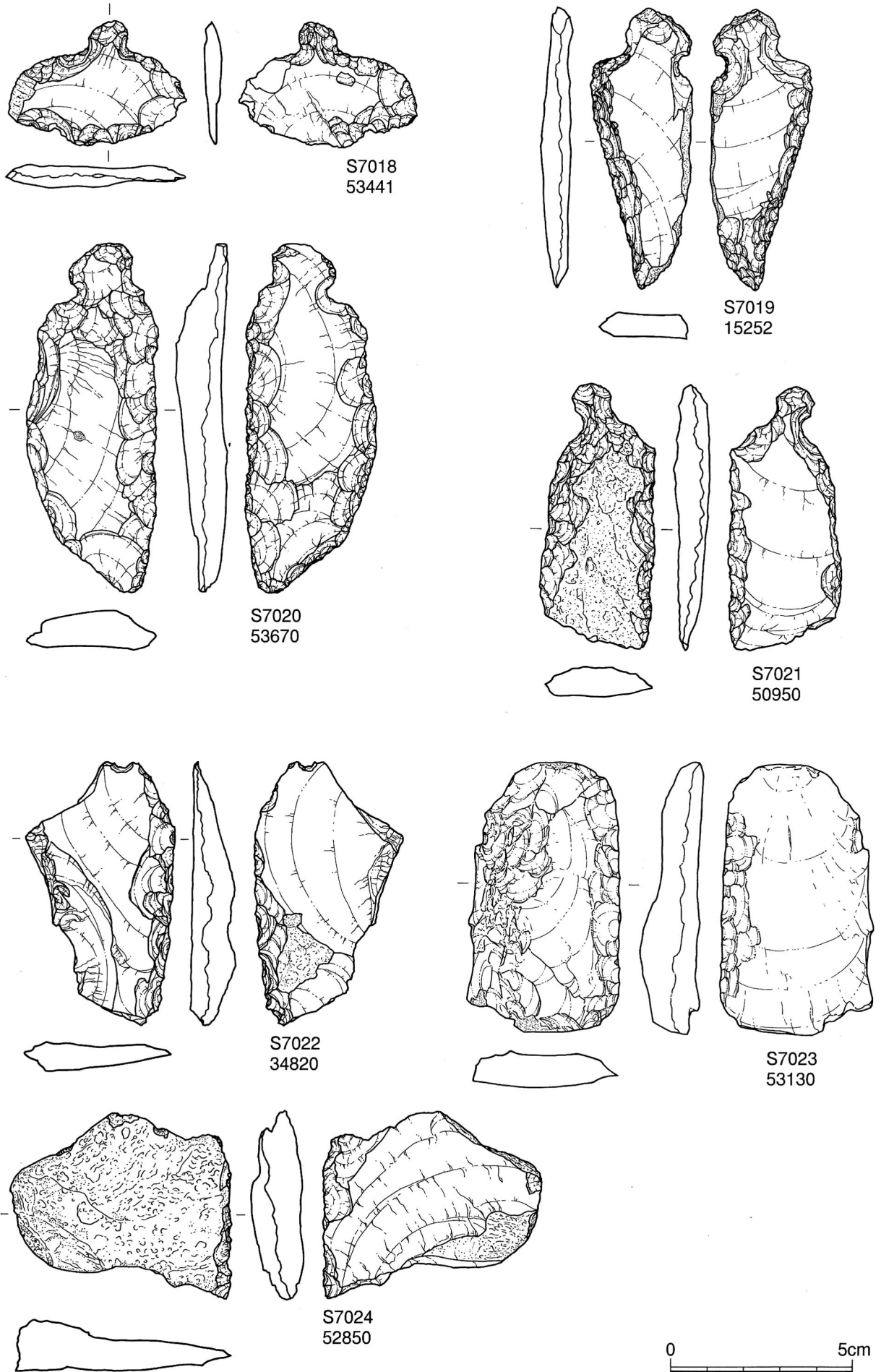
第30表 北・中央区縄文下層石器組成表

	打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	16	42.1	AX	0		
DR	0		SS	1	8.3	
SC'	4	10.5	HS	0		
SC	3	7.9	SD	5	41.7	
RF	1	2.6	SH	3	25.0	
UF	2	5.2	SP	0		
PS	11	28.9	SW	3	25.0	
CR	1	2.6	その他	0		
DM	0					
小計	38	-	小計	12	-	

第3節 石器

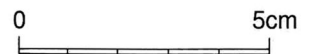
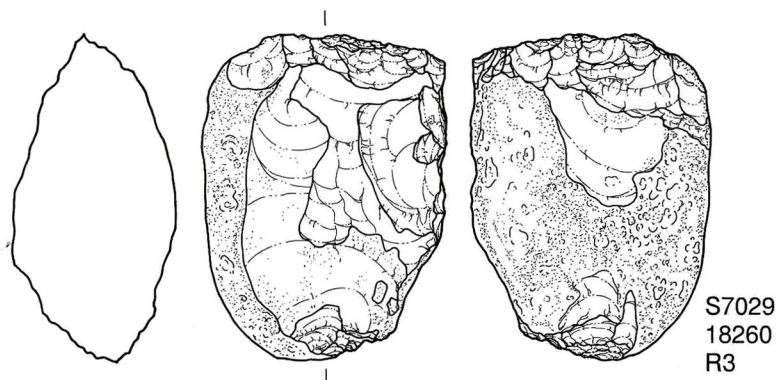
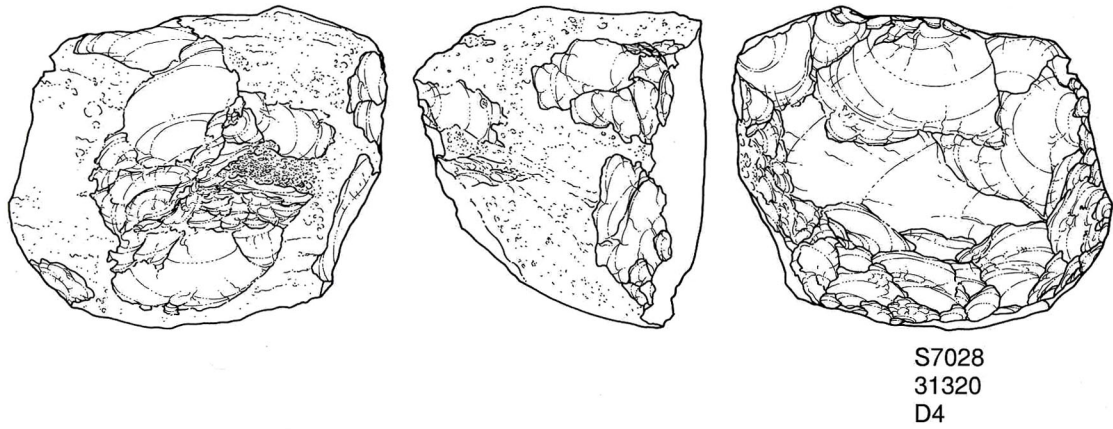
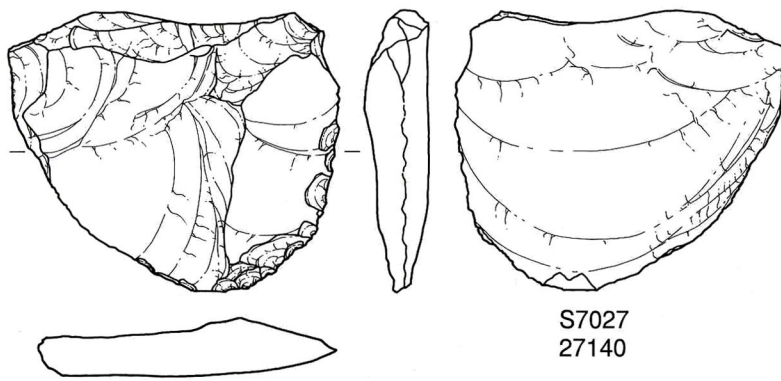
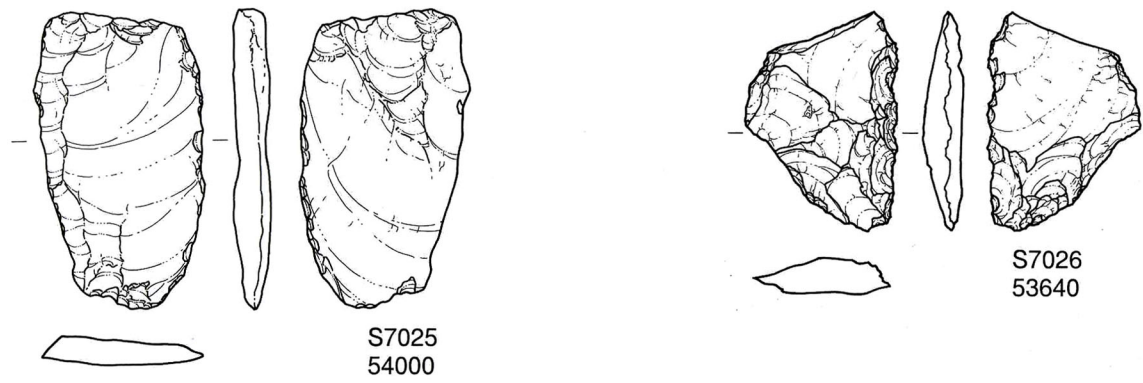


第249図 北・中央区縄文下層出土石鏃

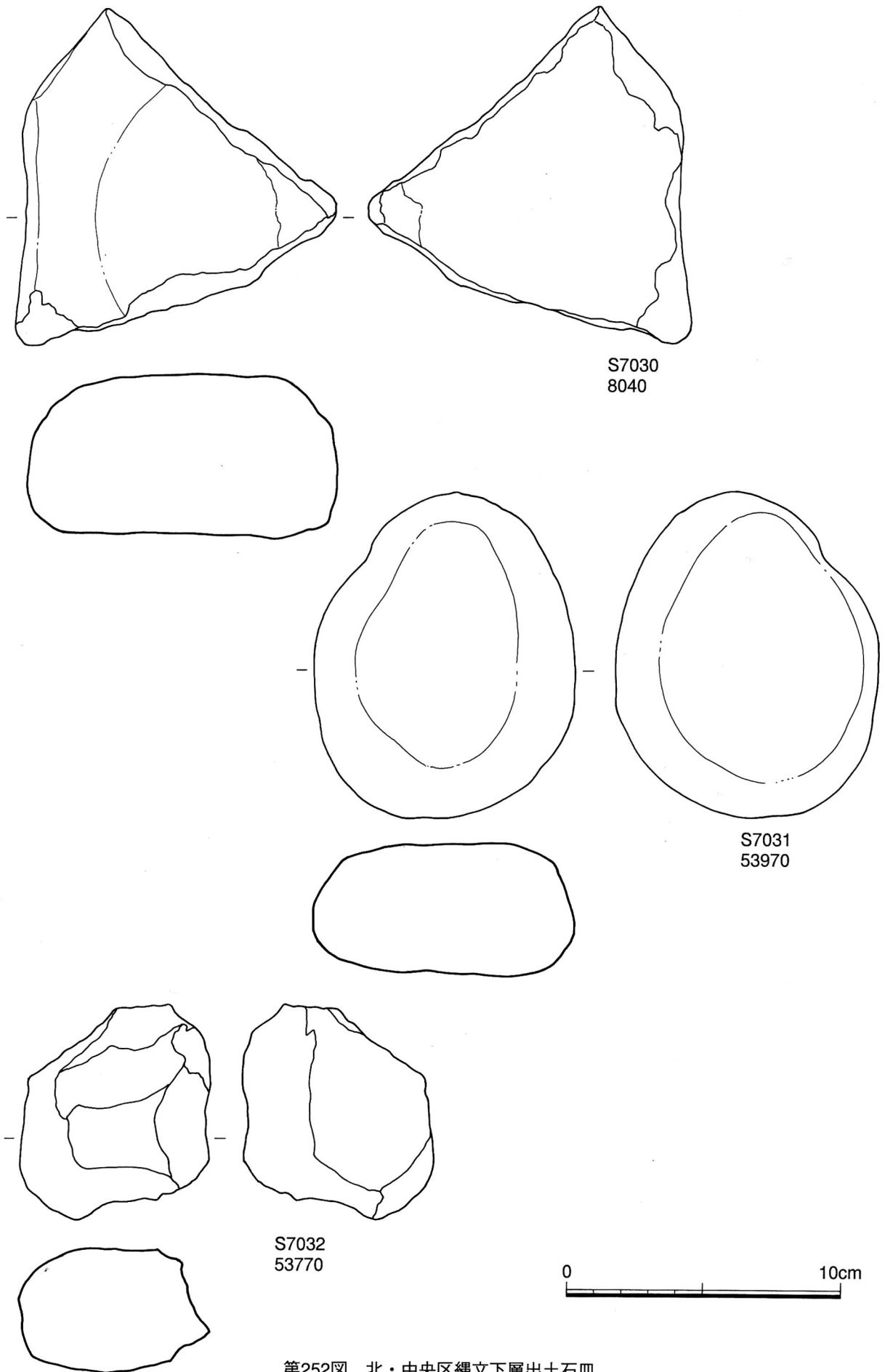


第250図 北・中央区縄文下層出土石器-1

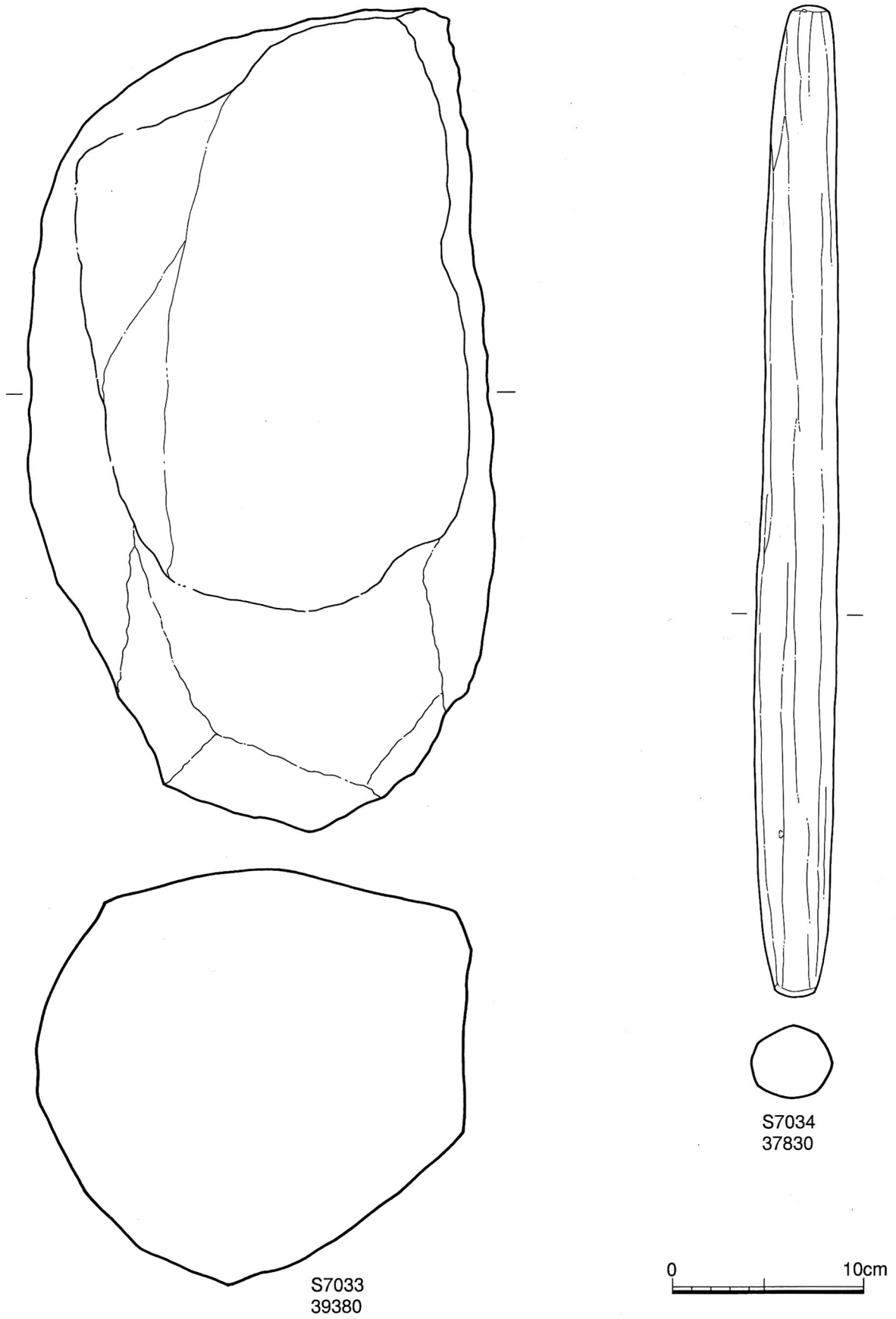
第3節 石器



第251図 北・中央区縄文下層出土使用痕のある剥片・加工痕のある剥片・石核



第252図 北・中央区縄文下層出土石皿



第253図 北・中央区縄文下層出土砥石・石剣

第4節 その他の遺物

(深井)

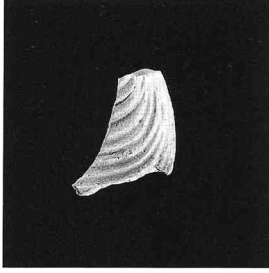


写真23 貝写真

その他の遺物としては貝が1点出土している。

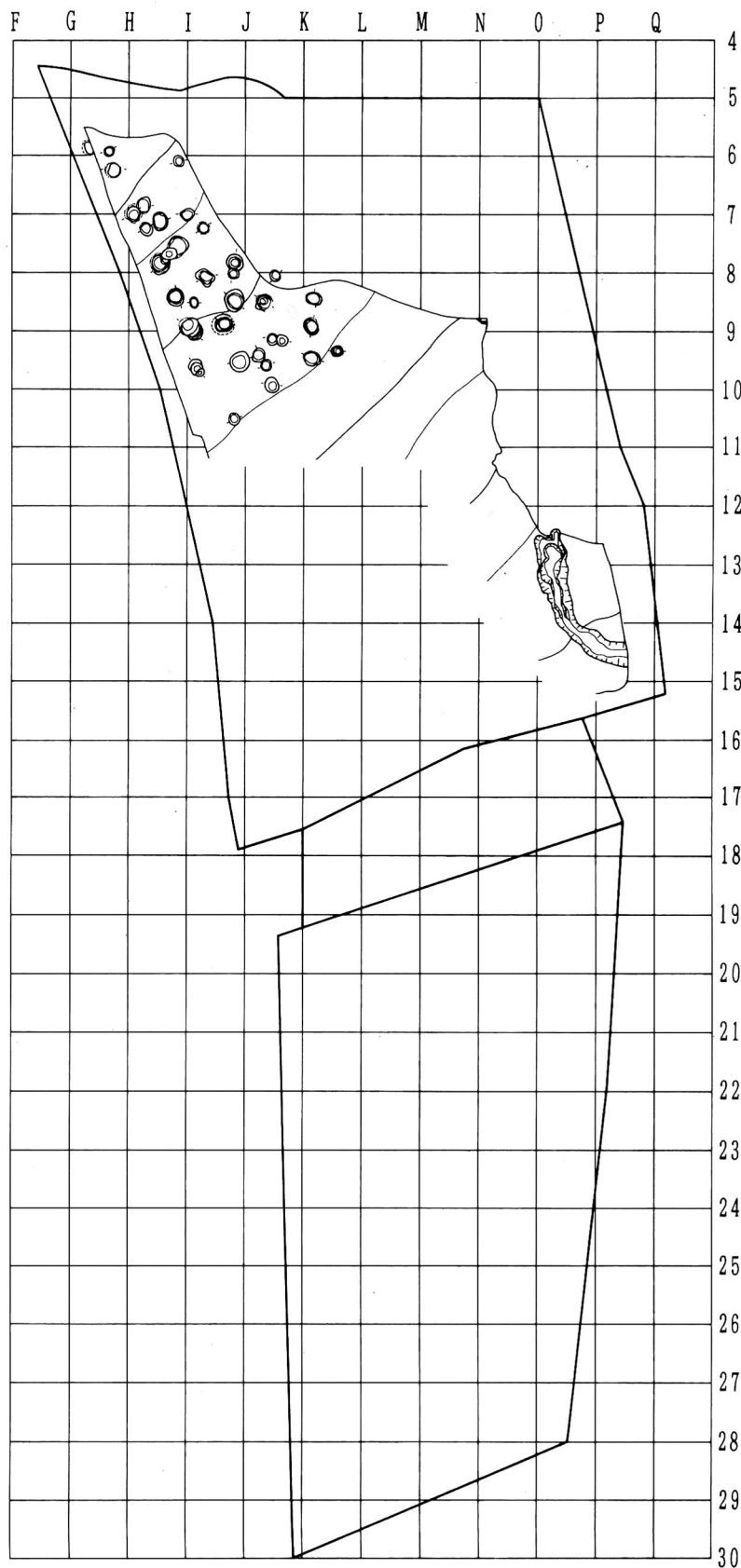
No.3809は北区L14区土坑状落ち込みの暗褐色細砂から出土したものである。形態的特徴からヤマトシジミの一部であることが判る。残存長20mm、10mm、厚さ1.5mmを計る。低湿地をも含む遺跡からは多数の貝類が出土するが、当遺跡から出土した貝はこの1点のみである。この理由については次のことが想像できる。1.当時の海浜部に当たる場所だが、タンパク源を他に求められたことから、貝類への依存割合が極端に低かった。2.日常的に貝類の依存があったが、大型動物残滓処分地（南区崖下付近）以外に小型動物残滓処分地が存在した。以上の可能性が考えられる。

第7章 縄文中層の遺構・遺物

第1節 遺構 (山本)

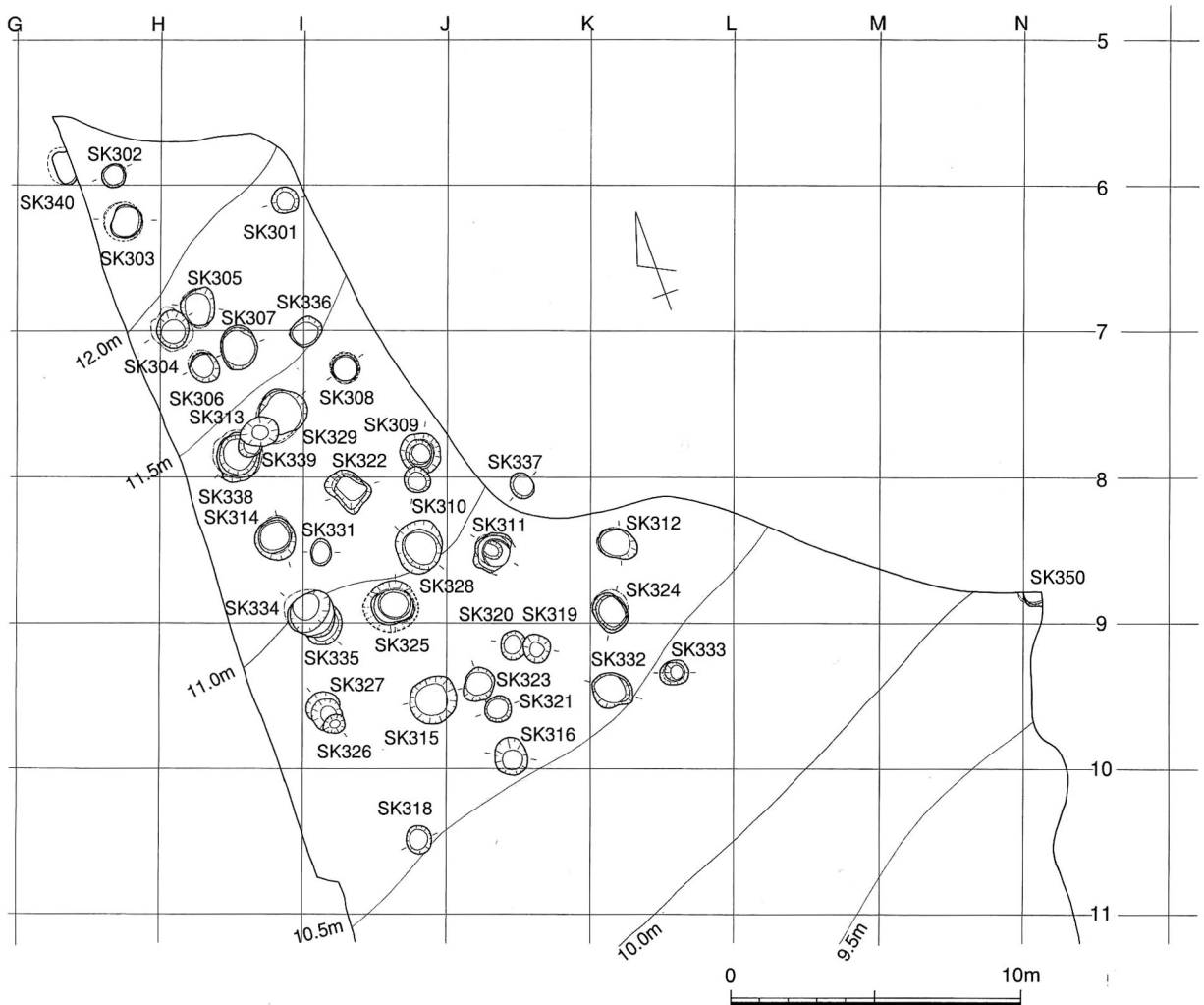
この時期の遺物包含層は北区・中央区の全域で認められるが、遺構については11ライン以北のみで検出できた。この文化層では、39基の土坑を検出した以外は、明確な遺構は検出されなかった。検出できた土坑群の北東側は、弥生時代以降の流路によって、この時期の遺構面が消滅しているため、本来はさらに土坑群が広がっていた可能性が高い。ただ、唯一S K 350のみその他の土坑の集中箇所から離れている。また、この土坑群の西側についても、調査対象範囲外になっているため、調査はできなかったが、同様の地形・土層が続くことから、西側にも土坑群が広がるのが予想される(第255図)。なお北区南東隅では北から南東方向に流れる自然流路が検出された。この流路はV字形を呈しており、遺物は少量出土したのみである。

縄文中層文化層では、この文化層と前後する文化層で検出した溝状遺構や住居跡を想定できる柱穴は認められなかった。このことから、下層文化層や上層文化層では居住域であったところが、中層文化



第254図 縄文中層遺構配置図

第1節 遺構



第255図 北・中央区縄文中層貯蔵穴群

層ではなんらかの理由で居住域の機能を失った可能性が高く、貯蔵場所としての機能が考えられる。

縄文中層文化層で検出した土坑の埋土は最下層付近にはシルトや極細砂が堆積するが、中・上層は中砂や粗砂にて充填されている。最下層のシルト層などで堅果類の幼果の確認にあたったが存在せず、性格の決め手に欠けた。その後、SK303やSK308土坑底面に木の実の圧痕が確認されたことから、これらの土坑はイチイガシをはじめとしたドングリの貯蔵穴であると考えた。

出土遺物として土坑埋土中から、唯一SK336に5期（元住吉山I式2期）の深鉢形土器が入り込んでいたが、器壁表面の磨滅が著しく、厳密に原位置を保ったものとは判断できない。縄文中層文化層の遺物包含層中には、縄文後期後葉の宮滝式土器まで認められるので、これらの貯蔵穴群の時期は、縄文時代後期中葉の元住吉山I式以降、後期後葉の宮滝式までの間と推定される。

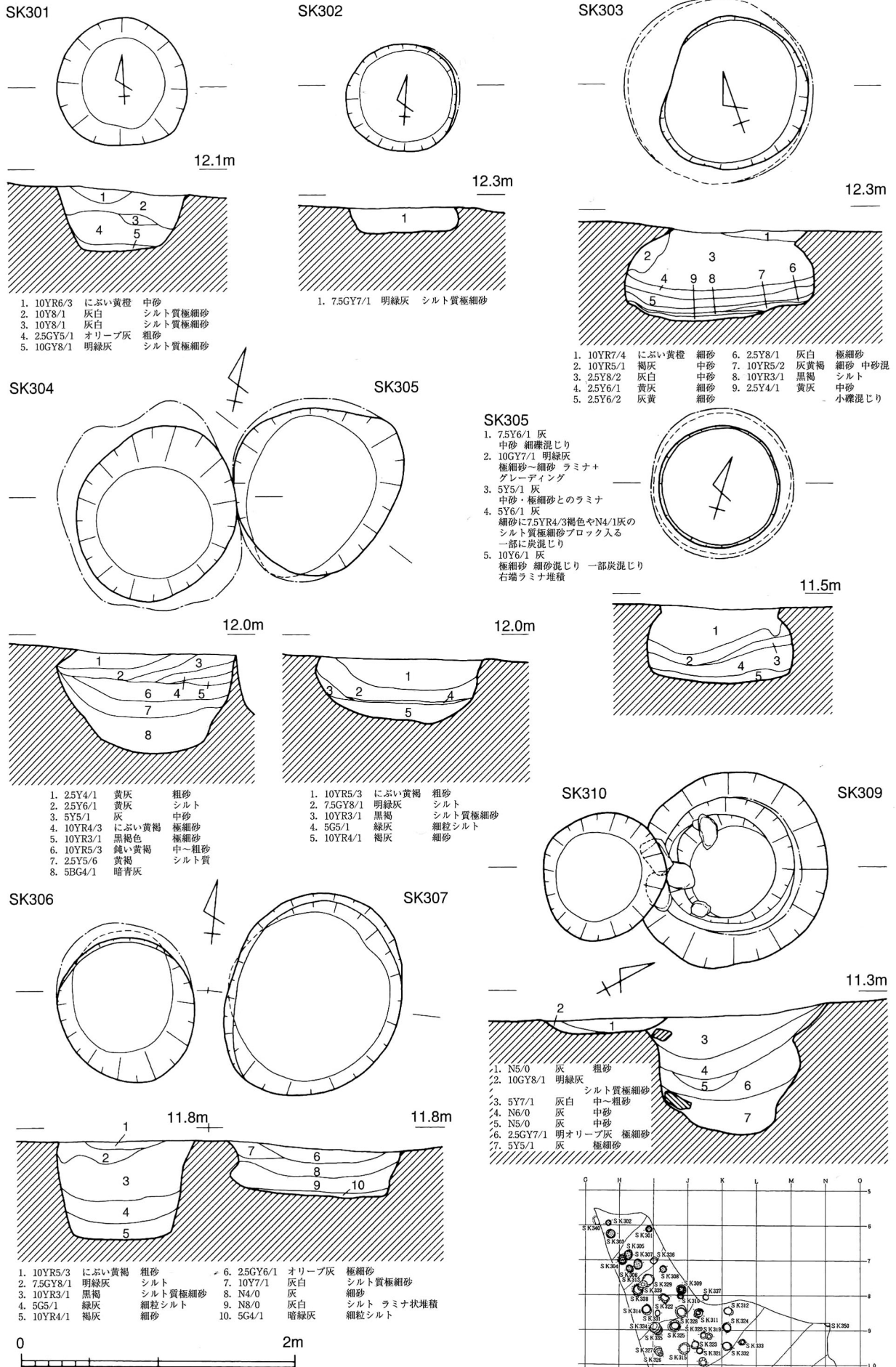
貯蔵穴は39基検出されたが、存在のあり方には、いくつかの形態が読みとれる。

- A 1基単独で存在するもの
- B 2基以上が並列して存在するもの（SK304と305、306と307）
- C 2基が重なり合って存在するもの（SK309と310、326と327）
規模が同等のものや、大小の差があるものに細分できる
- D 3基以上が重なり合って存在するもの（SK313・329・338・339）

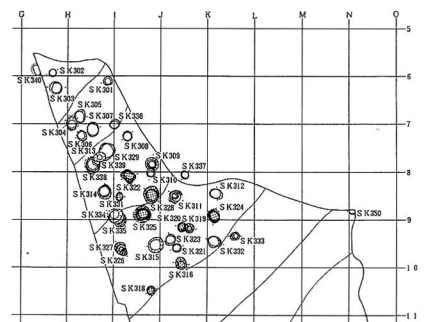
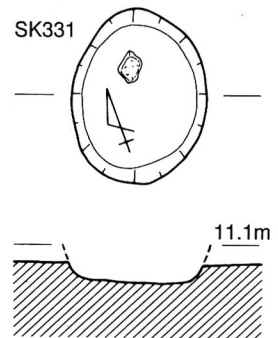
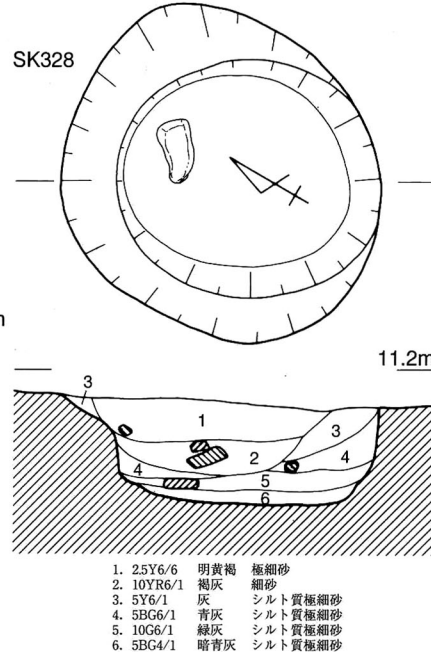
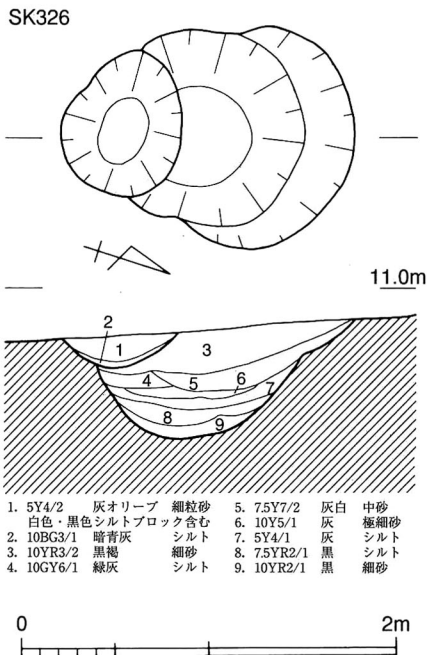
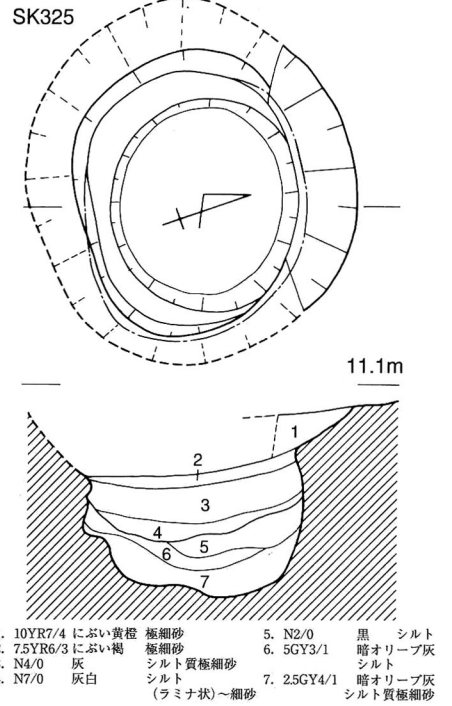
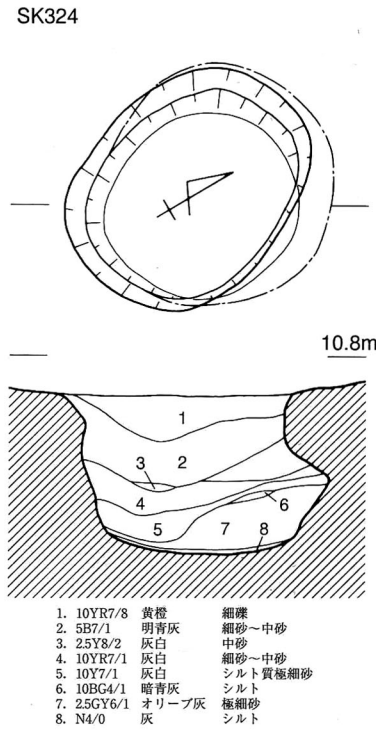
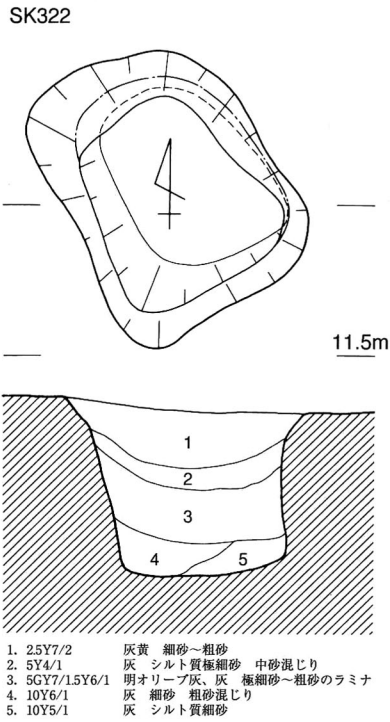
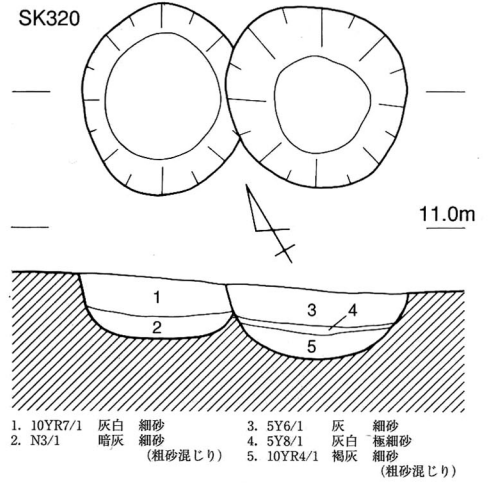
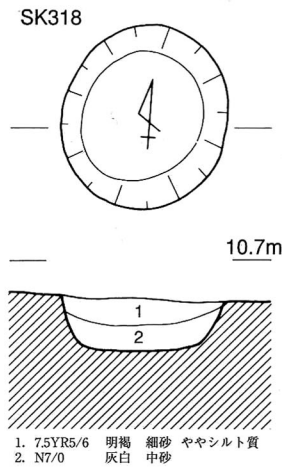
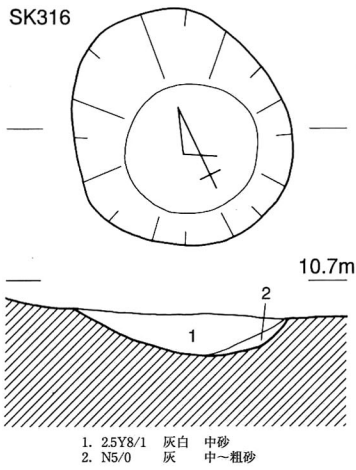
第31表 北・中央区縄文中層土坑一覧表

	形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	平面形態	深さ/長径(cm)	断面形態
SK301	A	100	95	50	円形	0.5	
SK302	A	80	85	20	円形	0.25	
SK303	A	140	130	65	円形	0.46	フラスコ状
SK304	B	150	130	70	円形	0.47	フラスコ状
SK305	B	140	120	45	円形	0.32	
SK306	B	120	100	70	楕円形	0.58	
SK307	B	150	125	35	楕円形	0.23	
SK308	A	110	110	55	円形	0.5	フラスコ状
SK309	C	140	130	85	円形	0.61	
SK310	C	95	90	10	円形	0.11	
SK311	A	160	130以上	110	円形	0.69	フラスコ状
SK312	A	150	110	55	楕円形	0.37	
SK314	A	150	140	90	円形	0.6	フラスコ状
SK315	B	170	160	20	円形	0.12	
SK323	B	120	100	30	楕円形	0.25	
SK321	B	90	90	30	円形	0.33	
SK313	D	135	100	35	楕円形	0.26	
SK339	D	90	40以上	50	円形	0.56	
SK320	D	200	160	80	楕円形	0.4	
SK338	D	180	170	80	楕円形	0.44	
SK316	A	130	120	20	円形	0.15	
SK318	A	100	90	25	円形	0.25	
SK319	B	100	100	35	円形	0.35	
SK320	B	100	90以上	30	円形	0.3	
SK322	A	150	105	90	隅丸方形	0.6	
SK324	A	140	130	80	楕円形	0.57	フラスコ状
SK325	A	150以上	150以上	100	円形	0.67以下	
SK326	C	75	65	15	円形	0.2	
SK327	C	120以上	120	60	楕円形	0.50以下	
SK328	A	190	170	55	楕円形	0.29	
SK331	A	90	70	10以上	楕円形	0.11以上	
SK332	A	150	125	30	楕円形	0.2	
SK333	A	105	85	70	楕円形	0.67	
SK334	C	190	160	55	楕円形	0.29	フラスコ状
SK335	C	140	不明	45	楕円形	0.32	
SK336	A	110	100	30	楕円形	0.27	
SK337	A	90	80	25	楕円形	0.38	
SK340	A	135	80以上	25	楕円形	0.19	フラスコ状
SK350	A	80以上	30以上	50	不明	0.63以下	フラスコ状

第1節 遺構

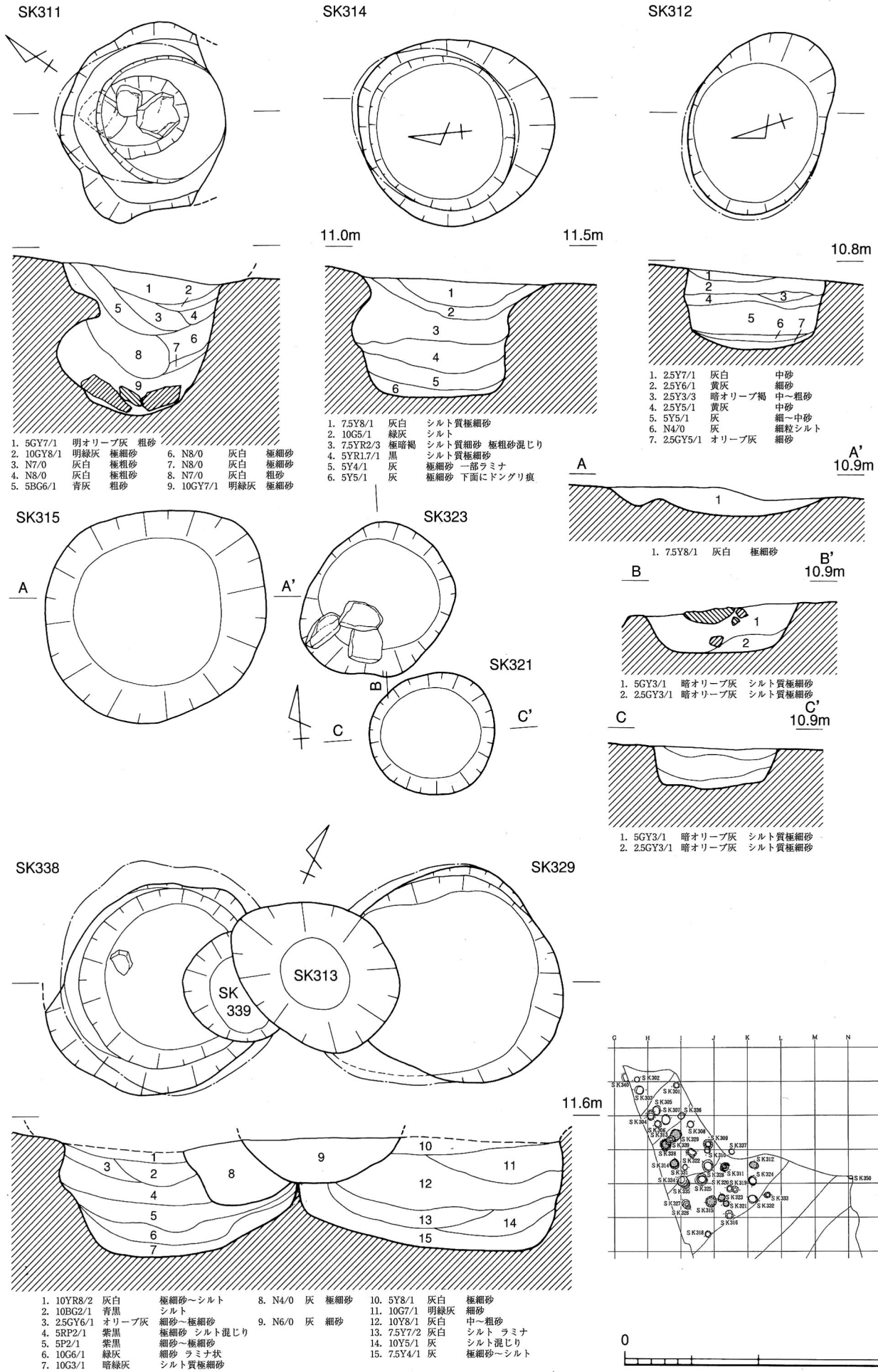


第256図 北・中央区縄文中層貯蔵穴-1

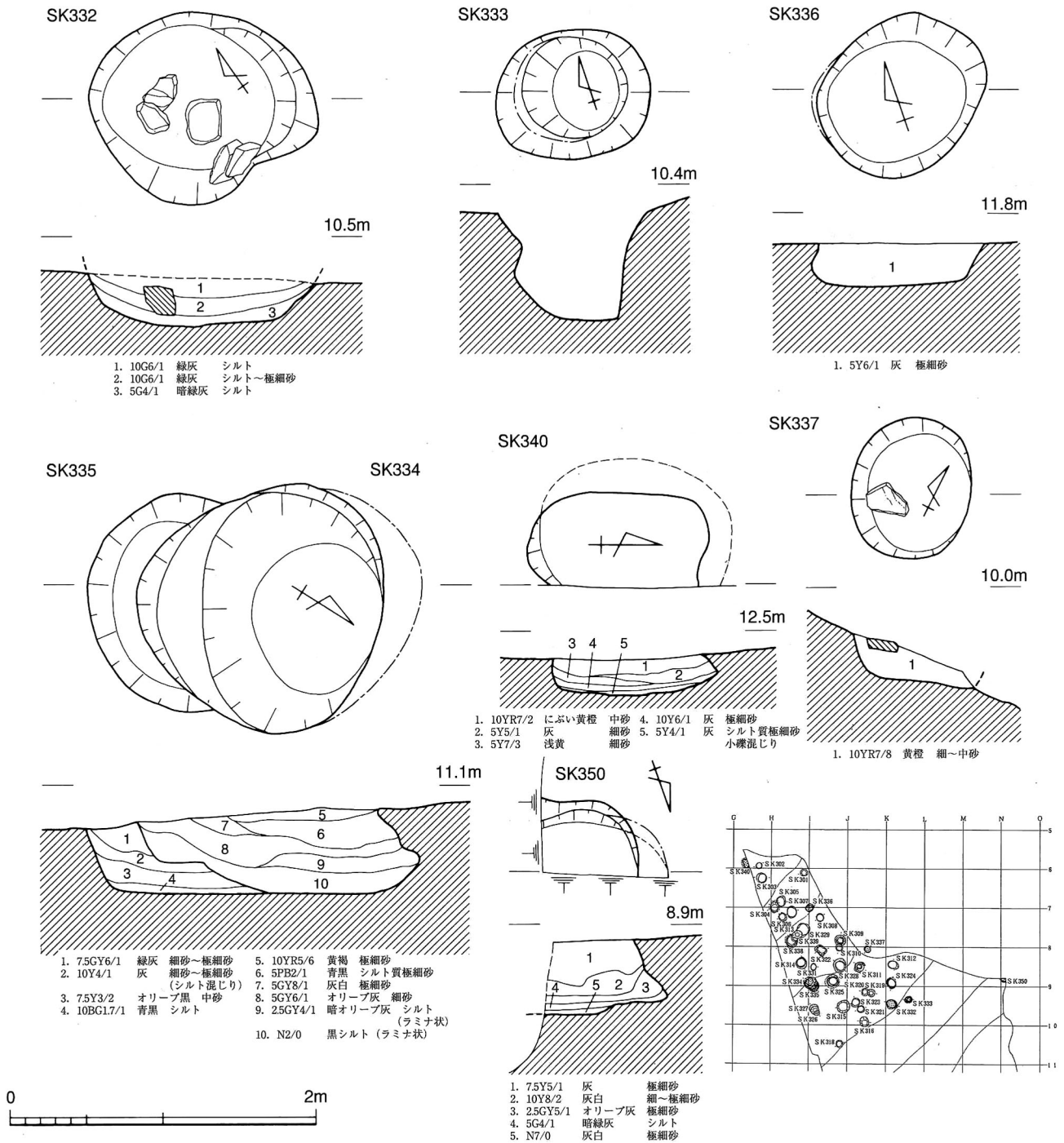


第257図 北・中央区縄文中層貯蔵穴-2

第1節 遺構



第258図 北・中央区縄文中層貯蔵穴-3



第259図 北・中央区縄文中層貯蔵穴-4

39基の貯蔵穴の内、単独で存在する形態Aは20基 (51.3%)、形態Bは4組・9基 (23.1%)、形態Cは3組・6基 (15.4%)、形態Dは1組・4基 (10.3%) である。

また土壇長径の平均値は100cmを越え、128.6cmである。深さについては、平均49.6cmで、100cmを越えるものは2基 (5.1%) しか認められない。深さ／長径の比率平均値は0.39である。なお、断面形態がフラスコ状になるものは9基で、全体の23.1%である。

2基以上の貯蔵穴が並列する (B類) では、S K 304・305やS K 319・320の様にほぼ同規模のものが並列する傾向が強い。一方、2基の貯蔵穴が一部重なり合うS K 309・310やS K 326・327の様に、平面形態が大きくて深さも比較的深いものと、平面形態が小さくて、比較的浅いものとが対をなす傾向が指

第1節 遺構

摘できる。形態の異なる2者が併存することで、機能的な使い分けがあった可能性が高い。小さくて浅いものが、他方を切っていることも重要な要素かもしれない。

第2節 土器

(岡田・深井)

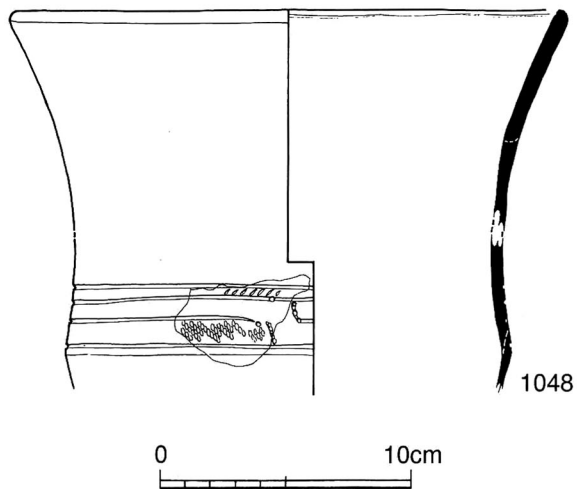
元住吉山I式2期から宮滝式までの資料が多くみうけられるが、後者は多くない。

1. 中層遺構出土の土器 (第260図1048)

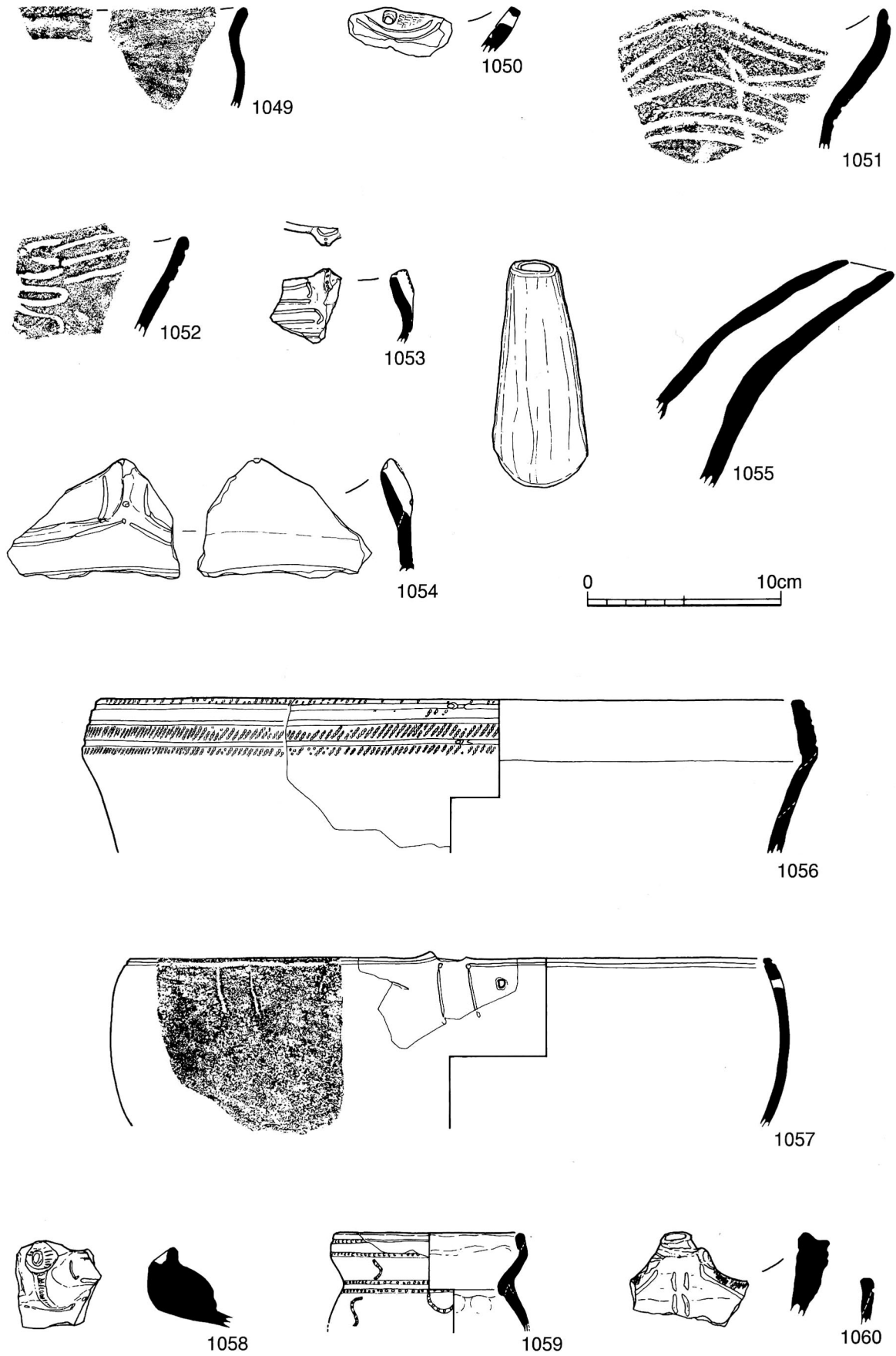
北区貯蔵穴群よりいくらかの土器が得られてはいるものの、摩滅破碎著しく、年代を判別できる資料は限られている。ここに図化、掲載したのはS K 336から出土した個体で、同一個体と思われる破片資料から復元したものである。摩滅顕著。口縁内面に沈線がひかれる広口深鉢で、それ以上の加飾の有無は判然としない。頸部から沈線で画された胴部は幅狭い文様帯に縦位刺突沈線のクランク状文を描く。RL磨消縄文。なお、胴部最上帯は斜刻帯としている。形態上境の弱い頸胴部に対し、腹部は屈曲し、器壁薄く底部へと向うようである。南区縄文下層8層に主体をなす元住吉山I式2期に比定されようが、これが遺構の年代を決定するものかは判断しかねる。

2. 包含層出土の土器 (第261~268図)

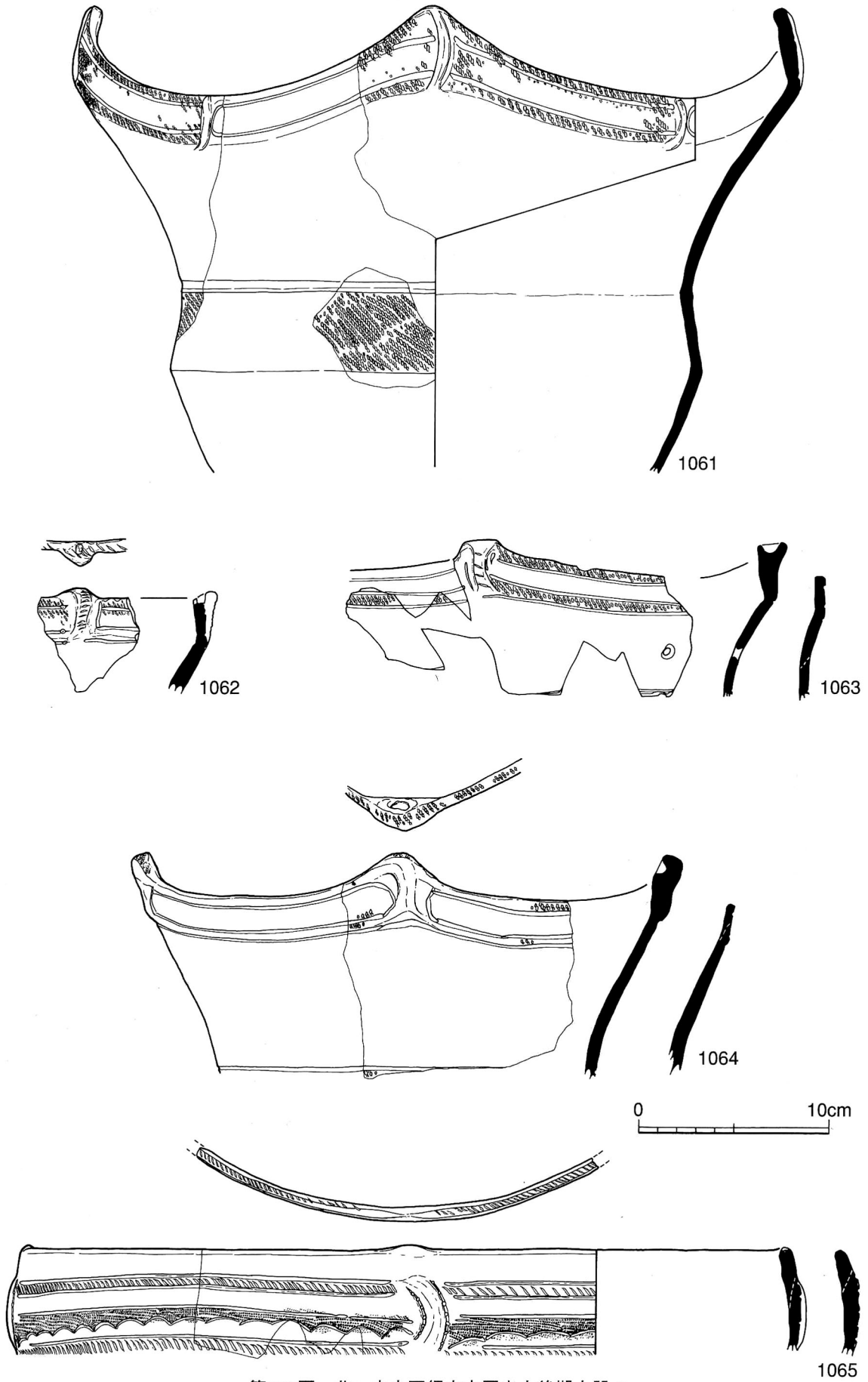
元住吉山I式に先行する一群として1049から1061がある。1049は北白川上層式に継承される鉢形土器。口縁部外面にはLR縄文が施されているが、胴部は無文のようである。1050は広がる口縁部をもつ浅鉢形土器か。若干突出する部分があり、そこに小孔が穿たれている。その下には上弦の平行弧線が取り囲み、間を巻貝回転擬縄文で充填する。1051、1052は内彎口縁の波状口縁深鉢。波頂部である1051は、平行沈線で上下画した中に2本の平行沈線によって鋸歯状を呈す交互斜線文を展開する。1052は波底部近くと考えられ、縦位に蛇行沈線を降ろす。1053は有段内屈口縁。ただし、上半帯にも沈線が配されるほか、凸帯突起頂部には馬蹄形状沈線文が描かれる。1054にみる有段口縁は大ぶりで、凸帯突起頂部および外面基部にはそれぞれ刺突を配す。両者とも深鉢形土器となろう。1055は立体的なつくりの注口部で、磨きが顕著である。平口縁深鉢の1056は内屈する口縁部幅が広く、直前段3本摺LR縄文施文後、3本の沈線をひく。1057は198に類似する形制を示すが、外面に平行沈線施文、口唇部に突起状のものがみられる。補修孔を有する。1058および1059は注口付土器で、前者はその口縁部突起、後者は有頸の内屈口縁である。1058の口縁部は段をもち上半帯にも施文がみられる。突起は口唇部から上半帯を経て、段部にその基部を置くように配置されており、側沈線を備え、頂部には巻貝殻頂刺突をみる。1059は刺突沈線をすべての描線として用いている。1060は関東地方・加曾利B式等の影響が見受けられる個体。波頂部に突起をもつ波状口縁深鉢であるが、波頂部突起は明瞭でなく、頂部に凹点を压した円筒状の基部に粘土紐を一周させ、口唇部との接点にそれぞれ粘土を貼付しその上を压したもの。口縁部上端にはLR縄文が



第260図 北・中央区縄文中層遺構出土土器 (SK336)



第261図 北・中央区縄文中層出土後期土器-1



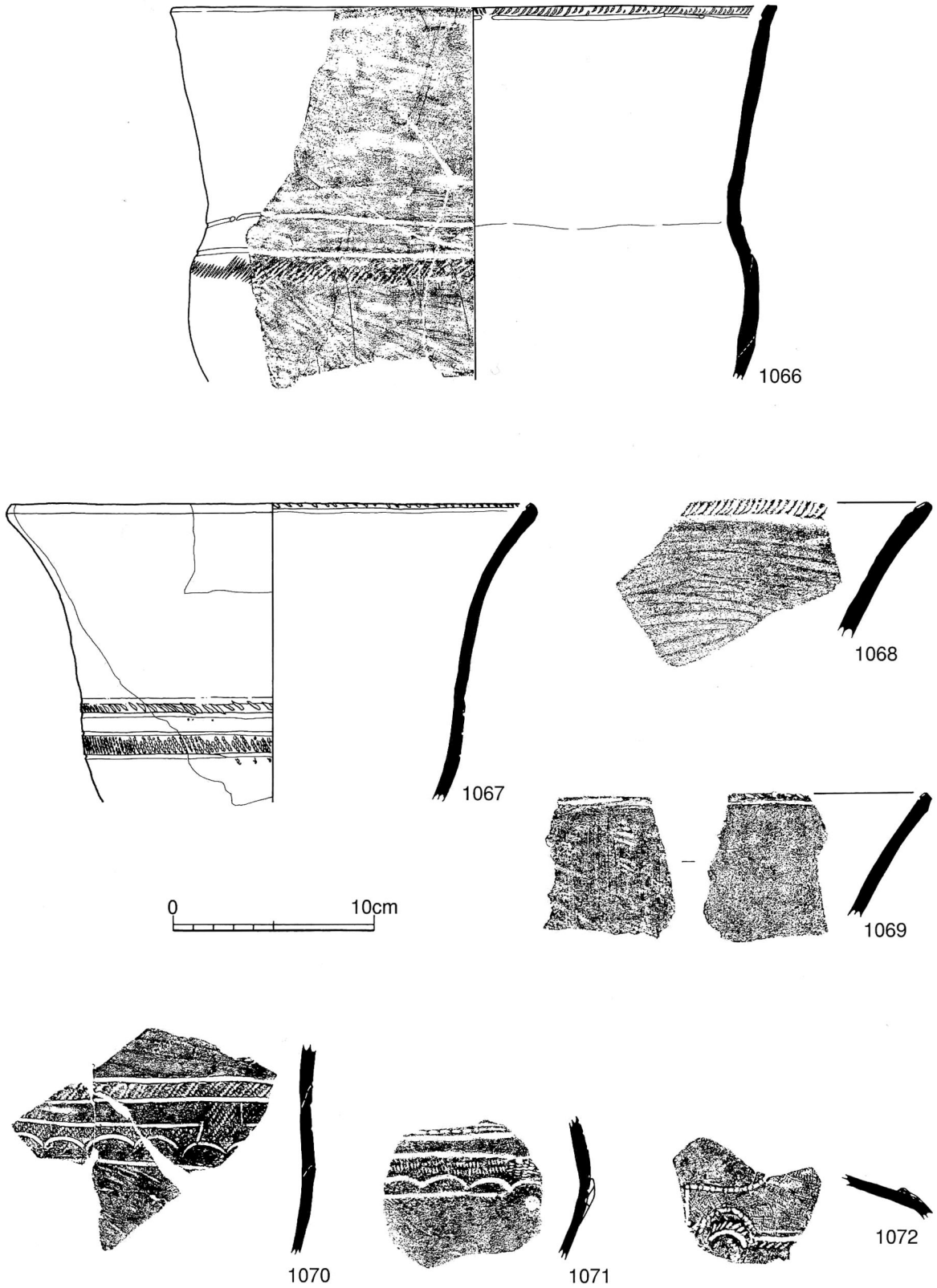
第262図 北・中央区縄文中層出土後期土器-2

第2節 土器

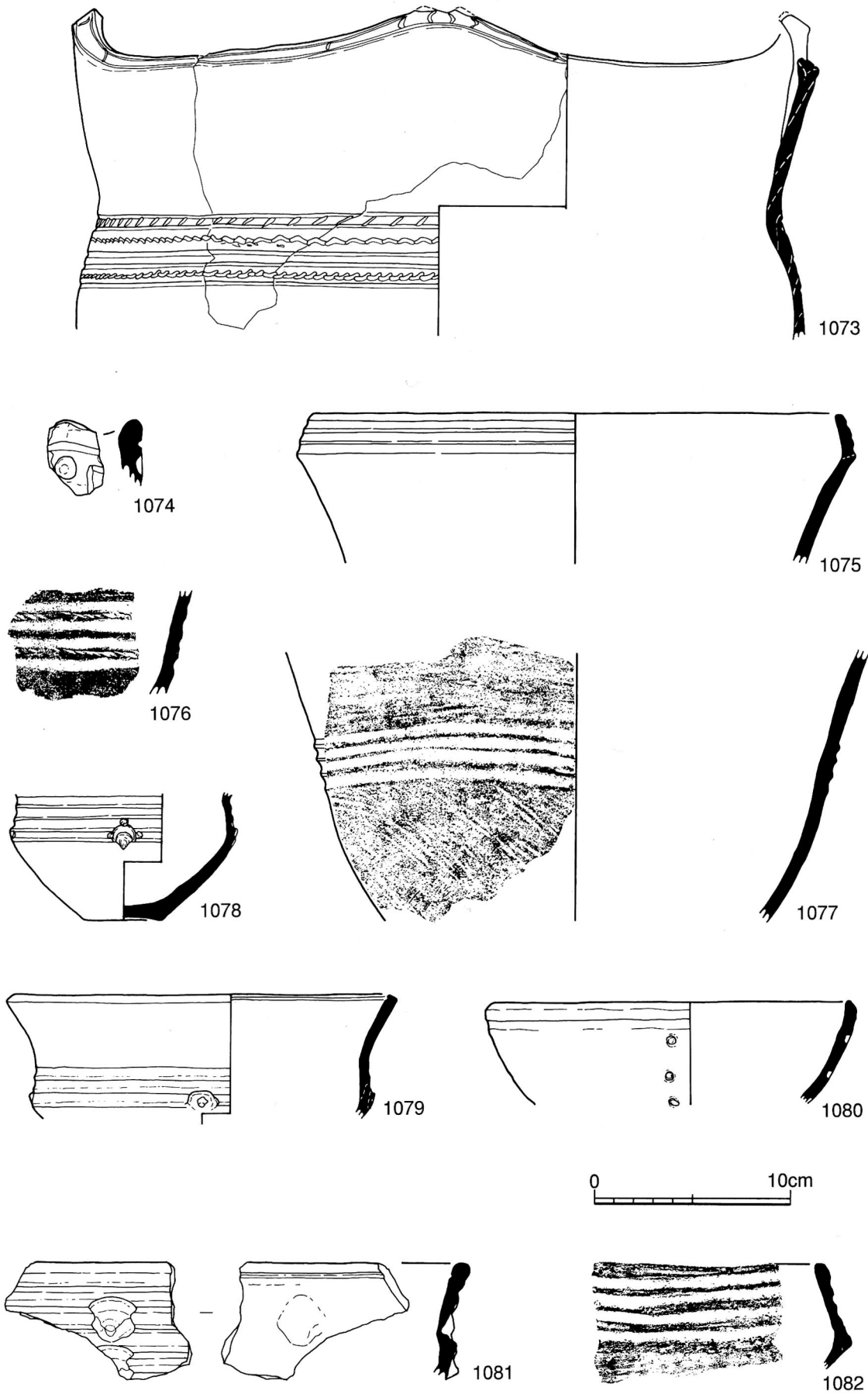
みられ、波頂下には2個一対、対弦の弧線文が縦列する。1061も異系統の土器であるが、対比される地域を特定できない。ただ、北陸ないし東海方面との関連は指摘できるか。4単位の波状口縁に復元される深鉢形土器で、波頂部および波底部には「ノ」字状凸帯を貼付する。縄文はRL、沈線施文後充填されている。

1062から1064は元住吉山I式の突起をもつ深鉢形土器で、後二者は波状口縁。前者は平口縁で、口唇部に斜刻み、「ノ」字状突起頂部には巻貝殻頂刺突をもつ。1064は口唇部から突起頂部にかけて縄文施文がみられる点で特異、突起内面の巻貝殻頂刺突も本遺跡では希少な例である。三者ともRL磨消縄文による。1065は弱いながら幅広の有段口縁で、口唇部に突起、下半帯に両側刺突沈線を従える「ノ」字状凸帯をもつ平口縁浅鉢。口唇部には斜刻みを配し、外面上半帯は無文とし、上下を斜刻帯で画した下半帯は定型的文様構成の下弦連弧文を描く。それを下限とする中央帯には巻貝回転擬縄文が充填されている。1066から1069は広口深鉢。1066は所謂生駒西麓産胎土に類似する。器体のつくりは雑で、口頸部が直に立ち上がり、口径程度に腹部が張る点はこの個体にはみられない特徴であり、平行沈線下に配された縄文は無節のLrによる。1067は幅狭い胴部文様帯の上限を斜刻帯で画し、下位は3本撚RL磨消縄文とする。口縁内面の斜刻帯は若干疎らに配されている。1068は胎土が若干異なる。口縁内面の斜刻みは大ぶりで、下限の沈線も頸部から押し広げるように工具が当てられており異質である。1069は外面の条痕を消すようにして、幅1.3cm程度の板状工具により縦位にナデ調整が施されている。1070、1071は深鉢胴部、前者は定型的文様構成をとり、クランク状文と下弦連弧文の折衷がみられる。3本撚LRによる磨消縄文。後者は同様に定型的構成の下弦連弧文であるが、その最下帯になる腹部に巻貝刺突を施した瘤状突起を配す。最上帯には刺突列、中央帯には巻貝回転擬縄文が充填されている。なお、擬縄文は細粒が回転方向に直交して連結するキャタピラ状を呈する。1072は注口付土器胴部片。上に刺突沈線、下に沈線を沿わせ、斜刻みを施した馬蹄形状凸帯が屈曲直上に配置され、その脇から刺突沈線文が描かれる。巻貝回転擬縄文の充填である。1073は九州地方・太郎迫式類似の波状口縁深鉢。口縁部は肥厚した内屈口縁状の外見を呈すが、屈曲部に別途粘土を貼付しているようで、本遺跡における一般的手法とは異なる。口縁部施文域は幅狭く、平行沈線が描かれ、波頂部には対弦の重弧文が配されている。球状に張る胴部には多条の平行沈線がひかれ、その間、最上帯は斜位短沈線列、以下に2条の蛇行文が描かれる。蛇行文の描き手法は下弦短弧線を連ねるものである。胎土中には直径1.5mm前後の砂礫が目立ち、その他の土器のそれとは様相を異にする。

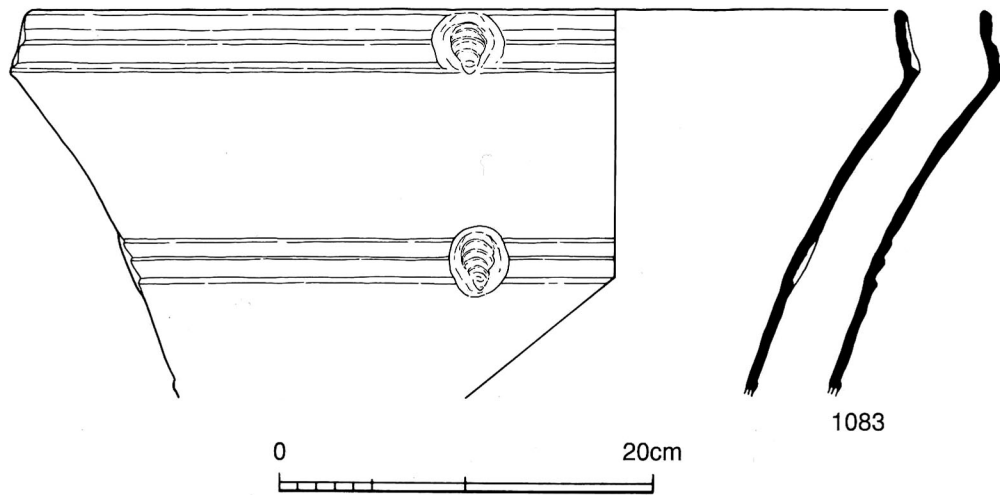
1074以下は凹線文土器。波頂部と思われるものは1074のみで、肥厚した山形の器面には口縁に沿って1本と、波頂下凹点に隣接する位置に杵状に凹線がみられるが、元住吉山II式ないし宮滝式のものとは異なるかも知れない。1075は平口縁深鉢。内屈する口縁部には3本の凹線がひかれる。1076、1077はともに4本の凹線が配された深鉢胴部であるが、前者はその間2帯に斜刻みを施す。1078は小ぶりの深鉢形土器で、内屈する胴部には4本の凹線をひき、最下の屈曲部に粘土を貼り付け巻貝扇状圧痕を施す。その上半周には3ヶの巻貝殻頂刺突が配されている。1079は広口鉢。口縁内面には1本の沈線、胴部には3本の凹線がひかれている。胴部最下、屈曲上には瘤状突起が付されており、その上には凹点を打つ。1080は外面施文をもつ皿形浅鉢。口縁部には外面に1本の凹線がひかれる。以下、縦列して3ヶの巻貝殻頂刺突が配されている。1081から1083は宮滝1式土器。いずれも幅広くとった器面に多条の凹線を配す内屈口縁で、1081、1083は断面階段状の「レ」字状凹線、ともに巻貝による扇状圧痕を施す。1081は圧痕前に粘土の貼付をしないものの、刺突下端の粘土がはみ出し、盛り上がっている。なお、1081の口



第263図 北・中央区縄文中層出土後期土器-3



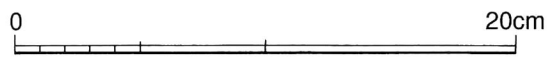
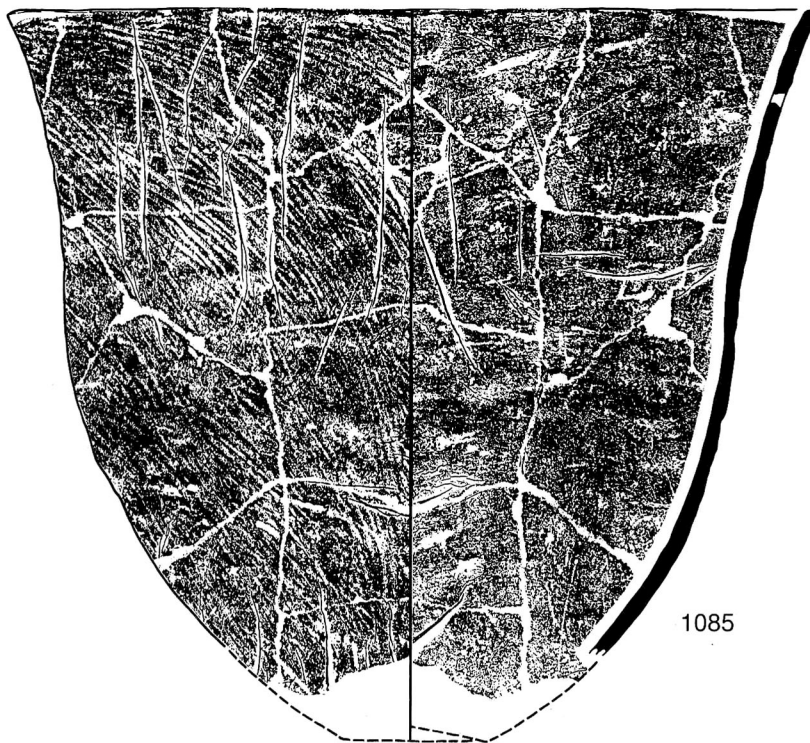
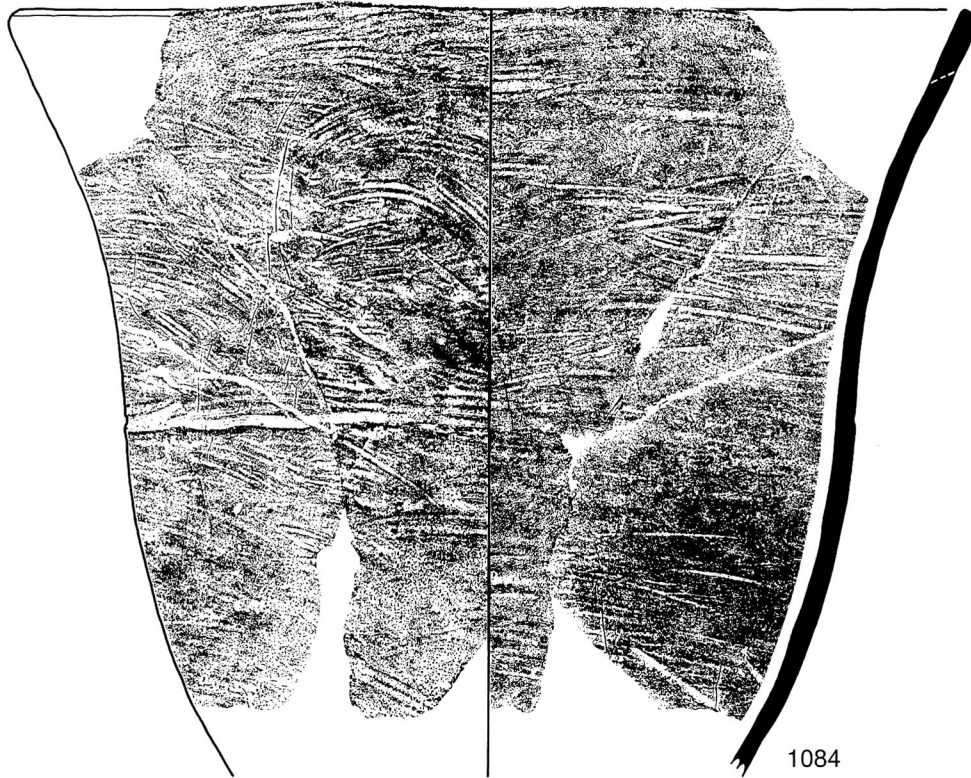
第264図 北・中央区縄文中層出土後期土器-4



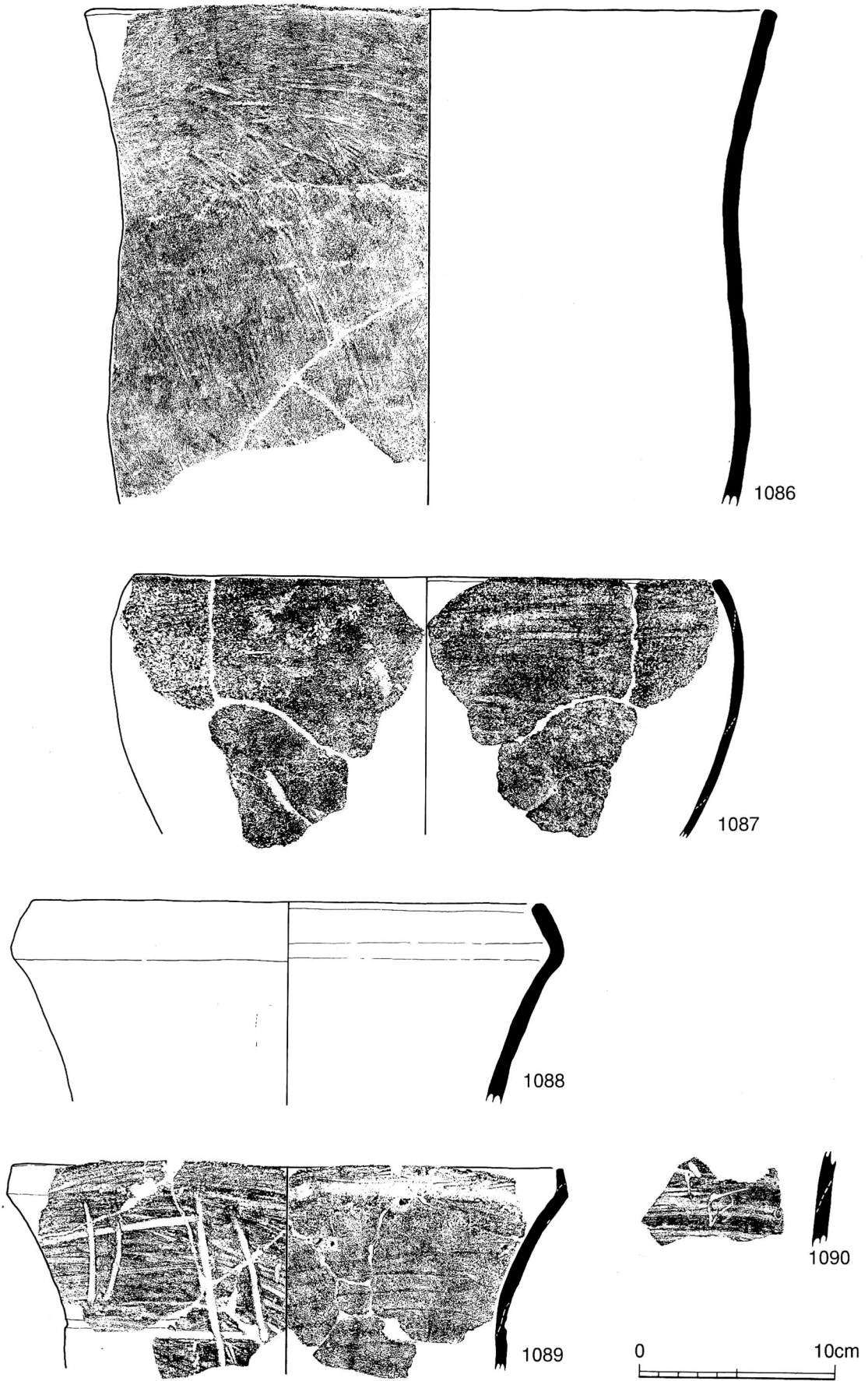
第265図 北・中央区縄文中層出土後期土器-5

縁は若干外反気味に作られており、その内面には1本の凹線がひかれている。

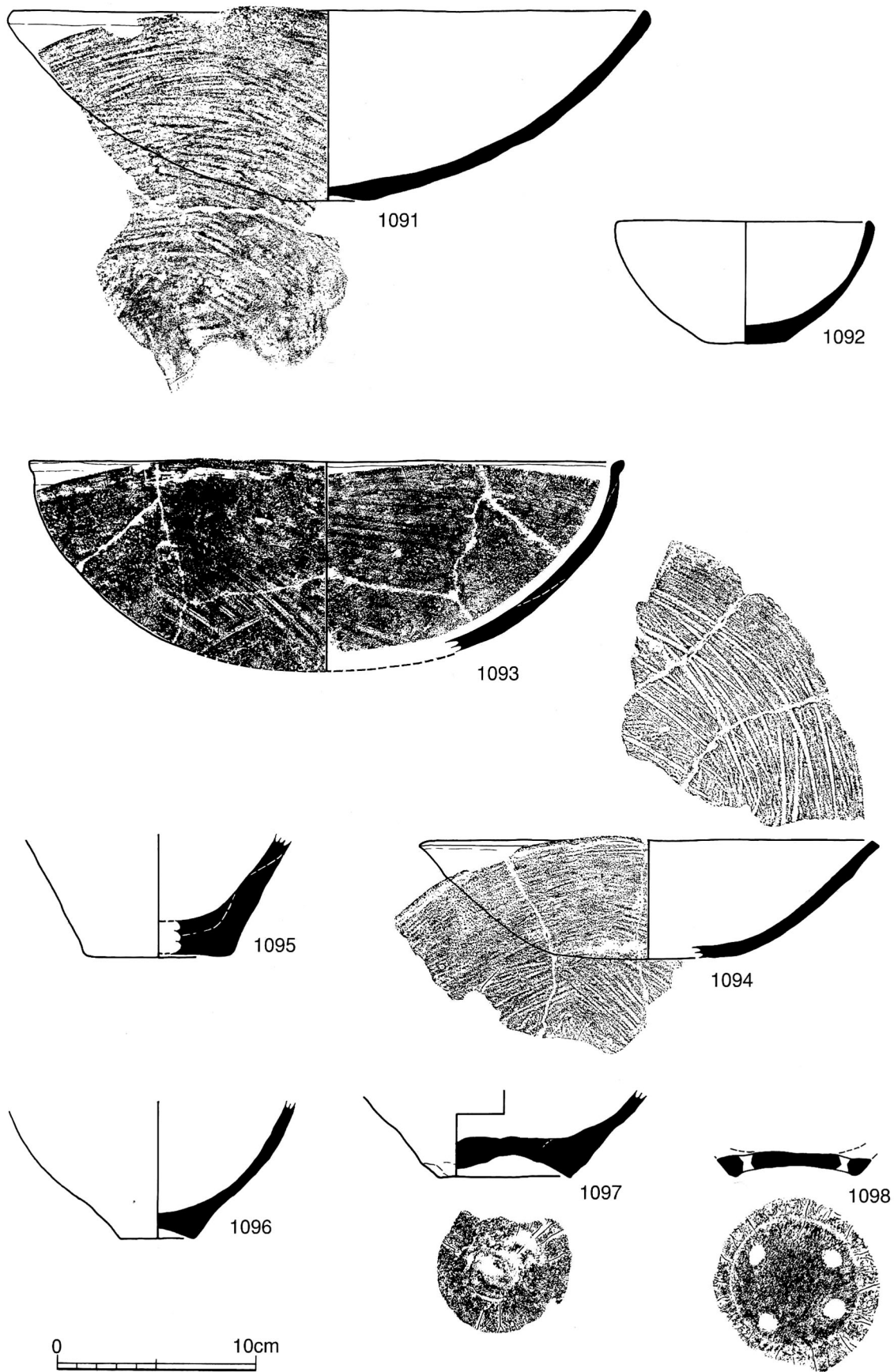
1084から1094は無文土器であるが、具体的にどの型式に対比されるものであるか示し得ない。1084は頸胴部界に一条の凹線をもつ広口深鉢で、それは右から左方へ描き足すようにひかれている。外面は巻貝条痕顕著、内面はなでられてはいるが条痕が残る。1085、1086も広口深鉢であるが、頸胴部は器体のくびれによってのみ違えられ、外面の条痕調整は体部下半から口縁部付近まで斜位に施されている。いずれの調整も右から左方移行。1086は長胴の特異な形態をとる。所謂生駒西麓産の胎土に似る。1087は内彎口縁の鉢形土器。内外面ともナデ調整。1088、1089は平口縁深鉢であるが、前者の口縁部屈曲は大きくとられ、その内面には指押さえを連続させている。内外面ともナデ。一方の1089は外面の条痕顕著な上、頸胴部界に一条の凹線を配し、そのほかに縦横方向交差して巻貝による凹線がみられる。1090は同様の体部破片で、巻貝によると思われる引っ掻き状のものが認められる。1091から1094は皿形浅鉢で、内外ともナデ調整による小型品1092を除き、外面には巻貝条痕が顕著にみられる。内面は比較的丁寧な調整が多い中で、1094は内面にも条痕が顕著に認められる。1093の口唇部は内傾して面取られ、口縁部は外面に肥厚気味となっている。1095から1098は底部。ヘソ状凹底の1097は他例にもれず、その中心が粗面であるが、その一部が外周平滑面とともに突出する。対応する内面には指押さえ痕が明瞭に残り、その整形時に生じたものか、内面からの粘土重填補強の痕跡と考えられる。1098は弱い凹底、底面に4ヶ所の焼成後穿孔を施したもの。年代比定に苦しむ資料である。



第266図 北・中央区縄文中層出土後期土器-6



第267図 北・中央区縄文中層出土後期土器-7



第268図 北・中央区縄文中層出土後期土器-8

第3節 石器

(山本)

1. 北区・中央区の石器 (第32、34、35表・第269～273図)

北区・中央区中層では、打製石器58点、磨製石器13点が出土した。

楔形石器は35点と打製石器の約60%を占め、石鏃の8点(13.8%)がそれに続く。また楔形石器の74%がB類で、A類の数量の4倍以上である。この割合は南区下層(5期)の割合とほぼ一致する。

石核については円礫素材のR2型、分割礫素材のD1型、D2型が認められる。

2. 南区の石器 (第33、36、37表・第274、275図)

南区では打製石器39点、磨製石器2点が出土した。

ここでも楔形石器が打製石器の67%を占め、26点と最も多く出土している。類型別で見ると、B類が80%である。石鏃は7点と数少ないが、B類・C類がすべてである。

第32表 北・中央区縄文中層石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	8	13.8	AX	3	23.1
DR	0		SS	0	
SC'	1	1.7	HS	1	7.7
SC	5	8.6	SD	3	23.1
RF	2	3.4	SH	3	23.1
UF	3	5.2	SP	0	
PS	35	60.3	SW	3	23.1
CR	4	6.9	その他	0	
DM	0				
小計	58	-	小計	12	-

第33表 南区縄文中層石器組成表

打製	点数	%	磨製	点数	%
AH	7	17.9	AX	0	
DR	1	2.6	SS	0	
SC'	0		HS	1	50.0
SC	4	10.3	SD	0	
RF	0		SH	0	
UF	0		SP	0	
PS	26	66.7	SW	0	
CR	1	2.6	その他	1	50.0
DM	0				
小計	39	-	小計	2	-

第3節 石器

第34表 北・中央区縄文中層石鏃類型分類表

	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1	1	12.5	B1	1	12.5	C1			D1			E1		
A2	1	12.5	B2			C2	1	12.5	D2			E2	1	12.5
A3			B3			C3			D3			E3	1	12.5
A4	1	12.5	B4			C4			D4			E4		
A5			B5	1	12.5	C5			D5			E5		
A計	3	37.5	B計	2	25.0	C計	1	12.5	D計			E計	2	25.0

第35表 北・中央区縄文中層楔形石器分類表

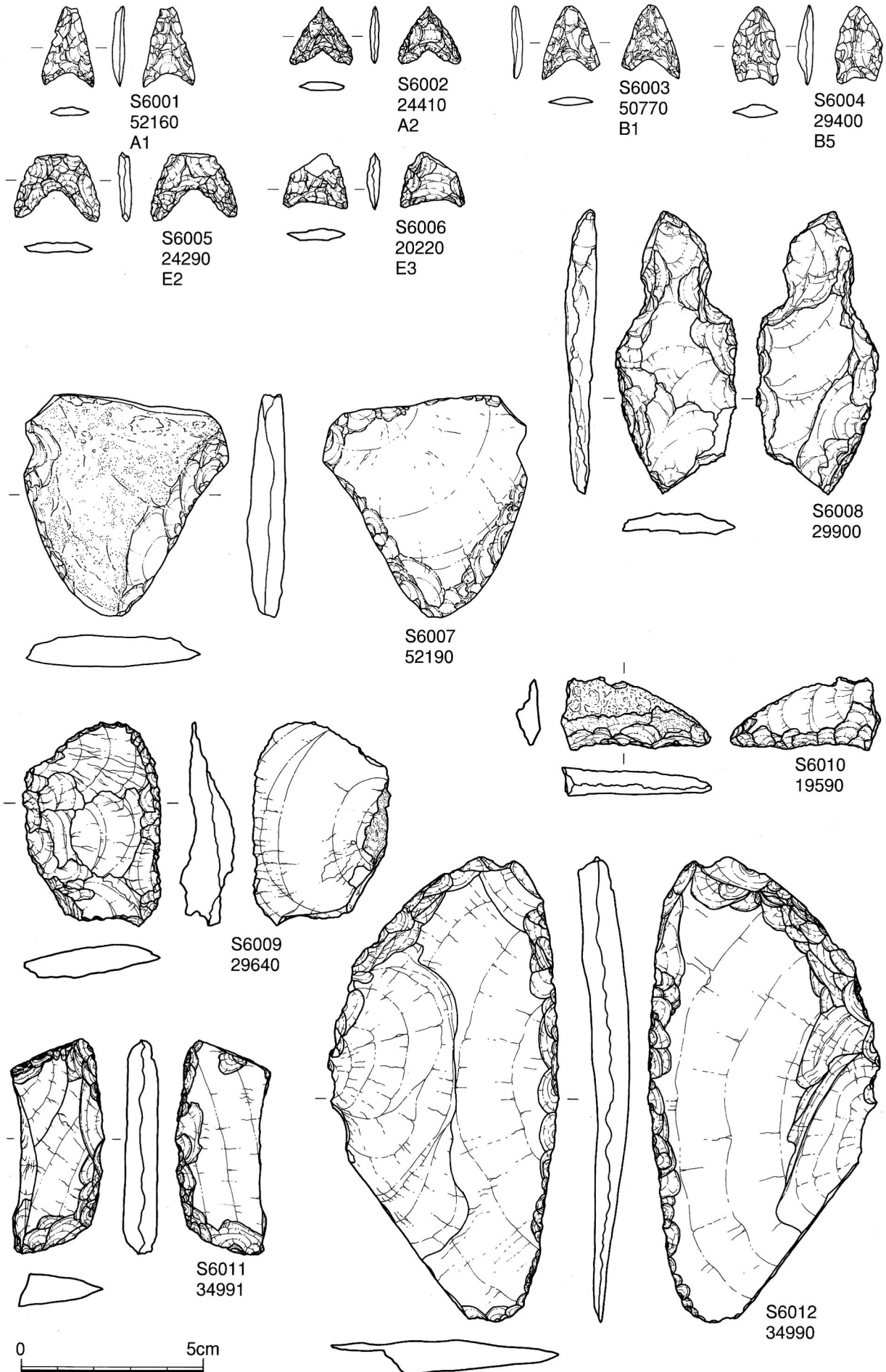
	点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1	14	40.0	S1	2	5.7
A2			B2P	6	17.1	S2	1	2.9
A3			B2L	2	5.7			
A4	6	17.1	B2V	2	5.7			
			B3	2	5.7			
			B4					
			B?					
A計	6	17.1	B計	26	74.2	S計	3	8.6

第36表 南区縄文中層石鏃類型分類表

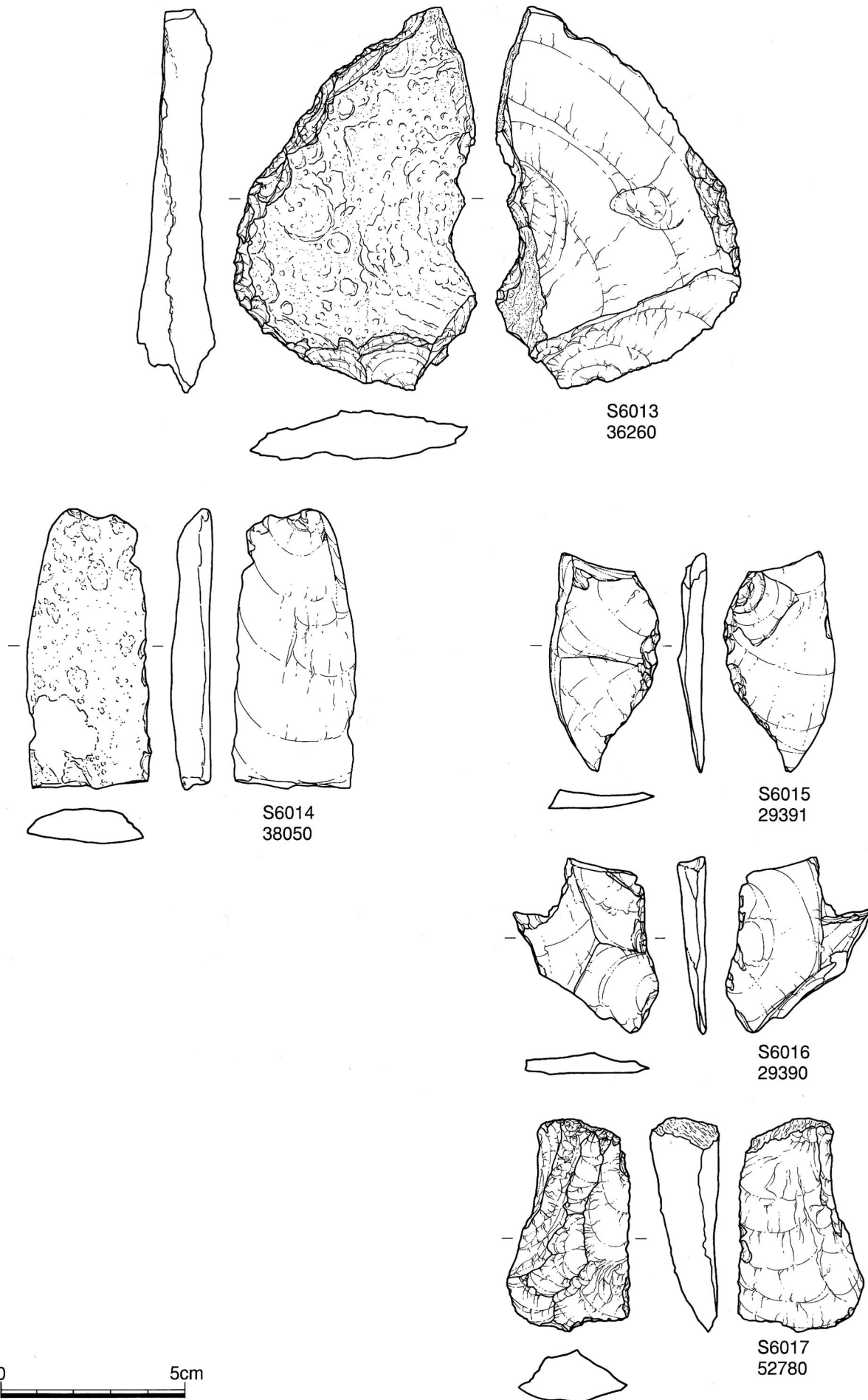
	点数	%		点数	%		点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1	1	14.3	C1			D1			E1		
A2			B2	2	28.6	C2	2	28.6	D2			E2		
A3			B3	1	14.3	C3			D3			E3		
A4			B4	1	14.3	C4			D4			E4		
A5			B5			C5			D5			E5		
A計			B計	5	71.5	C計	2	28.6	D計			E計		

第37表 南区縄文中層楔形石器分類表

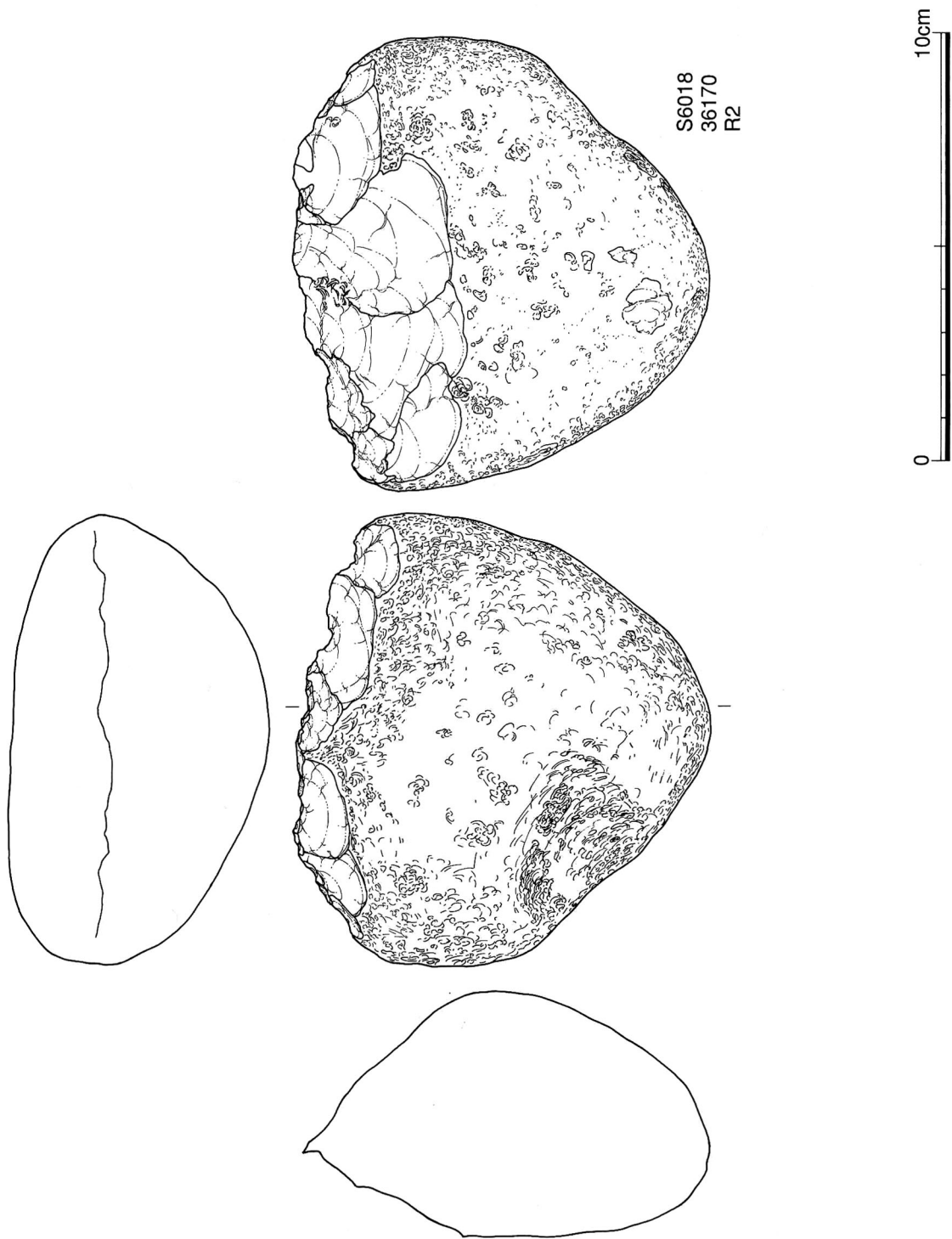
	点数	%		点数	%		点数	%
A1			B1	8	30.8	S1		
A2			B2P	4	15.4	S2	1	3.8
A3	1	3.8	B2L	5	19.2			
A4	3	11.5	B2V	2	7.7			
			B3	2	7.7			
			B4					
			B?					
A計	4	15.3	B計	21	80.8	S計	1	3.8



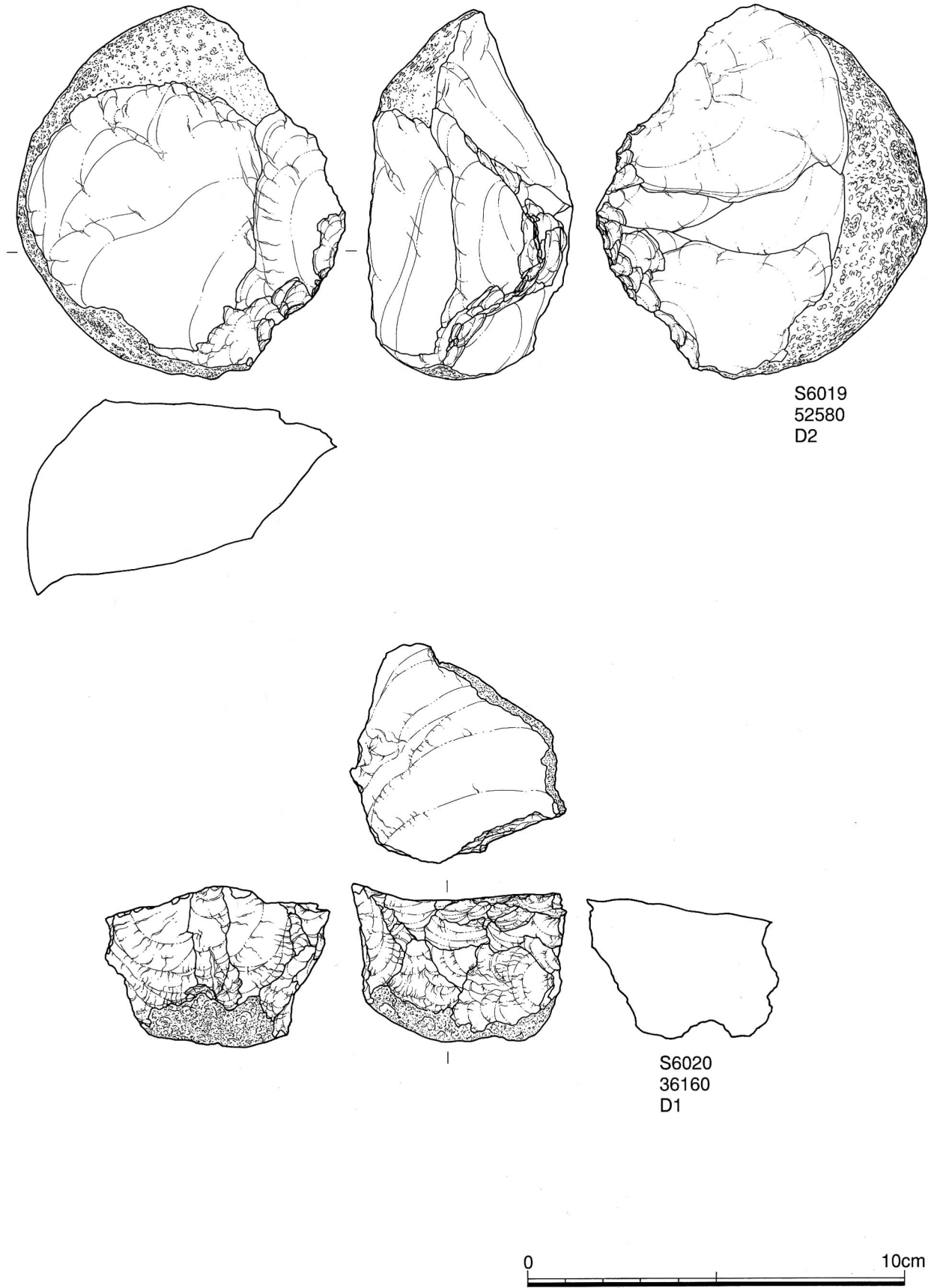
第269図 北・中央区縄文中層出土石鏃・石匙・削器



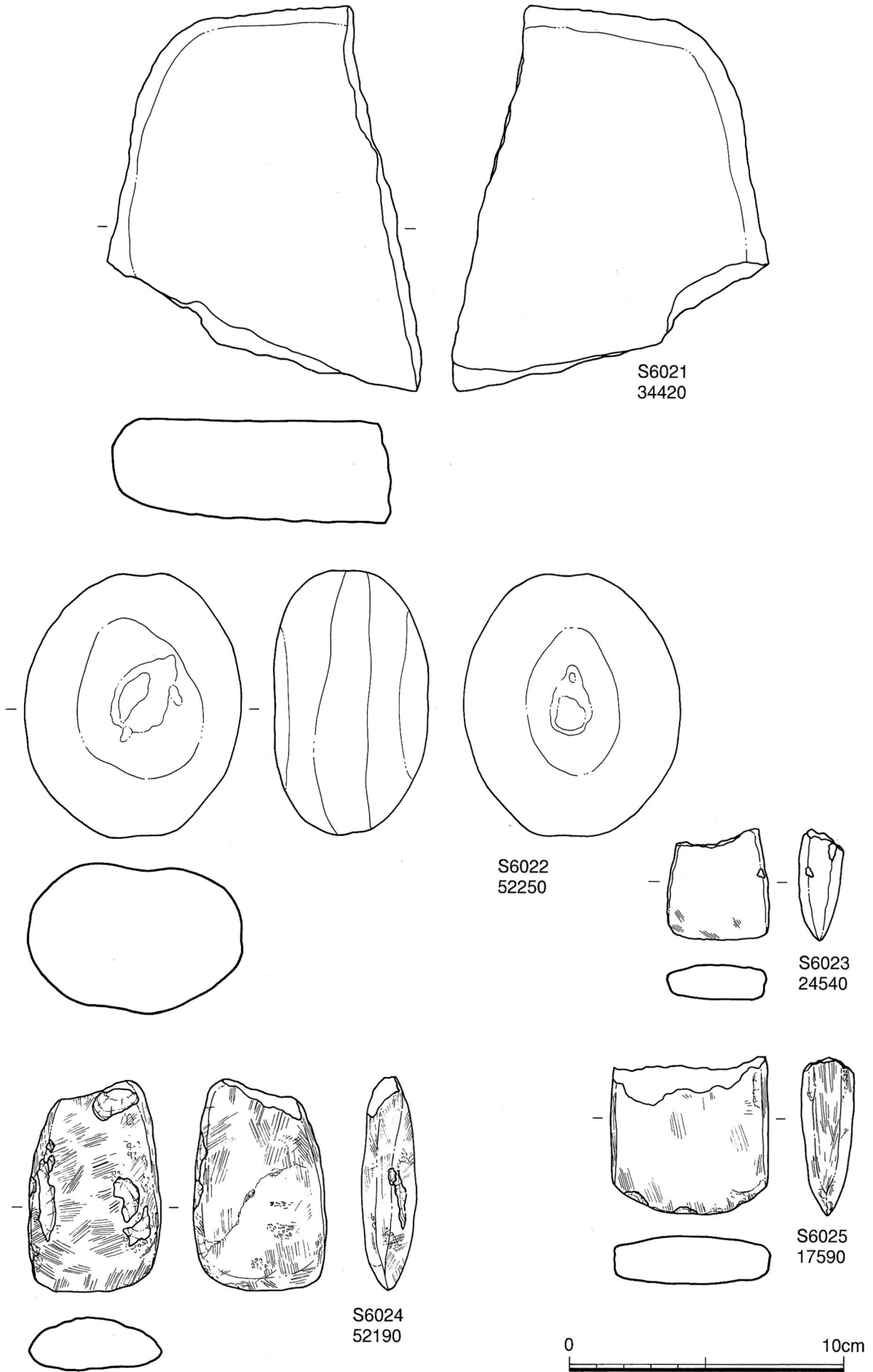
第270図 北・中央区縄文中層出土加工痕のある剥片・使用痕のある剥片



第271図 北・中央区縄文中層出土石核-1



第272図 北・中央区縄文中層出土石核-2



第273図 北・中央区縄文中層出土石皿・凹石・石斧